D）神出・拍子が池窯跡採集の須恵器

原省三氏が「本校に在籍中「お別れ遠足」の際採集、その後寄贈された」とのコメントが添えられた完形の須恵器小皿（54）で、口径7.1cm、底径5.3cm、器高1.25cmである。

このほかに、是枝美登里氏が寄贈された須恵器鉢の底部片と体部片の各１点があるが、図化できていない。

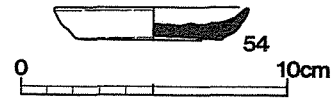
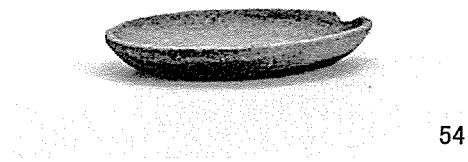


図 44　神出・拍子が池出土の須恵器



また、以下の資料もあるが、いずれも図化できていない。

E）端谷城跡採集の平瓦片

西区櫨谷町寺谷の端谷城跡で竹内氏・石井氏が採集され、寄贈された須恵質の平瓦の広端隅部片である。凹面に「櫨谷城址」の油性ペン描きがある。凹面・凸面、広端面、側面のいずれもがナデで仕上げられる。

図 45　明石川採集の石製品

F）西神ニュータウン内採集の弥生土器

弥生時代後期かと推定される弥生土器の脚基部の小片で、摩滅が顕著である。寺本宏政氏の寄贈による資料で、採集地点の詳細な記録はない。

G）明石川採集の石製品

磨製石器と認識され、採集されたものと思われるが、３点ともにいずれも石器とは認定できない。記録として、写真のみを掲載する。（山本）

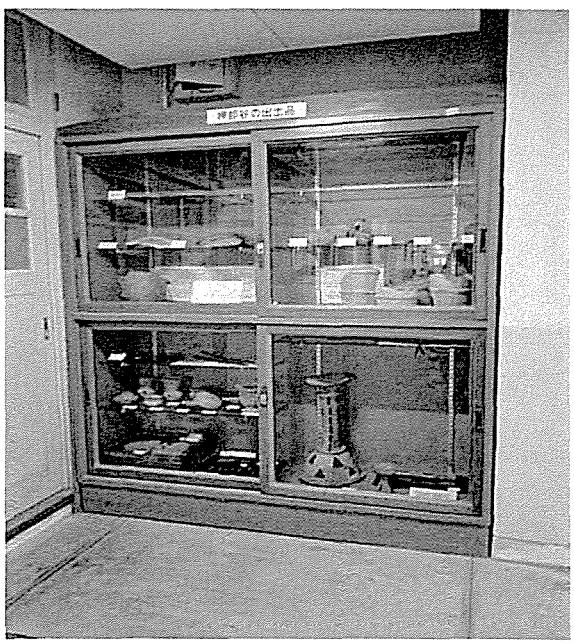
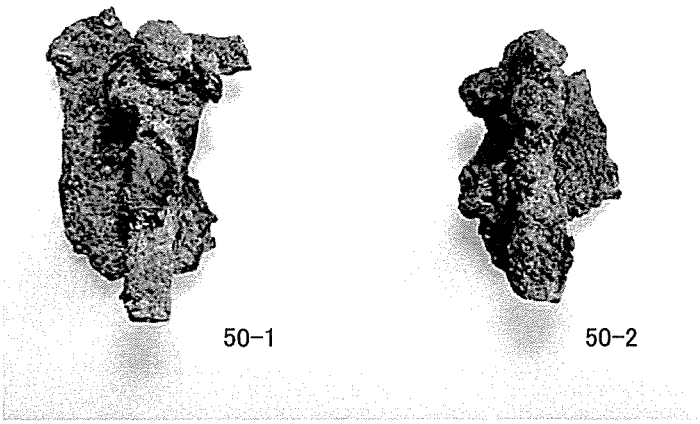


図 46　整理後の展示ケース状況（2020.08.29 現在）



C）堅田１号墳出土の須恵器

中谷氏が別途報告している「雄岡山周辺の古墳」に記載があり、法量が合致しないものの、堅田１号墳の須恵器短頸壺と提瓶として報告しておく。上述した広野古墳群の資料である確証もなく、肉眼観察では須恵器そのものの胎土が異なり、焼成もやや甘いという特徴が２点で共通すること、広野古墳群の資料とは大きく異なる印象から判断した。

52は口径6.9cm、体部最大径13.2cm、器高8.8cmの短頸壺で、底部外面に回転ヘラ削り調整が顕著である。53は口径5.7cm、体部最大径12.1×7.7cm、器高13.6cmの提瓶で、肩部には把手が退化した直径約１cmの円形浮文が施される。体部は４条の同心円の凹線文で飾られ、一方は中央が回転ヘラ切り未調整で、この周縁は３周分の回転ヘラ削り調整で仕上げている。

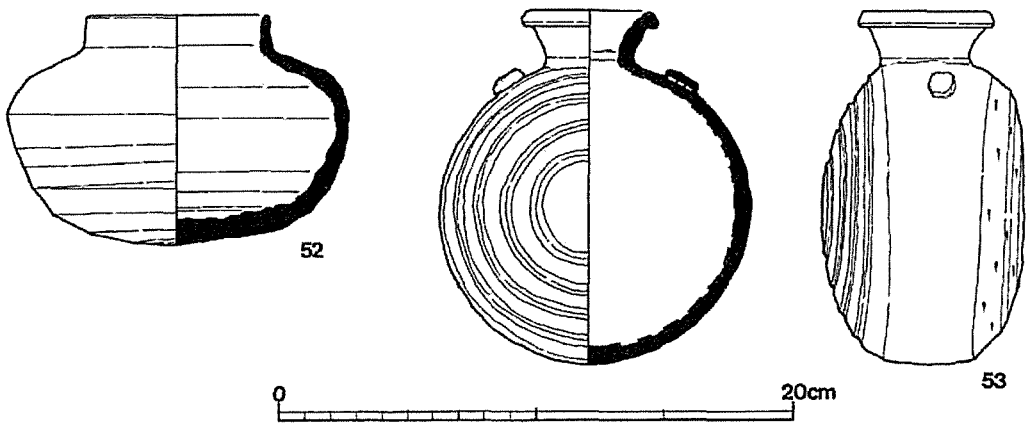
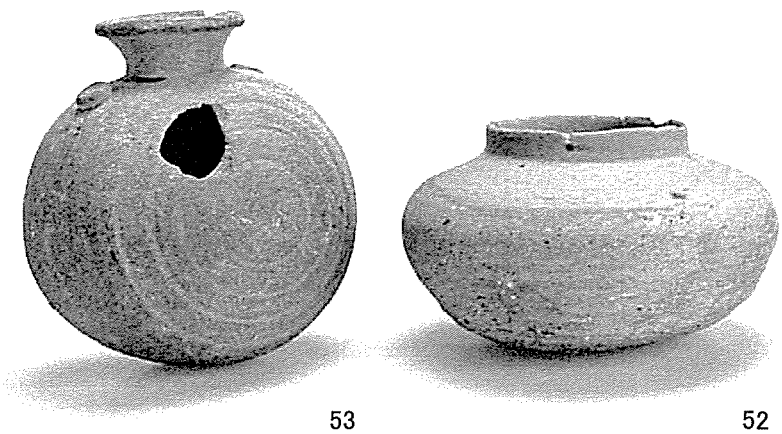


図43　堅田1号墳出土の須恵器



B）道心山古墳採集の鉄製品と須恵器

中谷氏が報告した資料で、片袖式横穴式石室を有する道心山１号墳から北西方向に離れた２号墳から出土した鉄製轡と、台地の麓斜面から出土したとされた須恵器甕がある。いずれも藤田一市氏による寄贈資料である。

50は鉄製楕円形鏡板付轡の破片と推定している。銜の連結部が全く確認できず、全形を窺うことはできないものの、鏡板の一部と円環から延びる両側の引手が残存する。50－２の鏡板には、鏡板を貫くフック状の金具が確認できる。

51は須恵器甕である。口縁部は２／３程度残存するが、体部は１／５が残存するに過ぎない。口径23.6cm、体部最大径47.2cm、残存高23.3cmである。口縁部は斜上方に延び、玉縁状に大きく折り曲げて仕上げる。体部は偏球形となるのか、外面は斜格子風叩きの後カキ目を施すが、深濁緑色～暗乳褐色の自然釉を厚くかぶる。体部内面は最大直径約５cmの同心円文叩きのアテ痕が明瞭である。

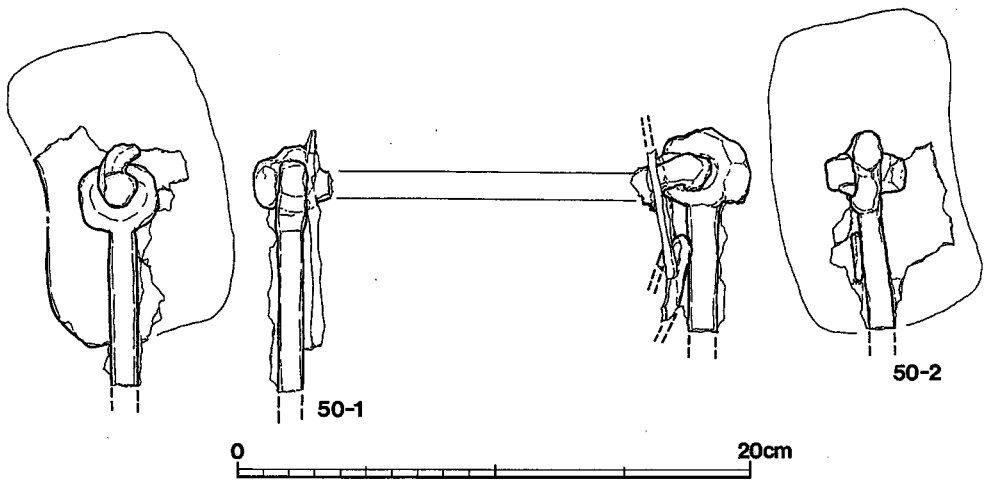


図 41　道心山2号墳出土の鉄製轡

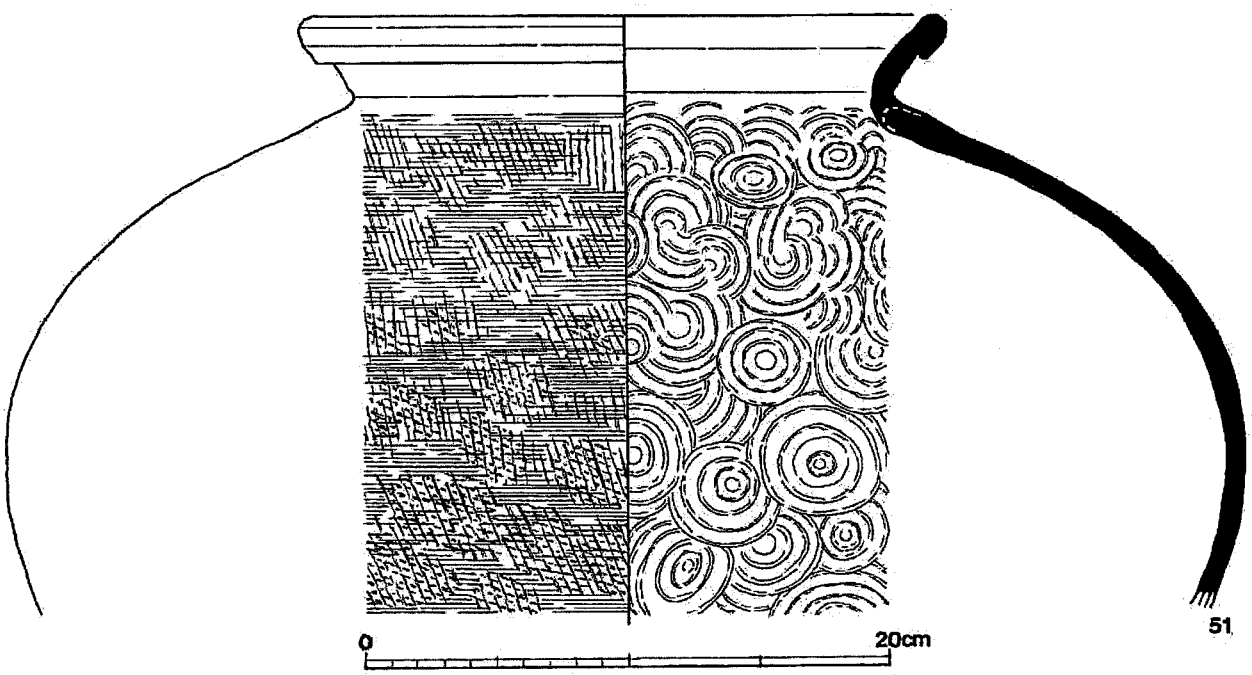


図 42　道心山古墳出土の須恵器甕

【付載】

8. 押部谷中学校所蔵の考古資料

上記してきた広野古墳群出土の資料のほかにも、地元の方々が寄贈された考古資料がいくつか所蔵されているので、ここであわせて報告する。

A）白水瓢塚古墳採集の埴輪片

49は大型の朝顔形円筒埴輪と推定できる破片で、現存高24.8cm、復元径52.8cmである。内外面とも5～8条／cmのハケメを左上方へ施している。突帯は断面方形で、約1.5cm前後突出する。左上りのハケメパターンは、西区伊川谷町潤和の白水瓢塚古墳円筒埴輪と共通し、白水瓢塚古墳の円筒埴輪の特徴的な手法(a)とされているものであることが判明した。

白水瓢塚古墳は、明石川の支流である伊川中流域西岸、標高約60mの丘陵上に立地する全長56mの前方後円墳で(b)、白水瓢塚古墳の円筒埴輪はⅠ期4段階とされる(c)。本資料は、白水瓢塚古墳で採集され、運び込まれたものであろうか。寄贈者等の詳細は不明である。（阿部）

(a) 黒田恭正「第4章　2. 埴輪」『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会（2008）

(b) 安田滋編『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会（2008）

(c) 鐘方正樹「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号　埴輪検討会（2003）

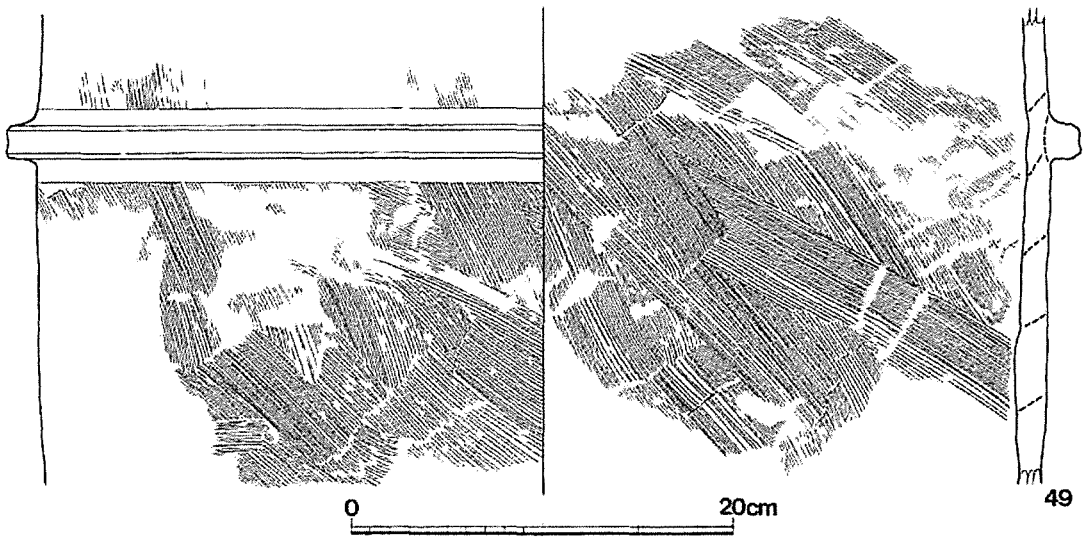
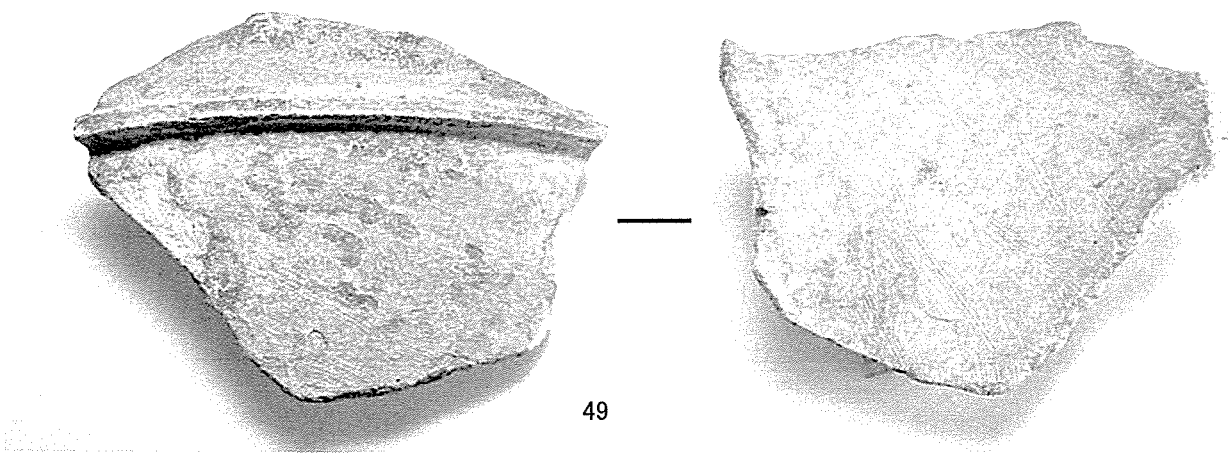


図40　白水瓢塚古墳出土の朝顔形円筒埴輪



※堅田古墳　　分布図（図38）　掲載のみ

中谷氏の別の記録よりその概要と遺物紹介について記載しておく（図39）。

堅田古墳　　平野町堅田字口山ノ谷

堅田神社の境内林中にあり。

第１号墳　円墳　竪穴石槨　基底部径10m

高1.5m　全壊されて僅かに底部の一部を存す。

出土品　坏４　蓋坏５　高坏６

盌１　坩２　蓋（身を欠けるもの）１

提瓶３　鉄鏃片３

出土品保管場所　宝珠寺

第２号墳　円墳　竪穴　底部径11m　高2.7m

盗掘とは思われないが僅かに発掘の痕を存す。

第３号墳　円墳　竪穴　径８m　高1.5m

盗掘の痕あり　しかし、中心部に触れていないものと認める。

墳形がくずれている。

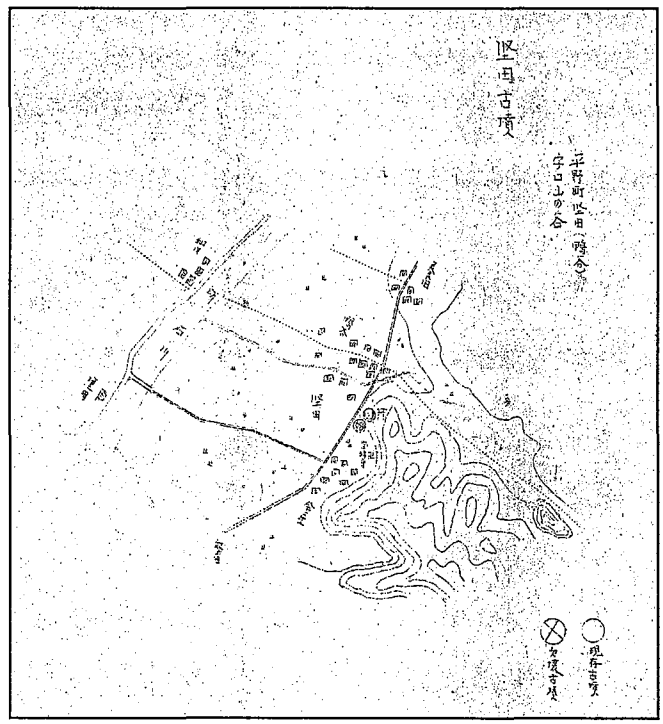


図 38　堅田古墳　（31 頁）

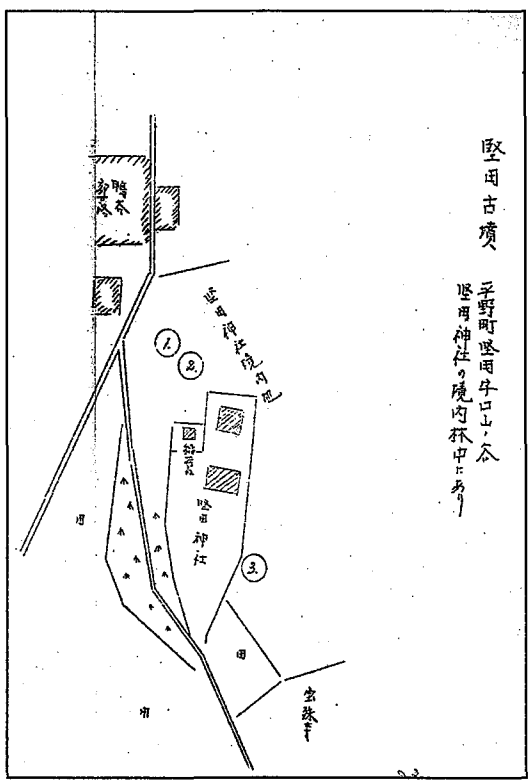
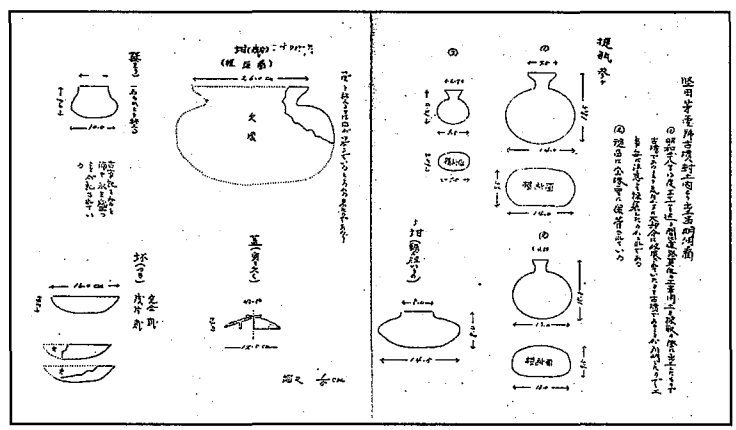


図 39-1　堅田古墳　分布図



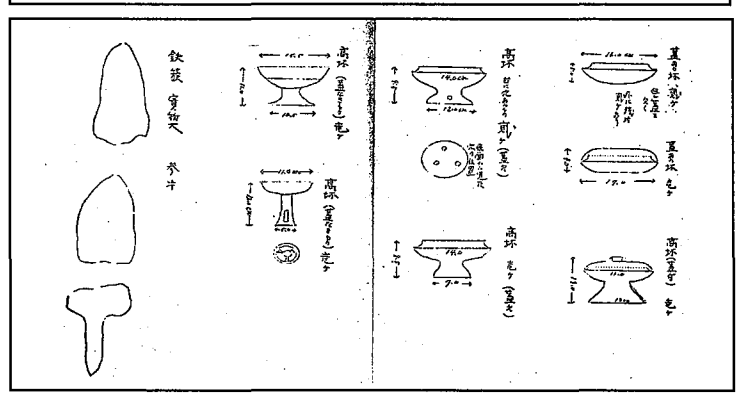


図 39-2　堅田古墳　出土遺物

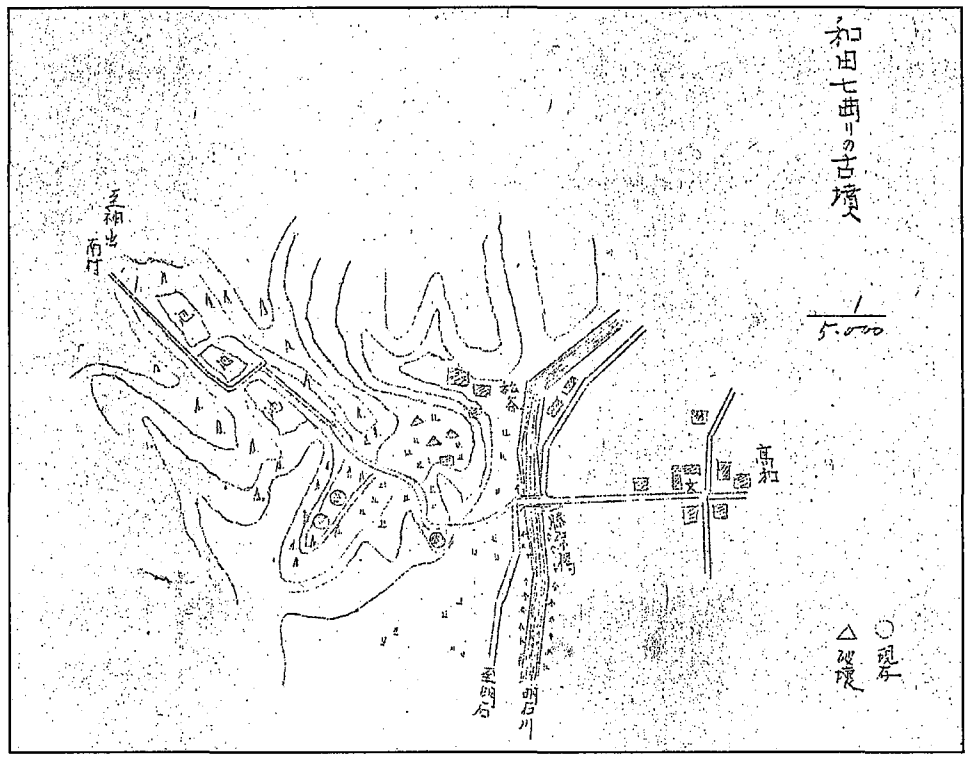


図36 和田七曲りの古墳
（27頁）

道心山古墳　　附図30頁

近江寺の北山嶺が西に延びて道心山となり、その西端の台地がこの古墳の所在地なのである。

第1号墳は径15m、高4.8mの円墳で、西面部の羨門から5.5mの羨道の奥が玄室で、鉞丁型になっている。玄室は1.8に3.35m、高2.8m、木棺であったらしい。礫床部からの硝子質の小玉が見つかった外、何も出土していない。人の出入が自由になっていたので、散逸したものらしい。羨道部の天井石が抜けているのは、養田の光明寺の礎石に運び出されたといういい伝えが残っている。

第2号墳からは馬具の一部が出土している。何れも地主の藤田一市家に□□

この台地の麓から径40cmあまりの甕が掘り出されたが、こわれてしまっていたので、今はない。

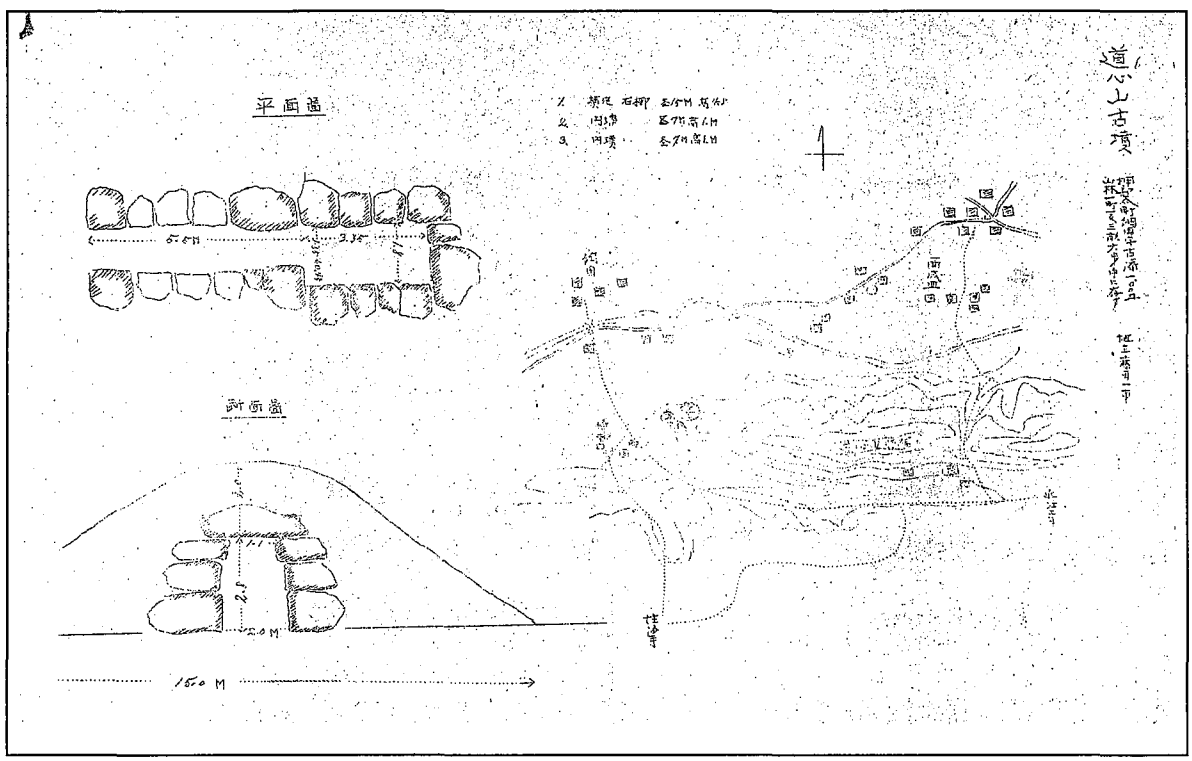


図37 道心山古墳　（30頁）

雌岡山附近の古墳　　附図25頁

第１号墳は竪穴石槨の円墳であるが、中央部が発掘されている。北側の周辺から道路開墾の際、蓋坏１個、提瓶１個の出土を見たので、神出神社に保存されている。

第２号墳は「にいづか」と称えられる横穴式石槨をもつ大墳で、神出神社の御旅所となっている。

第３号墳は稲荷社祠の西隣にある円墳で、中央部に発掘の痕跡がある。

南麓ゴルフ場の南には無数に古墳がちらばっていたが、開墾されてしまって、今日ではその位置や大きさ、その基数等知る由もない。田畑を耕すと到る所に土器の破片が見受けられるようである。10基は横穴式石槨もあったとのことである。

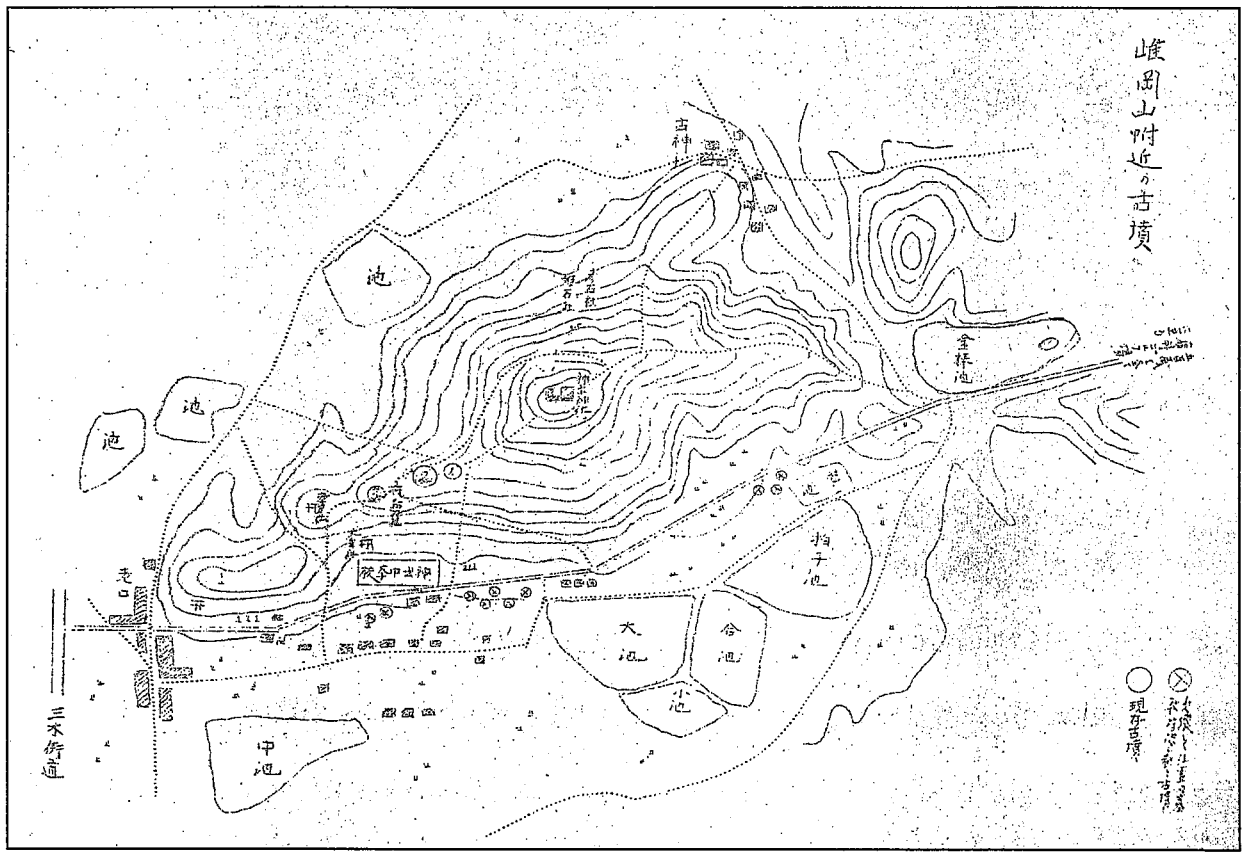


図 35　雌岡山付近の古墳　（25 頁）

七曲り古墳　　附図27頁

高和の藤原橋を右岸に渡ると、北から山の裾が河岸に通って来ている。この山を上って神出の東村に通ずる道を七曲りと称えられ、屈曲の多かった山道であったことが知られる。

河岸から50～60m上ると、台地になっているので、山田川疎水に加入して開墾した際、この台地に在った古墳が壊されてしまったが、周辺にあるのは幾つか。第１、第２の両墳は山頂に在って径12m、高１mばかりの小墳で、２基が６mあまりの間隔で行儀よく並んでいる。山頂で無立木であったため、年々表土が流れ落ち、礫床ではなかろうかと思われる様に石が地上に露出しかけている。

第３号墳は径７m、高1.2mの円墳であるが、雑木が密生するため、比較的完全に原形を保持している。この地点が道路の屈曲地点なので、改修の測量杭が塚の近くに打たれているから近く壊されるかも知れない。

（※図36で示された６号墳は1984年３月に緊急発掘調査実施後消滅している。 千種浩「七曲り６号墳」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986）

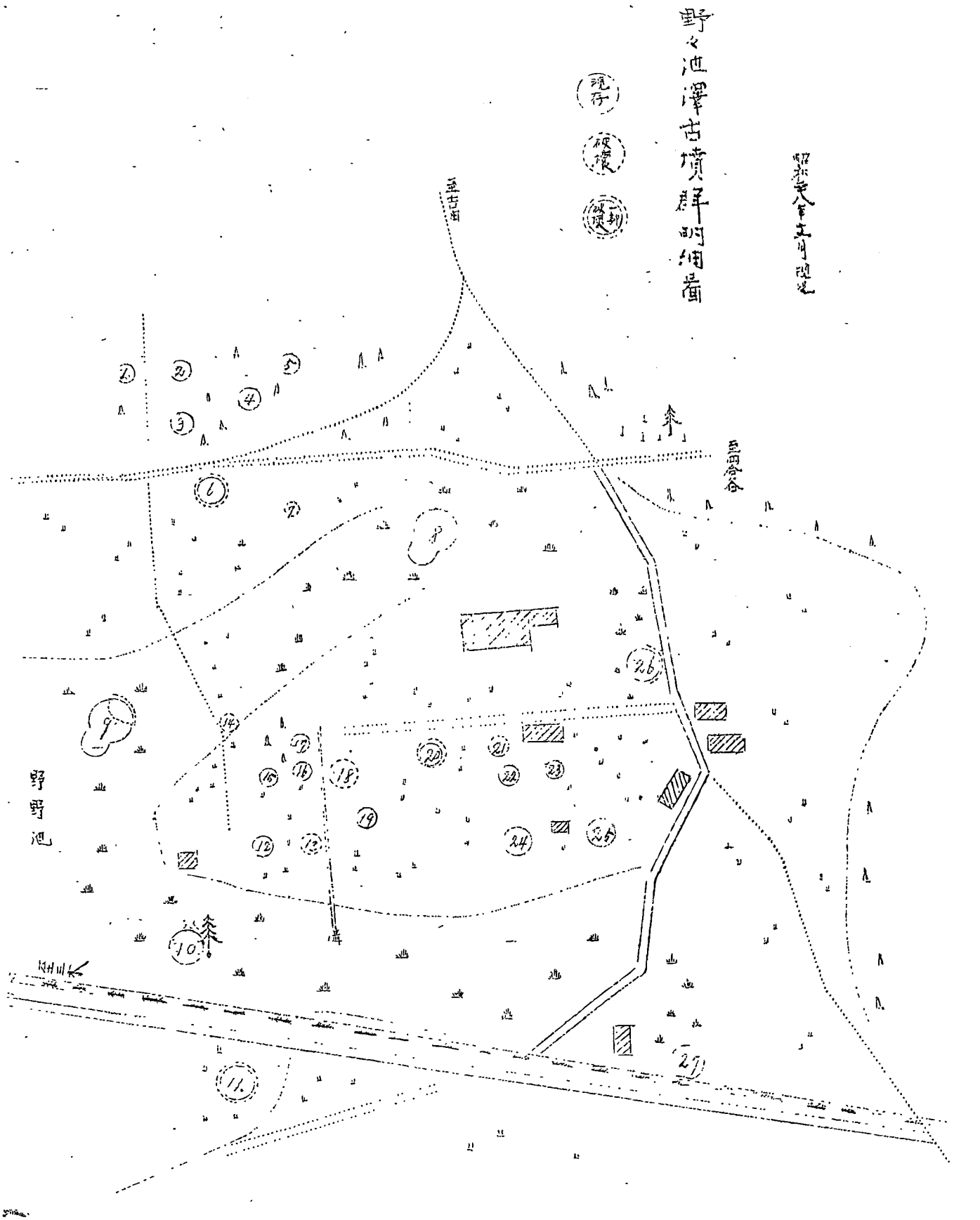


図 34　野々池澤古墳群明細図　（29 頁）

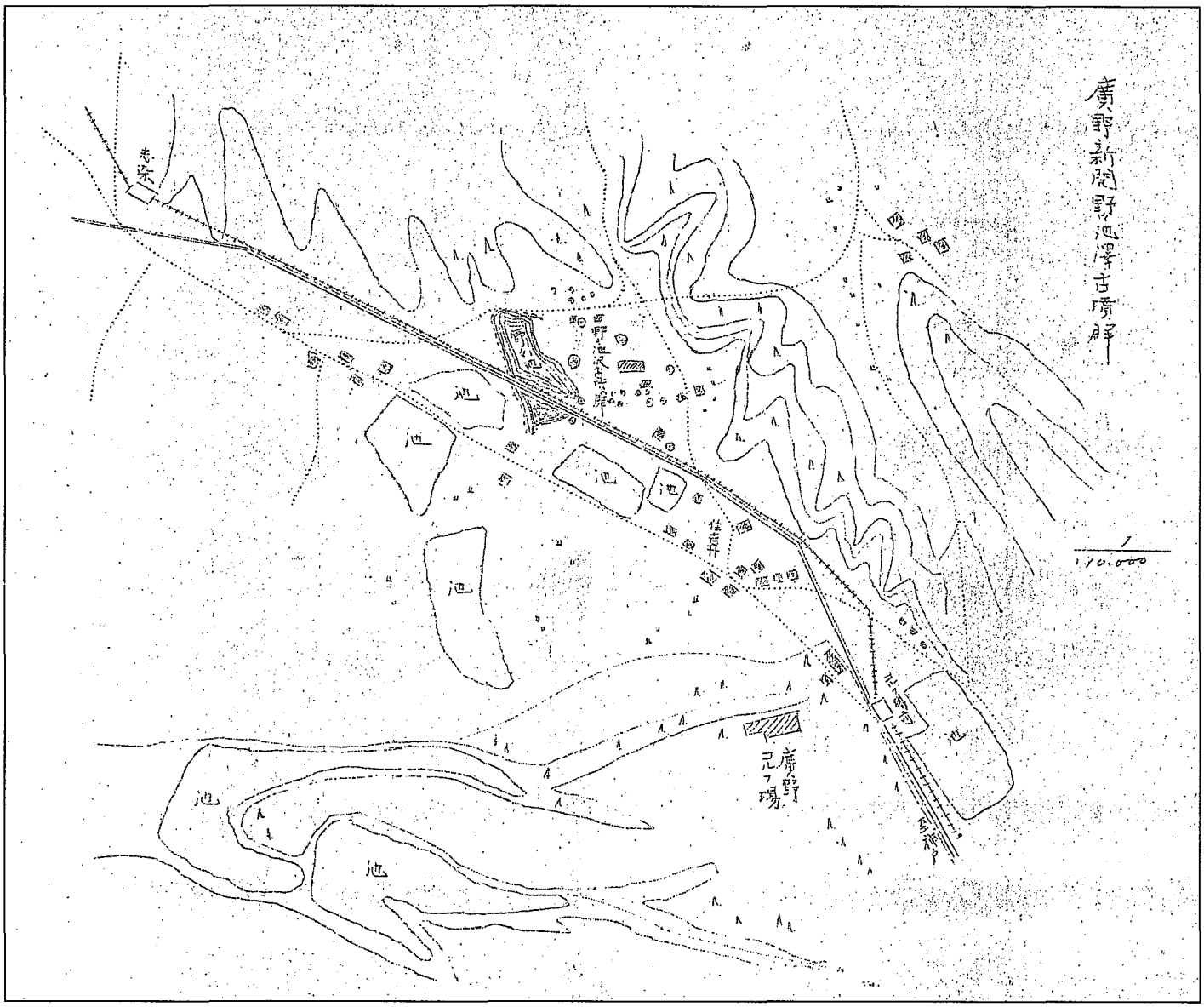


図 33 廣野新開野々池澤古墳群　(28 頁)

第８号墳は昭和26年神戸高校が許可を受けて後円部を発掘し、刀、鏃、馬具（杏葉鈴）等が出土した。現品は神戸高校に保管されている。

第18号墳は横穴式石槨の古墳であったが、この地帯には岩石が少ないので、墓地の名前石の台、廣野開墾記念碑の基台石等に取り去られ、最後には四合谷の某家の石垣用に石工をして現場で割り石にして持ち帰られてしまって、今ではその基部と推定される二、三残っている程度である。出土品としては何等呈すべくもないのは遺憾である。

第21号墳は半壊、出土品は残墳部に埋蔵して供花が立てられている。

第20号墳は牧場工事の壁土用として壊されつつある。現に牧場の建物が建築されつつあるので、来春あたりには一部は放牧場となり、一部は甫場となるので、中に、こんなものがあっては耕作に邪魔になるので、開墾したいといっているから、昭和29年頃から第15号から25号墳の11基は壊されてしまったのではなかろうか。

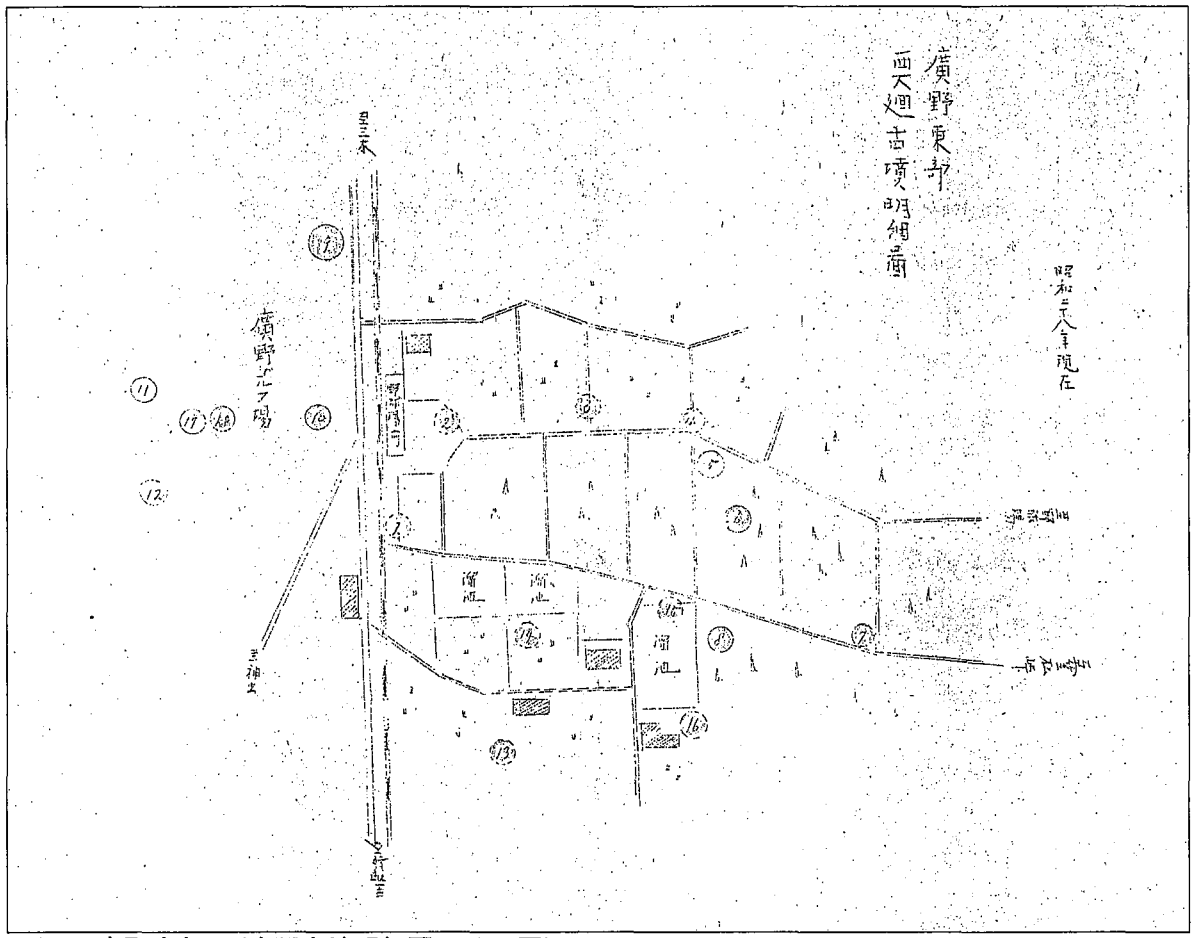


図 32　廣野東部　西大廻古墳明細図　（23 頁）

廣野野々池澤古墳群　　附図28頁

神戸電鉄粟生線の廣野ゴルフ前駅と志染駅との中間で線路の北側に古墳が群集している。所属は美嚢郡志染村廣野新開字野々池及字野々池澤である。九鬼家が所有されていた折は松林であったため、一先年来の古墳もよく原形を保たれて来たのであったが、大東亜戦のため、林は伐採され、農地法によって開墾適地として処分されたがため、年毎に開墾されて27余の密集古墳が壊滅の危機にさらされている。第26号墳、第27号墳の両墳は大型の墳であったが為め、淡河川疎水工事用の煉瓦がこの地で焼かれた際登り窯築造の基台に利用されて原型を壊されている。その中で、第26号墳はその後壁土用として墳土が採取されつつあって、三分の一位は潰されている。土を切り採った断面から青いものが見えていたので、掘って見ると、勾玉であったので、砂川氏が保存されていたが、今は志染村の公民館で保管されている筈だ。装身具と認むべき勾玉の出土から見ると、この墳は玄室部がこわされつつあることが知られる。断面の状態から見て、石槨を持たない墳であることが知られる。明細図には記入していないが、26、27両の一直線上で、第27号墳の南方新に築造された池中に矢張り焼窯に利用された墳がある。第７、13、14の三墳は殆んど畑になってしまった。第６、16の２墳は表土が開墾されて円形の段々畑に変っているが、玄室部はまた無難と認められる。

第８、９の両墳は前方高円型で、雄岡山周辺の古墳中では規模は大ではないが、形の整ったもので、古墳の一典型として保存したく思われる墳である。第９号墳は後円部の一部が壁土として逐次壊されつつあって、玄室部に直達している感がする。この周辺には円筒埴輪が埋蔵されている。野々池が満水すると、池中に浮いた様になるが、野々池は洪水時でないと満水せない。

雄岡雌岡両山の中間地帯に散在する古墳　　附図24頁

神出町の五百蔵部落から古神の方へ東西に横たわっている高さ50m内外の一連の丘を横山という。この横山の東部で妙見山といって五百蔵を開拓した五百蔵氏が氏神として奉祀した仁賢顕宗神社がある。この岡の西の鞍部から50mばかり中央の岡に上っていくと、南の斜面に径12m、高2mばかりの円墳が、樹齢30～40年生と思しき松林中にある。墳上に上ると、無慚にも南面から中央部を巾3m、深さは地表に達し、区切り開かれてしまっている。これは大規模な盗掘である。竪穴であって、石槨はなかったらしい。石片一つも残って居らぬ。これが第1号墳である。

この墳を南に下ると、金棒池澤に達する。金棒池中に前方後円の形に近い古墳が1基浮んでいる。これが第2号墳で、後円部の中央が大規模に盗掘をうけている。大正11年に福原潜治郎氏が枦谷の史跡を踏査された記事の中に「光り松の古墳より先年村の避病院建設の時多くの土器を出し居れるが、この古器の手法の精巧たることは、雄岡雌岡の中間にある金棒池の古墳より出でし斎部土器の手法と同一にして一種雄健の手法になれるより土師氏の一族が、この地方に住みたりしものなるべきか云々」とある。より見ると、当時その出土品が誰かの手にあって福原氏が見られたらしい。この墳から見事な玉が出ているということも聞いている。

第3号墳は神出町の東村字薬師谷の中央にあって、押部谷の人たちは狐塚と呼んでいる巨石が積み重ねられているので、その間隙が野狐の棲穴に都合がよいのか、狐がこの塚によりつくので狐塚と呼ぶのだといっている。猟師達の仕業なのか、石の周囲が掘りかえされたあとが残っている。基底部の径10m、高1.8mばかりの円墳で、横穴式の墳としては石の数が少ないし、竪穴石槨としては余りにも石が大き過ぎる感がある。これも庭石などに搬出されたのかも知れない。

第4号墳は雄岡山の西麓平坦な岡の中央に径12m、高1.5m、竪穴石槨と認める墳で、これも中央部が盗掘されて、石の大部分は搬出されてしまっている。

この地帯に在る古墳は何れも大規模な盗掘をうけているが、第3号墳だけは巨石を使用してあるため、玄室部は無難な様に見受けられる。

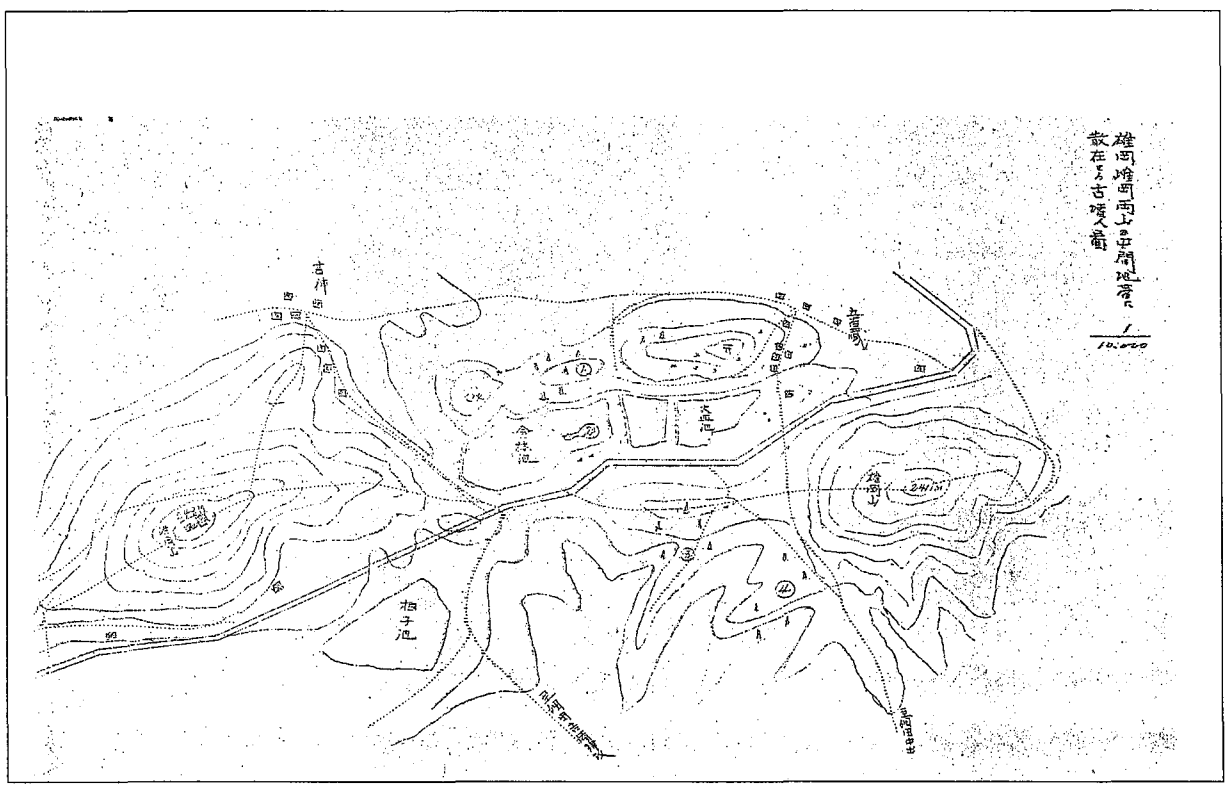


図31　雄岡雌岡両山の中間地帯に散在セル古墳図　（24頁）

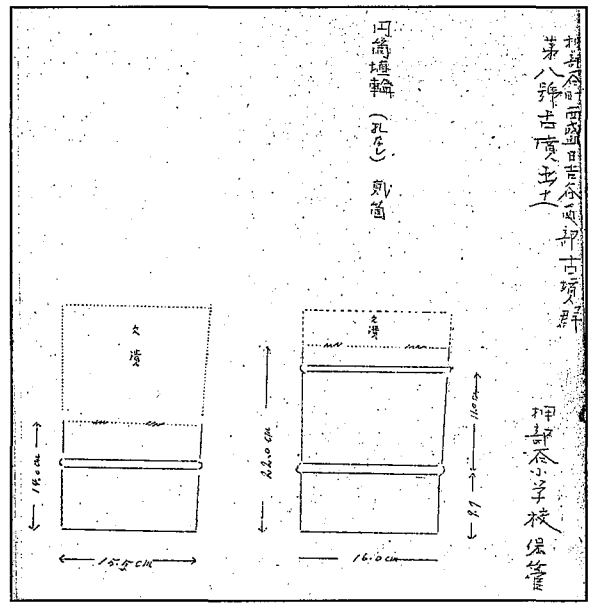


図29　押部谷町西盛　日吉谷西部古墳群
第8号墳出土円筒埴輪
押部谷小学校保管　（18頁）

押部の吉谷古墳

押部谷中学校の校地に連接して用水池が二つある。その奥、池の澤に「ぜんづか」と称える塚があって、東がひへいしたら大宝寺の塚を掘れ、西が疲弊したときはぜんづかを掘れとのいい伝えが残っている。奥池澤をさがして見ても洪水の度に奥から土砂を流して来て埋められつつあって、塚らしいものが見つからない。昭和28年中学校の運動会の折に押部の古老から明治の初年に東に北条屋という家があって、老母が吉谷へ落葉掻きに行って底の無いつぼの様なものを掘ってきて、隣家に気の狂った人があって、北条屋のばばが宝物（たからもの）を掘って来たといいふらしていると聞いたことを覚えているとの話を聞いたので、早速話のあった辺りを踏査したら、一見して、山上円墳だと推定できるものが、奥池の東部の山頂に2基あって、前の墳にも、後の墳にも斎部土器の破片が落ちている。底のない壷とは円筒埴輪でなかったかと周辺をさがして見たが、地表には頭部を見せていない。土器の破片は、無数地上採集によって入手して中学に保存されている。これが第1、第2の墳で、第3号墳は経塚と称えられ、高1.8m位の円墳で、これも東（福住）の疲弊時には経塚を、西の疲弊時には願生寺跡を掘れといい伝えがある墳であったが、昭和12年電鉄敷となって埋められてしまった。

押部谷駅の北東部電鉄の住宅経営地で今畑になっている地の道路工事の折、古土器の破片が路上で採集できたので、此地が茶畑、桃畑、煉瓦焼の工場と変遷していく途上、古墳が壊されたのではなかろうかと推定する。

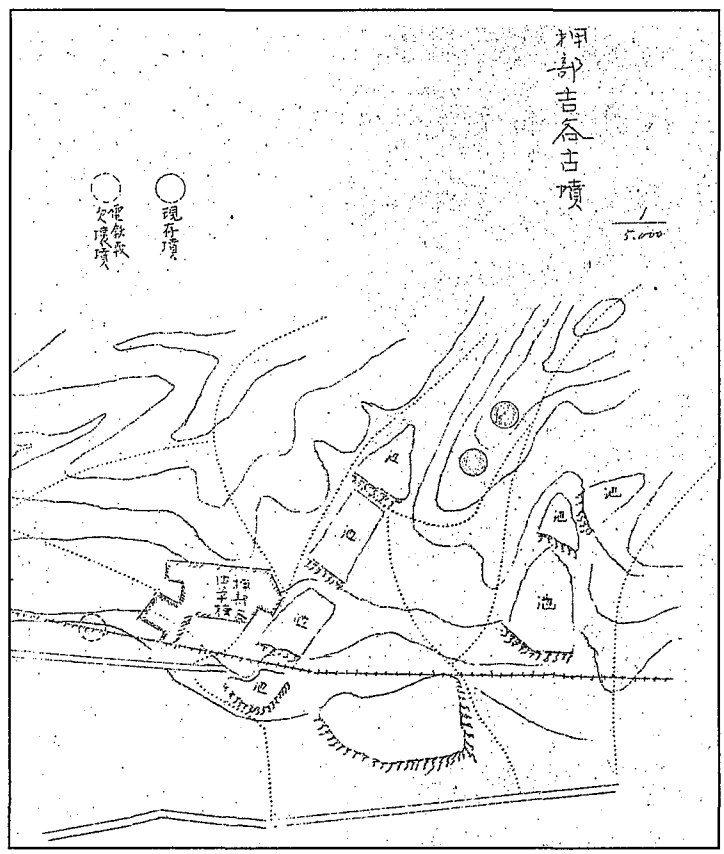


図30　押部吉谷古墳　（26頁）

この稜線に８、９、10の３円墳がある。この９号墳の附近から埴輪円筒が出土したことがある。第10号墳の眼下に第11号横穴式石槨をもつ径12m、高さ2.5mの円墳があるが、中央部は崩潰による陥没の様相を呈している。口池の余水吐の西に添って12、13の両墳があるが、石材の殆んどは取り去られて基礎の石だと認められるものが残されていて、その跡に個人の墓標が立ち並べられている。第４号墳は巨石が累々と積み重ねられているが、小さな石は全部取り去られている。日吉谷口池の工事には、相当多くの土石を要したので、附近はこの工事によって、旧時の様相を一変したものではなかろうか。

第15号墳は雄岡の登山口からまつ直に下って来た道の右側の稜線上に在って径12m、高１m余の円墳で、表土が崩落ちてしまって、石槨と認められる石が巾１m、長南北2.5m、地表に頭部が現れているが、玄室部に達しているものと思われる。

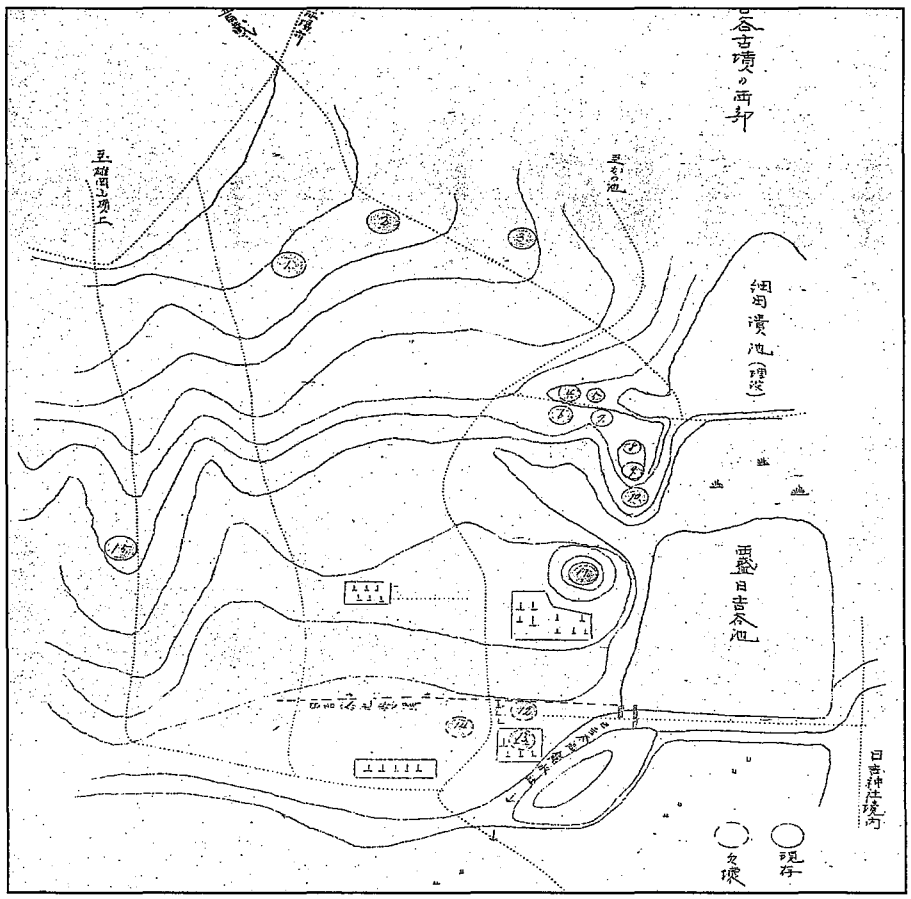


図 27　日吉谷西部古墳群
（22 頁）

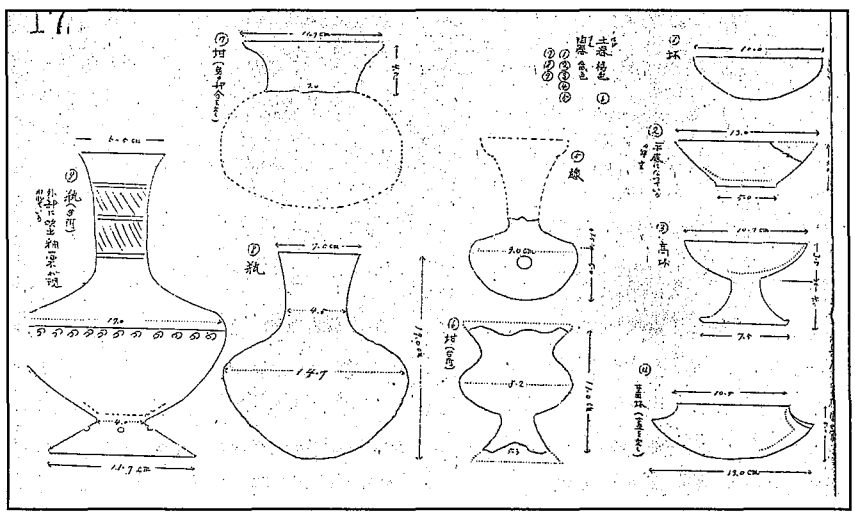


図 28　日吉谷東部古墳群
押部谷小学校保管　（17 頁）

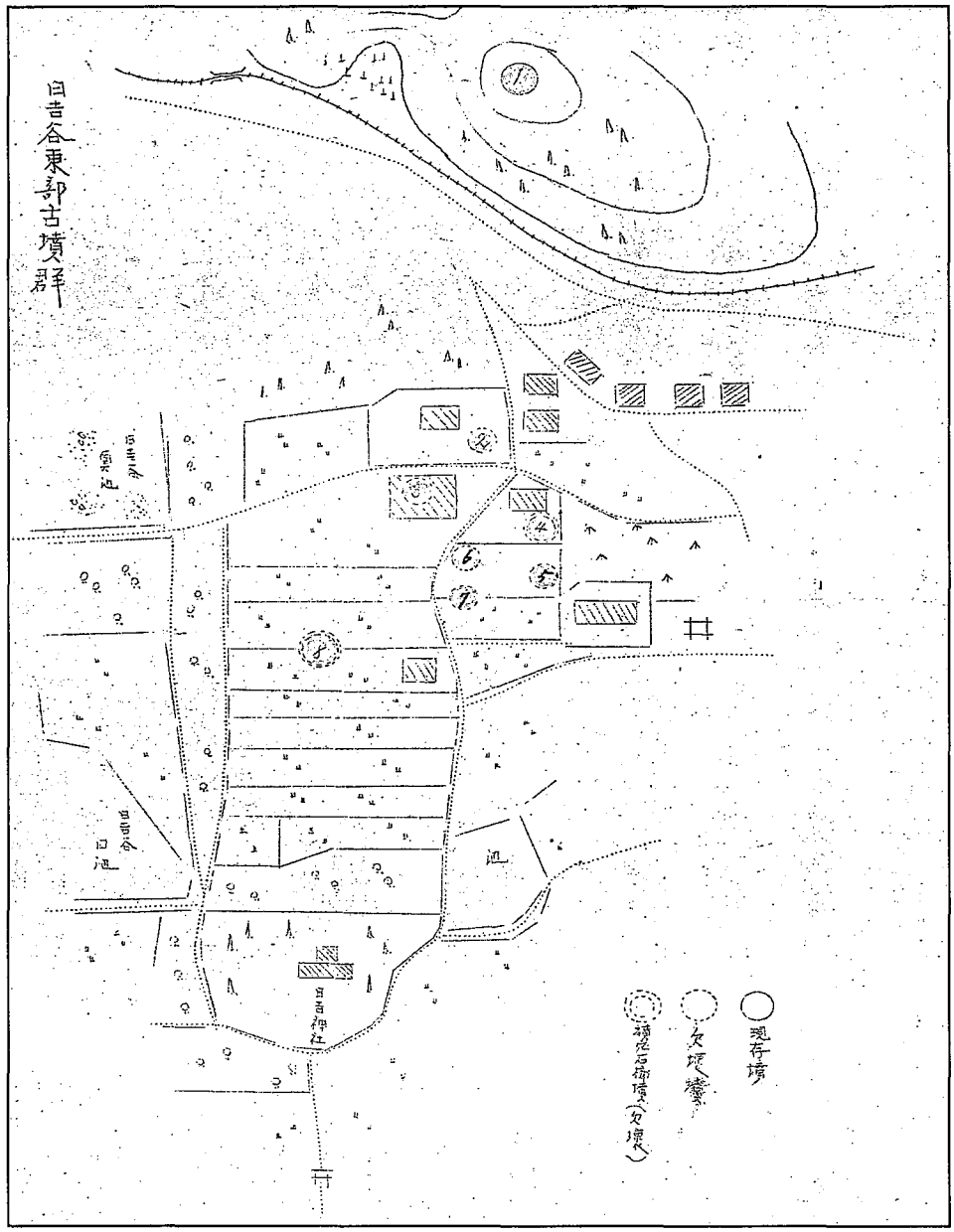


図26　日吉谷東部古墳群（21頁）

日吉山の西部古墳群　附図22頁　押部谷町西盛字北垣内及細田字前田

雄岡山の東部登山口附近はゴルフ場附近と同標高の高原地帯の様相を呈しなだらかな斜面である。これが明石川渓谷に傾かんとする分界点の松林は径10m、高さ2.5mあまりの円墳がある。これも中央部を大きく発掘されて石槨と思われる石が見えている。これが第2号墳で、ここから少しく下がる道は稜線に沿はなくして、石の斜面へ下っているから、左側の稜線とおぼしき地点を注意して見ると、松林中に径7m、高さ1.5mの円墳がある。これも中央部が盗掘されていて石槨に使用されたと認むべき石があらわれている。これが第3号墳である。ふもとの小径に出て急斜面を下ると、山の中腹を左から下って来た道に合する。これをしばらく下ると、道が左右に分岐しているから、左へ行けば日吉谷奥池（今は砂利で埋没して水なし）の堤防に出られる。右すると、奥池の堤防線を西に延長した地点に4、5、6、7の4墳が並んでいる。西の山裾に小谷があって、山の稜線が小谷と日吉谷口池との間に突出している。

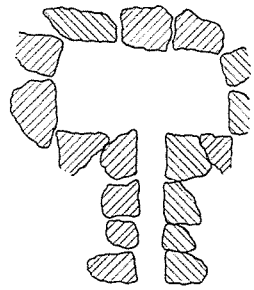
日吉山の東部古墳群　附図21頁　押部谷町西盛字北垣内及び北山

雄岡山の東麓に大巳貴命をまつる日吉神社がある。この森の東側の道を、北に向って段々畠を登って行くと、道が右方へ分岐して、良い水が湧出している井戸端へ通じている。この分岐点の上の左方の路ばたに一軒の民家がある。この家のある段々畠とその後の畠の両方にまたがって大きな自然石が高さ2m余りも累々と積み重って自然に生じたものではなくて、人工が加えられた跡であることをば誰が見てもうなづかれるが、何等の伝承も残っていなかった。これが第8号墳で、大正年間水田に変換すべく耕地整理工事が施工され、段々と石が取り除かれていくと、斎部土器や刀の折片などが出土し、基底部の石組から見て、南面に羨門のある横穴式石槨を有する古墳であることが判明した。出土品の大部は壊されていたが、破片によって片坏、蓋坏、高坏、提瓶などであることが推定できたが、散逸してしまった。

この8号墳の位置と同高の道の右方に竹林を背後にした山所（やまんじょ）と呼称され、山本姓を名乗る家がある。此の家の西北に隣接して古松が襖などの密生せる杜があった。明治の初年には北の山が裾を延ばして、このあたりが山と耕との分界点になっていた。この杜の中に土地の隆起したのが、2、3ケ所もあったが、古墳だとはきづかなかったらしい。これが第5号墳第6号墳第7号墳で、昭和の食料増産政策に呼応して開墾したらしい。第5号墳は南北を主軸とせる石槨で蓋石と認むべきものは存せず、酸化せる鉄片で、土器を出土した。第7号墳は石槨の一部と認むべき石が土中にあるとのことで、何等の出土もなかったといっている。第7号墳は石槨と認める様なものはなかったが、刀が三振も出土したそうだが、折れていたので取り捨てられてしまった。

この5、6、7の三墳の北に隣って高さ2.5mあまりの円墳があって、「でんぼ山」と称えられ、南面に羨門があって、羨道を北に向ってはいっていること、玄室に左右にのびて天井石は3枚で首を屈しなければならなかったということで風変り構造であったらしい。

昔火の雨の難を避けるために造ったものといい伝



この横穴にはいって、かくれんぼ遊びをして古老の思出話を想像すると、こんな形で、奥壁は角にならずに楕円に近かったといっている。

えていた。最も完全に原形が保存されていたのに、明治の末年庭石などの採取のため、いつとはなしに壊されてしまって出土物も何等判明せない。

第3号墳は南に緩斜した畠であったのを耕地せいりで切り下げると3個の蓋石が東西に長くならんで、その下に深さ1m余りもある石槨があって、刀の破片や土器類が出土したので、押部谷中学校（当時は福住尋常高等小学校と称えていた）へ寄贈したとのこと。

第2号墳は大きな扁平な石が露出していたので、明治44　年忠魂碑が建設される際、基石に適当なので、これを使用すべく掘り起こしたところ、東西を主軸とする石槨があったので、古墳であることが知られた。重いので、普通の車では運べないので、枠に乗せ、在郷軍人や学校の生徒が太い綱で引いて校庭まで運んだ。石槨、石材を忠魂碑の基壇に使用された出土品は土器の破片位で変ったものはなく、規模も正確なことは知るに由なし。

第1号墳は電鉄線の北、西盛火葬墓地の東の山頂にある円墳で、古墳の上に立って南を見おろすと、東は栄へんから西は住吉の森あたりまで、一望のうちにある形勝の地点で、この地の指導者であるものが奥築としては誠に好箇の地点である。以前に古墳であることは判然と弁別し得たが、土地が荒廃していたので、保安林に編入されて砂防工事が施されたがため、原形が壊されたけれども、注意して見ると、古墳であることはわかる。土器の破片も地上採集し得らるし。このころでは、赤色に着色された小礫が頂上に多数露出したから表土の崩潰によって、玄室附近が露出しかけたものと思われる。

②中谷新吉「雄岡山周辺の古墳」

昭和28年（西1953年）　現在

1、地域　神戸市垂水区押部谷町大字押部、

福住、西盛、細田、和田

〃　　平野町堅田

〃　　神出町東、五百蔵

美嚢郡志染村大字廣野新開

2、現況　昭和28年12月の現況による

この地域内に踏査洩るものもあるが、それは後日に譲って、知れているものだけをあげた。

3、調査図は別冊11葉あり

4、昭和25年調の廣野古墳調査書は本書に西大廻古墳群として挙げているのがそれで、図の調査書に現存としているものが、28年調では第7号墳が壁土用として壊されてしまっている。

5、古墳毎に所在地番、構造の区方、規模、出土品及保管場所、現況、所有地主等を一覧表に作成しかけているが、新墾地等は区画は出来ていても、地番が附していないのもあって、完成がおくれるのでこれは後日に譲る。

調査者　押部谷町　　中谷　新吉

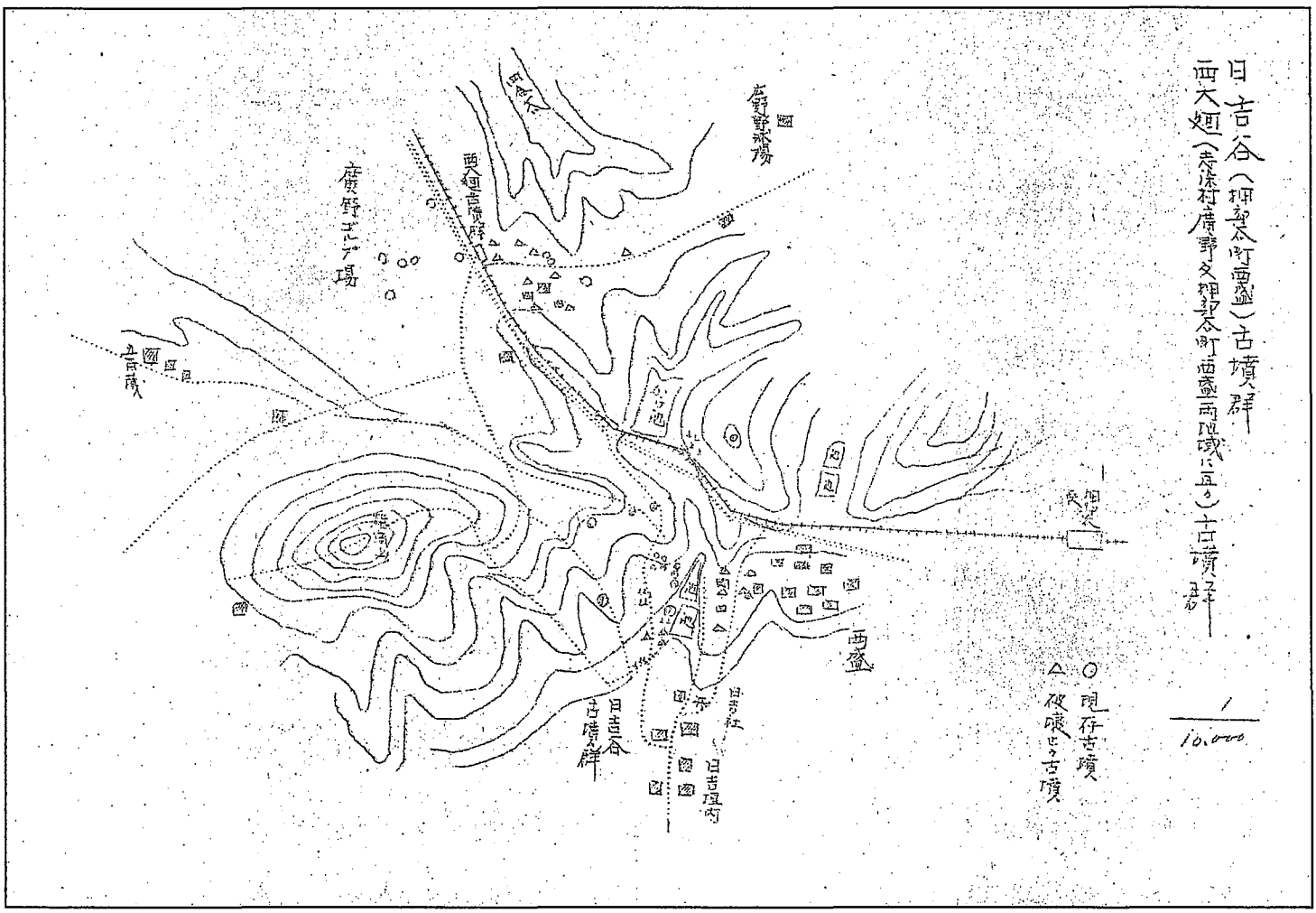


図25　日吉谷（押部谷町西盛）古墳群

西大廻（志染町廣野及び押部谷町西盛両地域に亘る）古墳群（20頁）

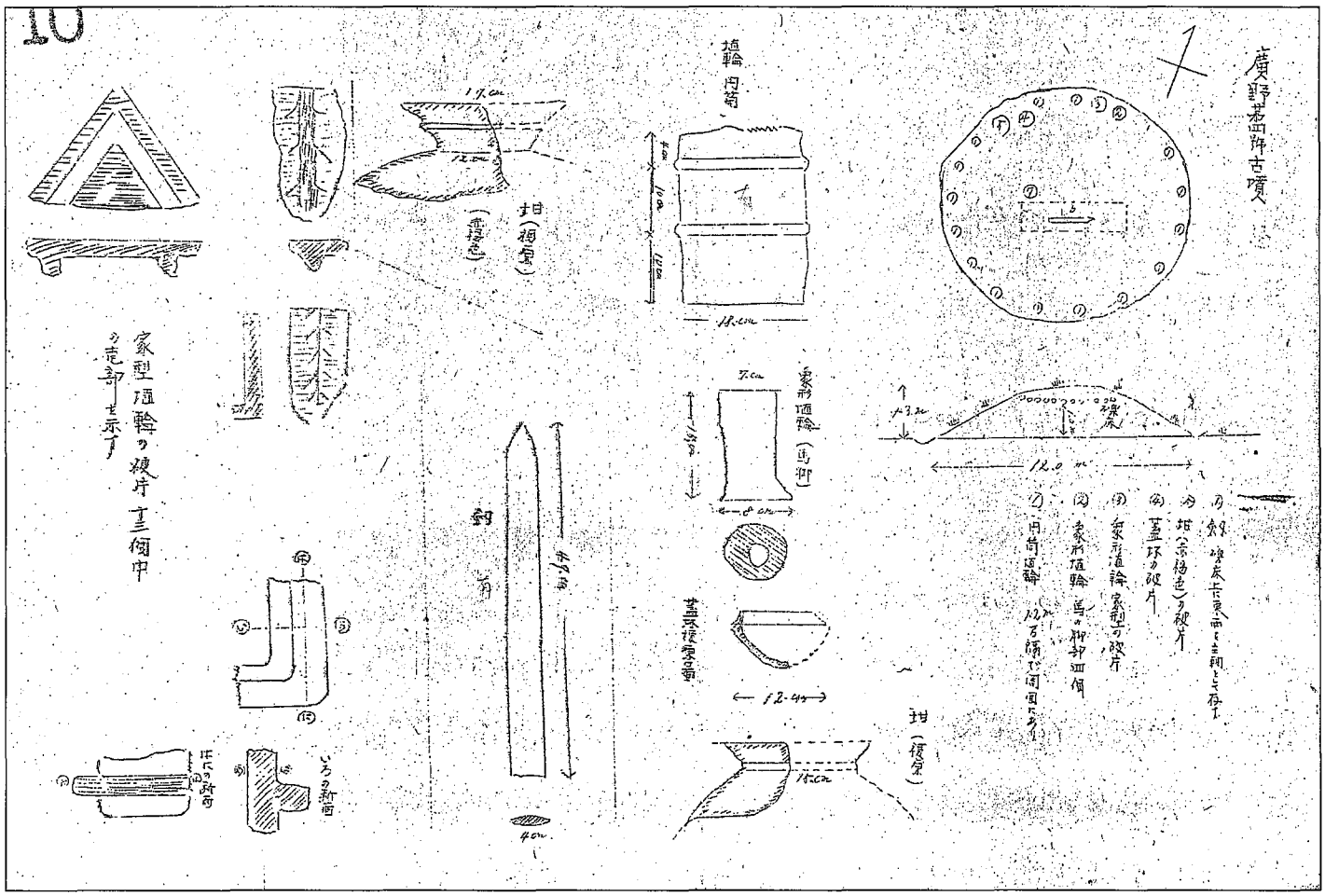


図 23 廣野第4号古墳（10 頁）

廣野第１号、第14号第15号第16号古墳を昭和11～13年に開根中発掘した際の出土品の一部

神出町五百蔵世良田家所蔵

第15号古墳の位置に北接した溜池堤防下に当時の出土物を埋葬しあり。

①第１号墳には遺骸２体を並列して埋葬しあり。歯牙の出土によって確認。

②第１号墳の蓋坏中に「フトヘナタリウミニナ」が埋蔵しあり。亦小鳥の骨片と認めらるものもあった。

③発掘は昭和25年２月～４月に神戸電鉄が住宅地経営の目的のもとに区画整理の工事中に於ける副次的な調査である。

④廣野には、野々池に古墳群があって現存せるもの20基位はある。開墾の進むにつれて年々こわされて行くのは遺憾である。

⑤発掘した土器の一部及「フトヘナタリウミニナ」は志染中学へも人夫の手を経て贈られている。

⑥第２号墳の出土品の一部は、神出の須藤一郎氏が持ち帰られたとのことを人夫から聞いたが、内容は調査していない。

⑦ゴルフ場開設の際こわされたことは、出土品が工事中に散乱していた事でわかるのだが、工事に従事した人夫に聞いても、その数や位置は判明せない。

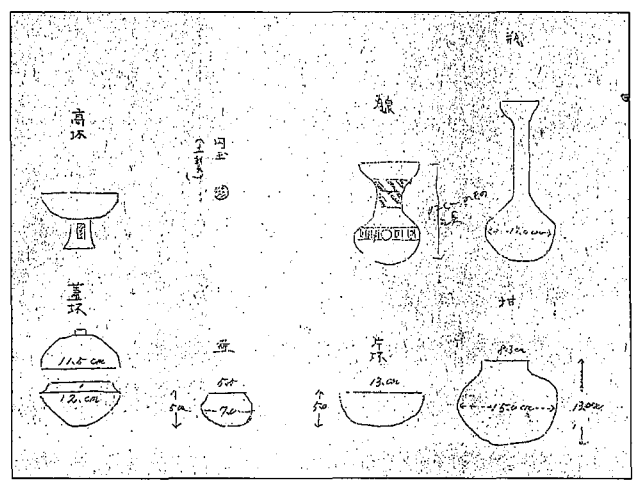


図 24 廣野第1号、第 14 号、第 15 号、第 16 号古墳の出土品（11 頁）

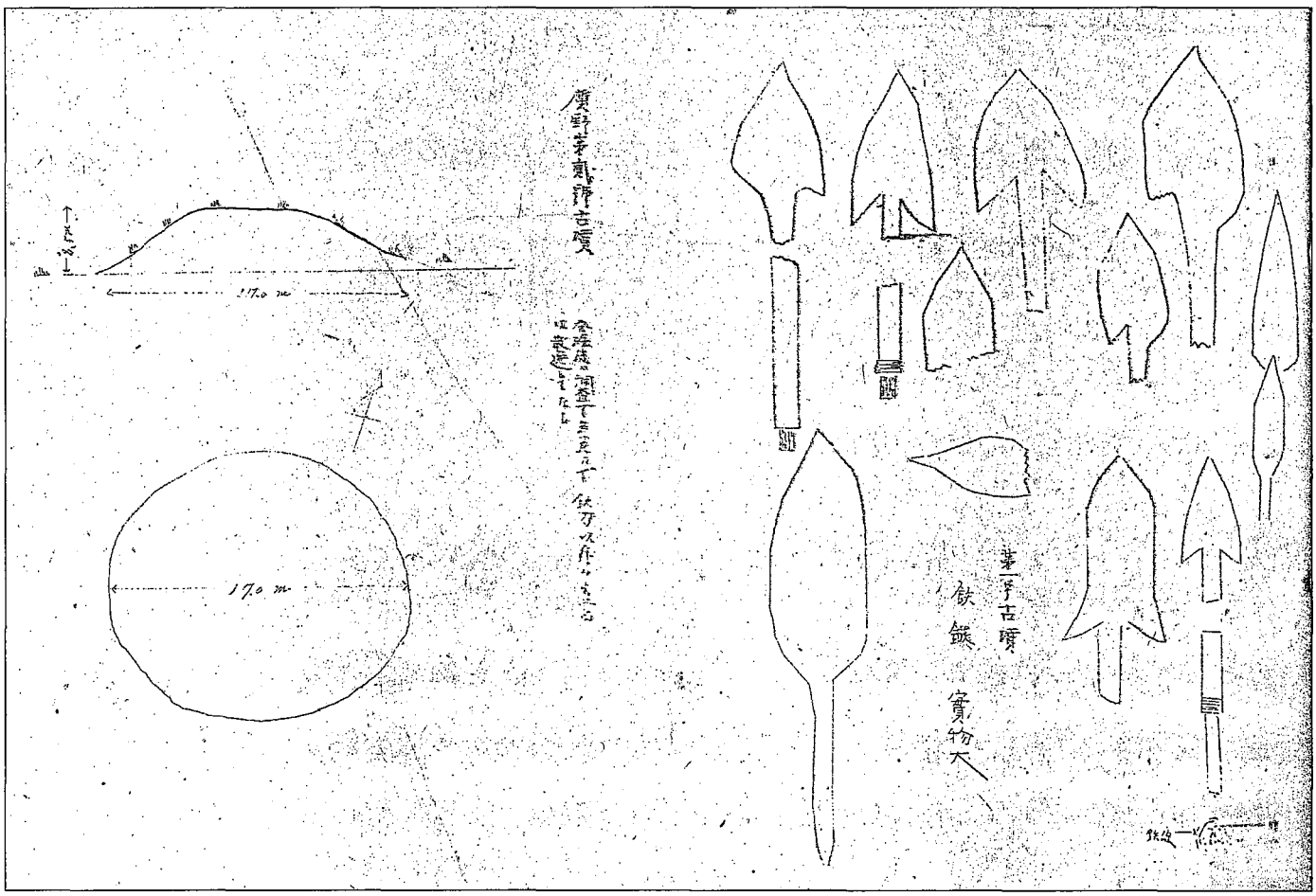


図21　廣野第1号古墳　鉄鏃（実物大）廣野第2号古墳（8頁）

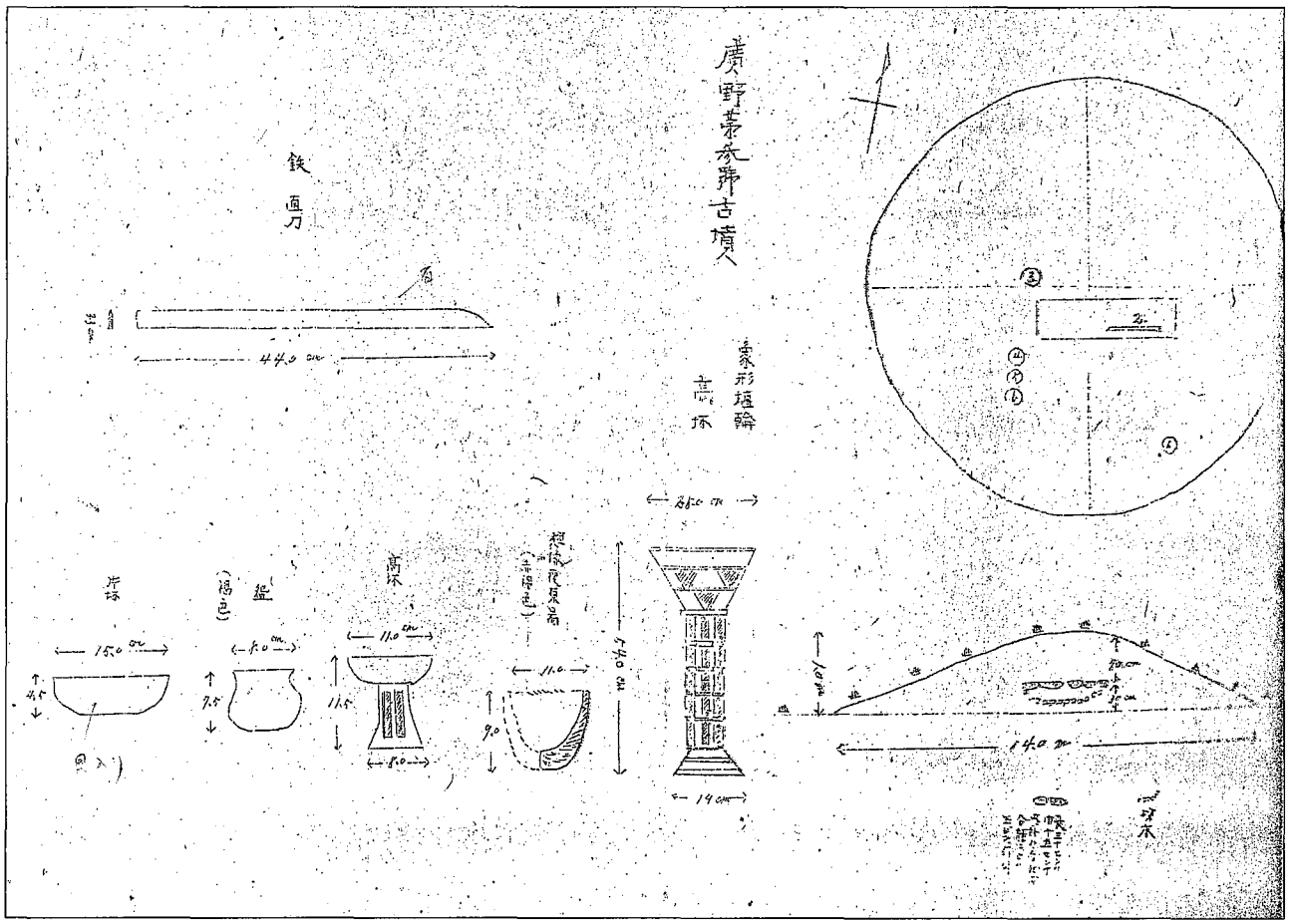


図22　廣野第3号古墳（9頁）

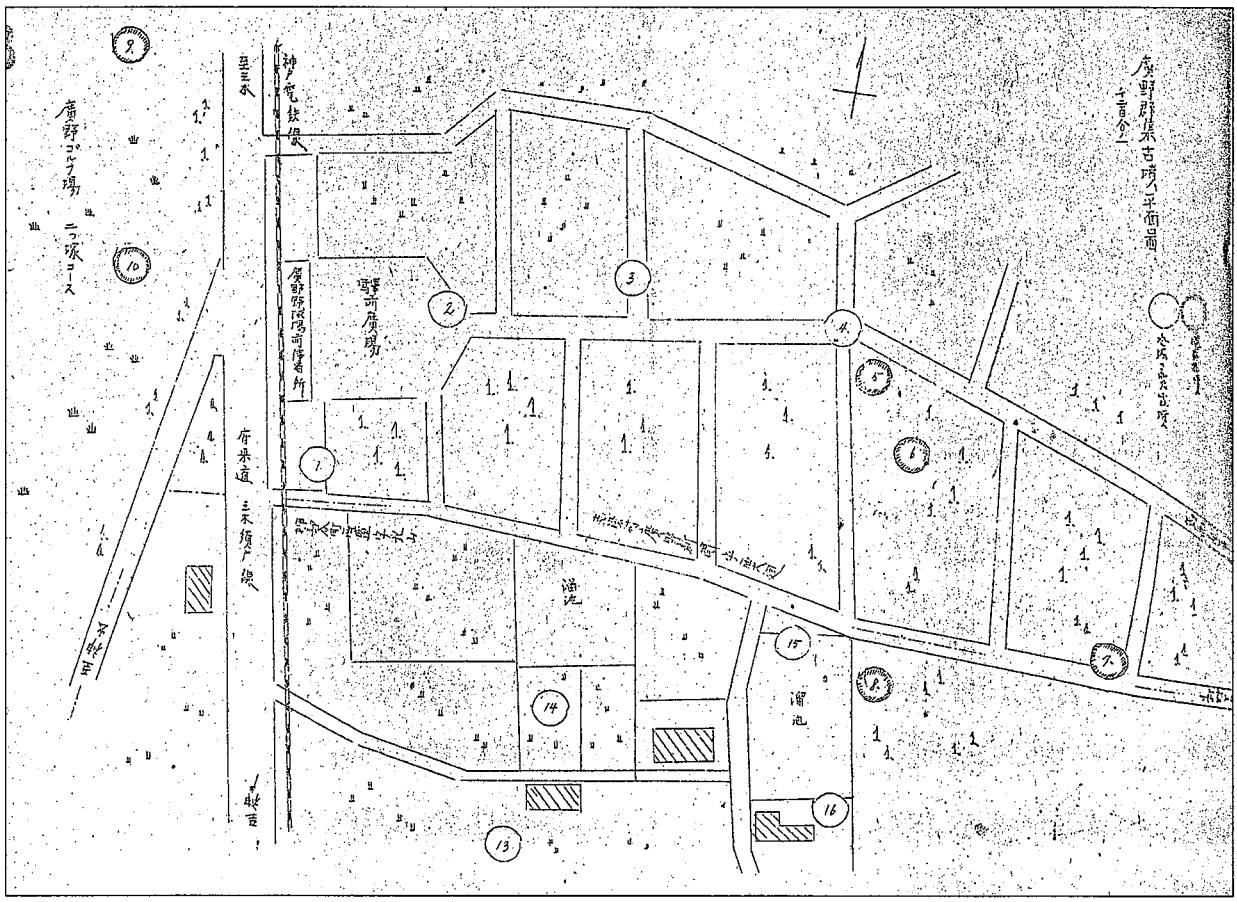


図 19　廣野群集古墳平面図　千二百分ノ一　（3頁）

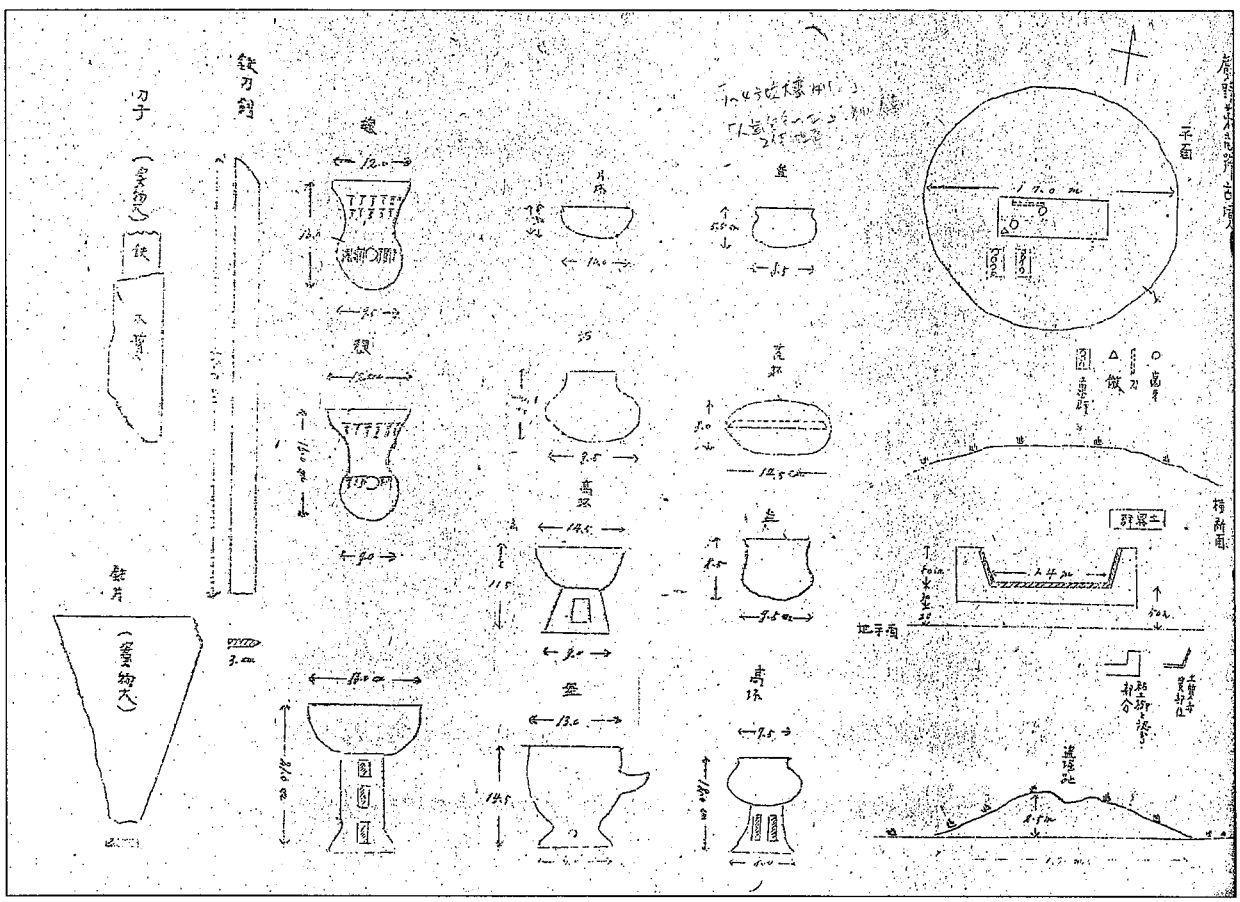


図 20　廣野第1号古墳　（7頁）

て出土品目録に登載した。原型の不明のものも文様（模様）の異なるものも集めて置いた。

出土品は１ケ毎に番号を附し、目録の対照に便すると共に夫々出土古墳も知り得る様にした。出土状態は別紙附図詳細記入したから大体は把握できようと思う。

現品は私蔵すべきでない。地区には公民館の如きものもないので、押部谷中学校こそは高校の分校と設置されていて、保管上適当の場所であると信じ、中学の郷土室に調査書と共に保管してもらうこととした。

昭和25年７月１日　西暦1950年

神戸市垂水区押部谷町木見368

中谷　新吉

廣野古墳出土品目録

整理番号	品名	状態	古墳番号	数量	備考
1	埴輪	円筒	4	5	
2	象形埴輪	家　破片	4	1	
3	〃	高坏	3	1	
4	〃	馬脚部破片	4	4	
5	高坏		1	1	
6	〃		1	1	
7	〃		3	1	
8	盌	台及把手附	1	1	
9	盌		1	1	
10	〃	台附	1	1	
11	坩		4	2	
12	〃		1	1	
13	〃		2	1	
14	甕	破片	1	1	
15	〃	〃	1	1	
16～27	片坏		1	12	半欠壊6
28～39	蓋坏		1	12	
40～51	〃		1	12	蓋を欠く
52	剣	（鉄）	4	1	

整理番号	品名	状態	古墳番号	数量	備考
53	刀	（〃）	1	1	
54	刀	（〃）	2	1	
55	刀	（〃）	3	1	
56～66	鏃	（〃）	1	11	
67	刀子	（〃）柄部分	1	1	破片
68	名称不明	鉄片　鏃形	1	1	
69	礫	（礫床一部丹色付）	3	1	
70	石片	上部の覆石破片	3	1	
71	封土	丹色に着色	2・3	1	
72	〃	着色せざるもの	2	1	比較用に
73	貝殻	ふとへなたりうみにな	1	1	蓋坏中より
74	小鳥の骨片		1	1	〃
75	盌	赤褐色	3	1	
76～81	蓋坏	一部分欠損のもの	1	6	
82	人骨片		1	3	
83	歯牙		1	1	
84	火力のため硬化せる土塊		3	1	
	（外円部の地表土で円筒を焼いた跡と認められる証あるもの）				
85	土器破片	八種	1～4	1	

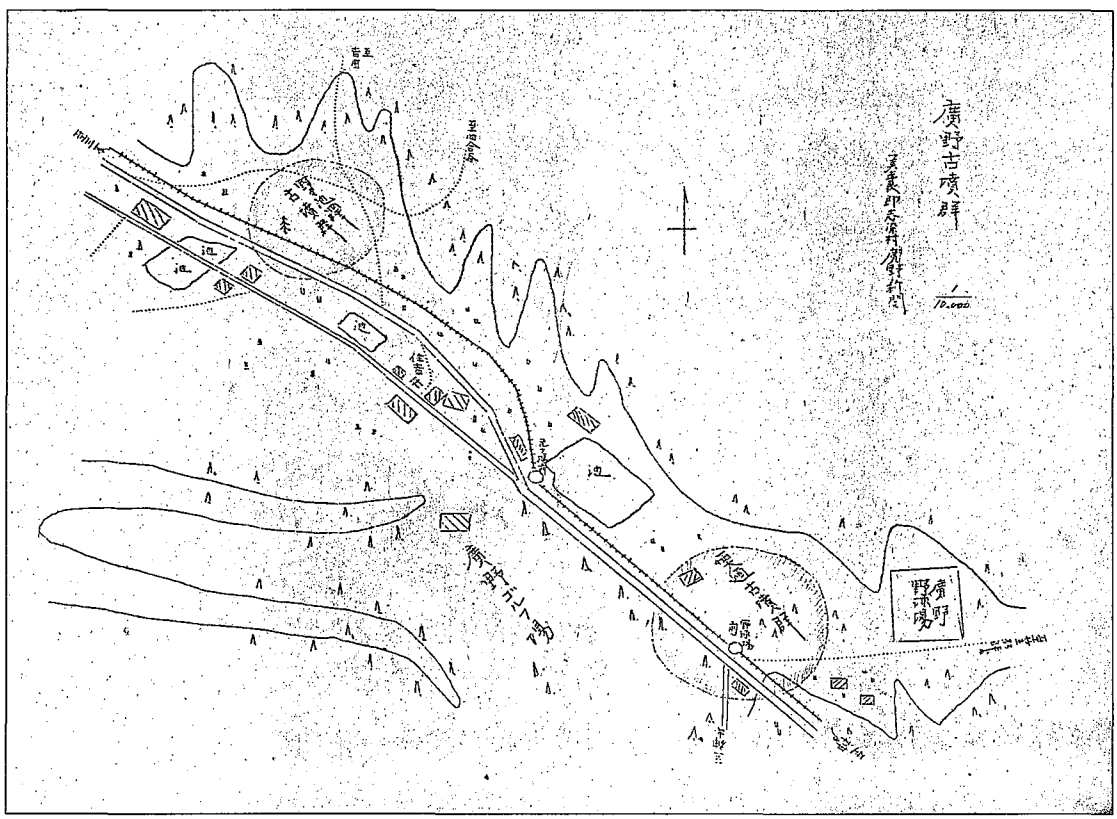


図18　廣野古墳群　1／10,000　美嚢郡志染村廣野新開（2頁）

ったと、うはさを耳にしたのは第２号墳が取り除かれた後のことである。古墳の事や古文化保存の重要性などもよく了解してくれて、工事進行の障害になることも多々あったにもかかわらず、人夫の供与その他、物質的精神的両方面から種々の便宜を与えてもらったので、本調査には些少の経費を要せずに進めることの出来たことと今井組に感謝している。何分にも調査の為の発掘ではなく、工事の進行につれて調査を進めるため、心なき土工たちの工具の先にふれて埋蔵物のいためられたり、破片の捨て去られたりしたことは遺憾極みではあるが、事業の性質上やむを得ない。各墳毎に状況を記述する。

第２号古墳

本墳は駅前広場の一部に当り、全潰の後の調査である。刀１、蓋坏１、の外は散逸してしまった現物はない。礫床のあったこと、土の一部が丹色に染っていたこと、高坏、蓋坏、坩の類が出土したことは想像できた。

第４号古墳

封土切り取りと同時にこの調査に着手した。円墳で「ホーラク」を伏せた様な感じのする古墳で、直径12m、高1.3m、墳の限界線より30cm内側に円筒埴輪が1.2m間隔で規則定しく埋設され、円筒の上部（円筒の三分の一）は風化したり、円の内側に破片が崩れ落ちたりしている。総数で31ケで、焼成度は底く、水洗する際に金属刷毛でも使用するなり磨損する程度のもので、大部分は掘り出す際にこわれた。封土の中心部より北よりに地表から50cm下に焼損した円筒が倒して（約30度傾斜）３ケ埋込まれていた。封土の外縁近く地平線の粘土が（重粘土でそのまま焼物に使用できる）かなり強い火力にあったらしく、円筒よりも硬度に固まり、炭もあったから、この位置の開き窯で円筒埴輪を焼いたものと想像した。

象形埴輪の馬脚らしく想像されるものは直立の形で、４本が表土近く、同一場所に埋まっていた。中心部の封土下30cmに直径２乃至３cmの礫が水平に並べられ、その上に東西を主軸として剣身が横たわっていた。被葬者の遺骸埋葬位置として、あまりにも浅すぎると考へ、地表面以下まで掘り下げたが、何物も見つからない。封土が四周に崩れ落ちて低くなったらしい。本墳には土器は僅少である。

第３号古墳

第４号墳と同規模の扁平な円墳である。中央部を掘り下げると、岩石の自然分解によって生じた角のある雄岡山の中の砂利附近の石と同質の長30cm、巾15cmの石が敷かれていて石槨でもない。この石を取除くと、礫床があって、礫や封土が丹色にそまっている。礫床上には直刀が東西を主軸として横たわっていた。礫床の西北隅の外側に高さ54cmの象形埴輪の高坏がこわれて出土した。

第１号古墳

電鉄敷設の際封土の一部は切り取られ、頂上に盗掘の跡もあったが、中心部には触れていなかった。径16m、高2.5mで、第２号墳と共に大型のものである。

頂部の盗掘跡に生育せる松の根株の年輪から計算すると、明治20年前後に盗掘したらしい。地表面から50cmの高さに粘土槨と認められる部分があって、他の部分とは全然固さを異にし、その円周の部分がU型に丹色に染っている。槨の方向は東西に長く、槨内から直刀１振、鏃12、槨の南寄に歯牙、刀子が、北寄りで前に出土した歯牙からすると、上顎部あたり思はれる部位から門歯の一群があらわれたので、同一槨内に２体の遺骸が崩られていたと推定する。土器は他墳に比して豊富であり、蓋坏内から「ふとへなたりうみにな」、小鳥の骨なども出土した。

5. 出土品の整理と保存

わが郷土の有史以前の有様はこの出土品が有弁に物語っている。石碑にも伝説にも伝わっていない事柄を知るには古墳こそ非常に重要な役割をもっている。郷土開発の吾々の祖先の奥津城が時世の進化と共に止むなく壊されていくことは誠に遺憾であるが、世の進展に役だつなら祖先も喜んで許してくれようが、祖先の残した文化財はたとえ一小部分たりともおろそかにすべきでない。好奇心にかられて、私蔵するが如き行為は大に反正せねばならぬ。一小破片でも、今では価値がないと思っても、後日の研究資料にならぬといえぬ。価値がないと思うのは、研究が浅薄だからといえるから、小破片たりとも、これを接合して原型を推測し得る程度のものは一点とし

7. 中谷新吉氏の古墳調査報告

昭和25年、昭和28年に中谷新吉氏が調査を行った押部谷周辺の古墳についての調査報告の労作をここに再録する。再録にあたっては、読みやすくするため、手書きを浄書し、縦書を横書に組み直し、適宜表記を修正した。原資料がコピーによるもののためか、判読困難な箇所もあり、誤読が含まれるかもしれない。また、原挿図はＢ４判であり、これらを適宜レイアウトした。一部は製図し直し、改変を行った。（山本）

①中谷新吉「廣野古墳調査書　西大廻古墳発掘実況」
昭和弐拾五年七月（皇紀二六一〇　西紀一九五〇）

1. 古墳の所在地

明石の東北隅に摂播の国境をなして聳え立つ「しぶれ山」標高347.5mは旧明石郡内の最高峯である。このしぶれ山系が美嚢川、明石川の分水界をなして西走して、雄岡山附近に至ると、丘陵性の高原地帯（標高140mを前後する）をなして逐次西南に傾いて一大平野となっている。これが印南野なのである。この高原地帯は古名 高野の里 といわれていた所で、この台地の東南の隅に瘤起して二つの山が雄岡と雌岡とで、この山の北麓には野々池澤の古墳群、住吉附近の古墳群、西大廻の古墳群、南麓には西盛日吉谷の古墳群、雌岡山南麓の古墳群があったが、住吉附近、雌岡南麓は耕地に変じて残存せるものは僅少である。今回調査したのは、西大廻古墳群で、現在の行政区画上では、神戸市垂水区押部谷町西盛字北山と美嚢郡志染村廣野新開字西大廻との両地域にまたがっている。

2. 調査の動機

昭和25年（1950）２月、神戸電鉄が野球場前に住宅地を経営し、区画整理工事中、道路の中心部に古墳があったので、その工事の進行と同時に本調査をしたもので、専門の知識を欠ける者の調査であり、工事目的が道路開設あるため、徹底的に調査することの出来なかった点もある。

調査期間は、２、３、４月の三ヶ月に亘り、其間市役所や県の関係課に連絡して実地踏査を現はし、亦いろいろと指示もうけた。

3. 既往に於ける状態

高原地帯で、附近には人口が稀薄なのと、用水が欠乏しているので、開墾されることもなく、規模の小さな小墳でも今日迄完全に保存されて来た。この高原地帯も淡河川の疎水や山田川の疎水工事が完成して灌漑用水を得られる様になって逐年こわされていった。その中でも、著しい出来事は、淡河川疎水の隧道用の煉瓦がこの地で焼かれたため、大古墳を利用して昇り窯を築造せるもの３基、煉瓦用の焼粘土採集に古墳の潰されたものも無数である。石材に欠乏している場所だから、横穴式石槨は採石の目的にこわされている。ゴルフ場開発による破潰、溜池の築造、耕地の開墾等である。野々池澤古墳群の位置から北方吉田に下っていくと、山が将に画さんとする所にある古墳群は一も潰されないで完全に保存されているのはうらやましく思う。

西大廻古墳群中13、14、15、16は、昭和11、12、13年に亘って、耕地整理のために欠潰されている。当時の状況を世良田家について聞くと、13、14、16の三墳は土器の破片や鉄の酸化したもので、これというものは見当たらなかった。15号墳は現存の８号墳と同一の規模で径12m、高さ1.5m位であった。13号、14号墳はこれよりも規模は大であったが、出土品は少ない。15号墳の中心部が溜池堤防の中心となったので、床掘工事を進めて行くうち、中央部に担棒を通じる程度の空虚部があったので、注意して掘り進めて行くと、周囲の土が丹色に染っていて、人骨の破片、酸化せる刀の折片、土製の円玉無数が出土した。空虚になっていた方向は東西であった。土器は主とした封土の土層部からで、円筒埴輪と認められる様なものはなかったらしい。

出土品のほぼ完形を保てるものは世良家に保存されている。別紙附図に詳細は記述する。

4. 今回の調査状況

道路開設は、押部谷・今井組の手で進められていたので、古墳らしいものがこわされて、出土品があ

第１・２次　発掘調査報告書』神戸市教育委員会（2000）
(33)　稲原昭嘉「太寺廃寺跡　第12次」『平成21年度明石市埋蔵文化財年報』明石市（2013）
(34)　註（32）に同じ。
(35)　註（12）に同じ。
(36)　稲原昭嘉「寺山古墳　第２次」『平成21年度　明石市埋蔵文化財年報』明石市（2013）
(37)　註（9）に同じ。
(38)　金松誠編『三木市立みき歴史資料館常設展示図録』三木市立みき歴史資料館（2017）
(39)　中畔明日香編『御願塚古墳発掘調査報告書　第８・９・10次調査』伊丹市教育委員会（2008）
(40)　註（14）に同じ。
(41)　三木市立みき歴史資料館常設展示の資料を実見。
(42)　註（20）阿部に同じ。
(43)　東影悠「古墳時代後期における埴輪生産と埴輪様式の特質」『ヒストリア』第271号　大阪歴史学会（2018）
(44)　廣瀬覚「埴輪の生産・流通からみた古墳時代の権力生成」『考古学研究』第66　巻第３号（通巻263号）　考古学研究会（2019）
(45)　原口正三「須恵器の源流をたずねて」『古代史発掘６　古墳と国家の成立ち』講談社（1975）
(46)　図17には下記の各文献より実測図を転載した。
　楢崎彰一監修　大谷女子大学資料館編『日本陶磁の源流　須恵器出現の謎を探る」柏書房（1984）／中村浩「近畿の初期須恵器―各地の出土例の聚成と概観的考察―その１」『古文化談叢』第15集　九州古文化研究会（1985）（再録）／薗田香融編　関西大学文学部考古学研究室紀要第４冊『和歌山市における古墳文化』関西大学（1972）／白石耕治編　和泉市史紀要第25集『和泉市考古学調査報告書Ⅱ　和泉市域の須恵器研究―調査と編年―』和泉市史編さん委員会（2017）／井藤徹・野上丈助編　大阪府文化財調査報告書第33　輯『陶邑Ⅴ』大阪府教育委員会（1982）／堀江門也・中村浩「嶋上郡衙跡周辺出土遺物」大阪府文化財調査報告書第30輯『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会（1978）／樋口吉文「東上野芝遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告書』10　堺市教育委員会（1982）／山田清朝編　兵庫県文化財調査報告第431冊『加古川市　東沢１号墳―（主）加古川小野線（東播磨南北道路）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』兵庫県教育委員会（2012）／村上富喜子編（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第53集『大和川今池遺跡（その１・その２）―大和川高水敷整備事業に伴う発掘調査報告書１―』財団法人大阪府文化財調査研究センター（2000）／亀井芳文・大山真充編『川上・丸井古墳発掘調査概報―香川県大川郡長尾町前山古墳群の調査―』長尾町教育委員会（1983）／島崎久恵編（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第75集『亀川遺跡　一般国道26号線（第二阪和国道）建設に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター（2002）／面高哲郎・長津宗重「宮崎県都城市志和池出土の陶質土器」『古文化談叢』第12集　九州古文化研究会（1983）／三吉秀充「市場南組窯跡須恵器の型式分類と編年」『古文化談叢』第77集（2016）／岸本一郎　加西市埋蔵文化財報告75『丸山ノ下遺跡・丸山ノ下古墳群―加西市西高室土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―』加西市教育委員会（2016）／井藤徹編　大阪府文化財調査報告書第31輯『陶邑Ⅳ』大阪府教育委員会（1979）／高橋徹・小林明彦「九州須恵器編年の課題―岩戸山古墳出土須恵器の再検討―」『古代文化』第42巻第４号（1990）／山下俊郎・稲原昭嘉・松村朋世『赤根川・金ヶ崎窯跡―昭和63年度発掘調査概要―』明石市教育委員会（1990）
(47)　三重県神宮徴古館にて展示資料を実見。小田富士雄「九州古式須恵器資料―３　福岡県羽根戸の装飾付器台と子持壺」小田富士雄著作集２『九州考古学研究　古墳時代篇』学生社（1979）
(48)　広瀬和雄『大園遺跡発掘調査概要』３　大阪府教育委員会（1976）
(49)　岡戸哲紀編（財）大阪府埋蔵文化財調査報告書第90輯『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ　近畿自動車道松原・すさみ線建設に伴う発掘調査報告書』大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会（1995）
(50)　愛知県陶磁資料館学芸課編　秋季特別企画展『古代の造形美　装飾須恵器展』愛知県陶磁資料館（1995）
(51)　柳田康雄編　福岡県文化財調査報告書第67集『国道200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報　筑紫野市大字隈所在遺跡群の調査』福岡県教育委員会（1984）
(52)　註（26）に同じ。
(53)　岸本道昭・岡戸哲紀（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第60輯『陶邑・伏尾遺跡　Ａ地区　近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書』大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会（1990）
(54)　上野章・池野正男「№６遺跡」『富山県小杉町・大門町　小杉流通業務団地内遺跡群　第３・４次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会（1982）
(55)　秋本吉郎校注　日本古典文学大系２『風土記』岩波書店（1958）

田清・上田哲也『三木市高木古墳群発掘調査報告』三木市教育委員会（1966）

なお、印南野台地上に立地する「広野古墳群」の呼称を広義で使用し、支群的な呼称として、以下では「西大廻古墳群」「野々池古墳群」に「広野」を冠して呼称することする。

（6）　ヨコハケは、一瀬和夫氏の分類に準拠した。一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』V　大阪府教育委員会（1988）

（7）　岩崎義信『右撚り・左撚り―縄文の土器文様と紐の撚り―』山形県長井市教育委員会（2003）

（8）　須恵器の編年は田辺昭三氏の編年を以下準拠した。田辺昭三　平安学園創立九十周年記念　研究論集第10集『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園（1966）／田辺昭三『須恵器大成』角川書店（1981）

（9）　櫃本誠一編　三木市文化財調査報告第７集『野々池沢古墳群―第９号墳調査報告書―』三木市教育委員会、三木市文化財保護委員会（1970）

（10）　山本雅和「西盛南遺跡」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会（1994）

（11）　三木市文化研究資料第17　集『三木市遺跡分布地図三木市内遺跡詳細分布調査報告書』兵庫県三木市教育委員会（2001）

（12）　前田佳久「新内古墳」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会（1989）

（13）　渡辺伸行「木棺直葬墳の終焉―明石川流域の古墳の調査から―」神戸市史紀要『神戸の歴史』第15号（1986）

（14）　山本雅和・浅谷誠吾「水谷大東古墳」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会（1995）

（15）　喜谷美宣『天王山古墳群発掘調査概要―神戸市垂水区伊川谷町所在―』神戸市教育委員会（1972）

（16）　鎌木義昌・亀田修一「播磨出合遺跡について」『兵庫県の歴史』22　兵庫県（1986）

（17）　櫃本誠一編『神戸市・中村古墳群発掘調査報告―中村４・５号墳―』兵庫県教育委員会（1969）

（18）千種浩「金棒池古墳群金棒池１号墳」神戸の遺跡シリーズⅣ『神戸の古墳―Ⅰ　前方後円墳―』神戸市教育委員会（2013）

（19）　山本雅和「毘沙門１号墳」『昭和61　年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会（1989）

（20）　註（5）のほか、下記の文献をもとに作成。

高瀬一嘉編　兵庫県文化財調査報告第137冊『三木市所在　大池７号墳―山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XI―』兵庫県教育委員会（1995）／岡安光彦・遠竹陽一郎・柳下恵理子　三木市文化財研究資料第15集『高木古墳群・高木多重土塁１　三木ホースランドパーク建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』兵庫県三木市教育委員会（2000）／岡安光彦・遠竹陽一郎・柳下恵理子　三木市文化財研究資料第16集『高木古墳群・高木多重土塁２　三木市市営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』兵庫県三木市教育委員会（2000）／池田征弘編　兵庫県文化財調査報告第353冊『三木市所在　窟屋１号墳（主）平野三木線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会（2009）／池田征弘・篠宮正・山田清朝　兵庫県文化財調査報告第409冊『三木市　吉田住吉山遺跡群　吉田住吉山遺跡・吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・高男寺本丸遺跡―主要地方道三木三田線住宅宅地関連公共事業施設等総合整備促進事業に伴う発掘調査報告書―』兵庫県教育委員会（2011）／阿部功「明石川流域における円筒埴輪の様相について―いわゆる「初期群集墳」段階の一考察」『埴輪論叢』第７号　埴輪検討会（2017）

（21）　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古学会（1978）

（22）　辻川哲朗「円筒埴輪の突帯設定技法の復元ー埴輪受容形態検討の基礎作業としてー」『埴輪論叢』第１号　埴輪検討会（1999）

（23）　註（21）　に同じ。

（24）　註（21）　に同じ。

（25）　村瀬陸「大和北部地域を主眼とする後期円筒埴輪の系統」『埴輪論叢』第８号　埴輪検討会（2018）

（26）　阿部功編『出合遺跡第34・35・37・39・40・43・44次埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会（2011）

（27）　鬼神山古墳周辺からの出土として報告されている。現在所在不明である。吉田片山遺跡調査団編『吉田南遺跡周辺の遺跡　現地説明会資料２』吉田片山遺跡調査団（1980）

（28）　断続ナデ技法については、中島和彦氏の分類に準拠した。鐘方正樹・中島和彦「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財センター紀要1991』奈良市埋蔵文化財センター（1992）

（29）　註（24）　に同じ。

（30）　①小浜成「円筒埴輪の観察視点と編年方法ー畿内円筒埴輪編年に向けてー」『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会（2003）　②埴輪検討会「円筒埴輪共通編年」『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会（2003）

（31）　西岡巧次・中谷正「水谷遺跡　第７次調査」『平成10年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会（2001）

（32）　安田滋編『白水遺跡第３・６・７次　高津橋大塚遺跡

④広野野々池３号墳の須恵器無頸壷

当該資料については、収蔵庫で発見した初見の際には、真贋を疑ってみたほど、きわめて特異な器形という印象が強く、管見に触れてくることのなかった器種である。

管見に触れ、器形が似通った類例として、陶邑・伏尾遺跡Ａ地区第Ⅱ区153－ＯＤ[63]（竪穴住居）出土の朝鮮半島系とされる環状把手付坩（488）と小杉流通業務団地内№６遺跡[64]の無頸壷（Ｆ12）の２点を挙げることができる。前者の法量は口径7.6cm、体部最大径12.6cm、器高12.2cmと小型の器形で「坩」と呼ぶに相応しいもので、底部の静止ヘラ削り調整も特徴的で、伴出した須恵器から陶邑編年Ⅰ－２・３型式併行とされる。一方、後者は口径13cm、器高22.6cmで、底部外面がカキ目調整、体部最大径部から上位にかけて２条単位の凹線が３段施文されている。共伴した須恵器から６世紀末～７世紀初めの時期が与えられている。

両資料だけを比較すると、時期的にもかけ離れており、つながりを説明しづらいが、広野野々池３号墳の資料を介することで、液体を携行可能な容器として、提瓶と同一機能をもつ無頸の器形として認識できるものと推測でき、普遍的ではなかったにしても、その存在が継続された器種として認識できるものである。

6. むすびにかえて

神戸市西区押部谷町西盛から三木市志染町にかけての地域に比較的まとまった古墳群があったことは、想像もつかない程に現状では開発が落ち着いてしまっており、現地を訪ねても往時を推し量ることはかなわない。市域を超えた地域の資料であることから、当初やや消極的な取り組みであったものの、押部谷中学校の資料と当館資料について、断片的ではあるものの資料化を図り、公開できたことは有意義であったと自負している。特に、押部谷中学校では、地元の方々から寄贈頂いた資料を引き続き大切に守って後世に伝えていって頂きたいと切に願うものである。

ここに報告した広野古墳群は、『播磨国風土記』[65]『古事記』『日本書紀』にみえる「オケ・ヲケ」伝承が知られる志染地域に属する。後に顕宗天皇・仁賢天皇として即位する「於奚（オケ）王子」「袁奚（ヲケ）王子」が逃れ隠れ住んだ地域とされる。在地有力者として登場する「志染村首伊頭尾（いとみ）」「志自牟（しじみ）」「縮見（しじみ）屯倉首忍海部造細目（いとめ）」が遺称として地名に現存している。そうしたなかで、広野野々池古墳群でみた小型前方後円墳を盟主とする古墳群の展開は、中央王権とのある一定の良好な関係を有する集団の存在が想起される。一方、広野西大廻古墳群は、独自性を発現しながらの古墳の展開はすでに述べたところで、非在地系集団によるものかもしれない。

最後に、中谷新吉氏の記録は、多くの方々が長年にわたって温めてこられたものであり、これを博物館活動として資料とともに広く公開できたことも、まさに博物館ならではの資料調査の取り組みといえよう。この拙文が、地域の歴史を解明するための一助となれば幸いです。

本報告をまとめるにあたって、下記の方々にご協力をいただきました。最後にはなりましたが、ここに記して深く感謝いたします。（山本）

神戸市教育委員会事務局（現：文化スポーツ局）文化財課、神戸市立押部谷中学校

阿部敬生、大西清尊、奥健治、小野田一幸、川野憲一、古賀英貴、関野豊、谷正俊、中村大介、中村善則、菱田哲郎、前田佳久、松林宏典、三好俊、安田滋

文献・註

（１） 中谷新吉「廣野古墳調査書　西大廻古墳発掘実況」(1950)、同「雄岡山周辺の古墳」(1953)『郷土史資料その２ 古墳関係書類』神戸市立押部谷小学校

（２） 神戸新聞社社会部編『祖先のあしあと』Ⅳ　大昔のくらし・古代の巻（古墳文化・後期）(1961)

（３） ①是川長、岡本道夫、西阪義雄、岸本雅敏「考古学上からみた三木地方の古代」『三木市史』(1970) ②是川長「広野古墳群」『兵庫県大百科事典』下巻　神戸新聞出版センター (1973)

（４） 註（３）①に同じ。

（５） 「歴史的環境」として中谷氏調査の概要を記載。島

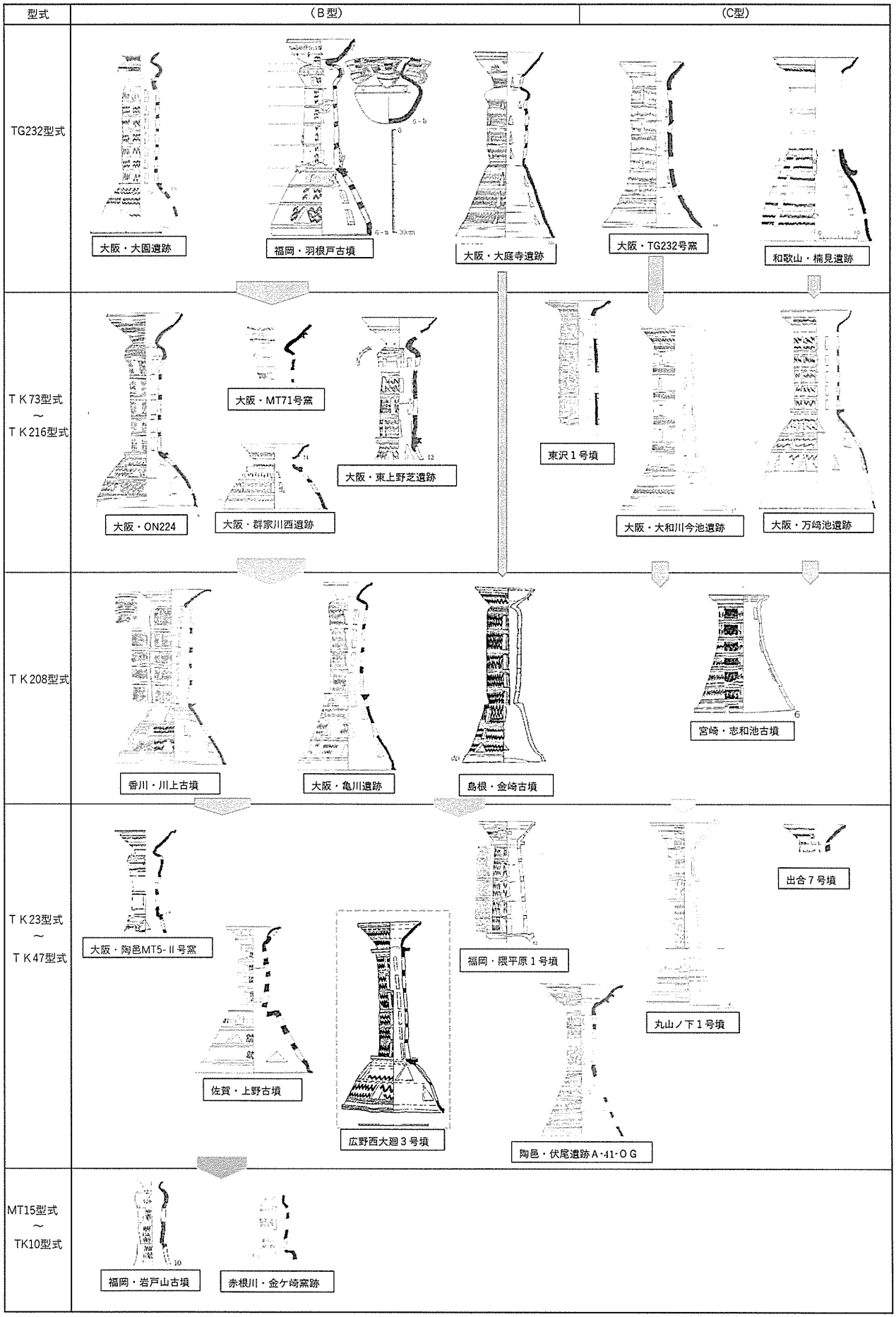


図17　須恵器筒形器台の変遷（案）

③広野西大廻３号墳の須恵器筒形器台

中谷氏の報告によれば、広野西大廻３号墳は直径12m、高さ約１ｍの円墳で、埋葬施設は礫床をもつ箱形木棺を直葬したものとされる。この埋葬施設の北西に接して当該の須恵器器台（報告では象形埴輪と称されている）が出土している。墳丘上に供献され、墓上祭祀に供されていたものと推定される。

当該資料のように全形が窺える須恵器器台は、全国的にみて、数量的にそれほど多い資料とは言えない。須恵器器台の体系的な系譜(45)については、朝鮮半島南部地域に故地を求める流れが自然で、高坏形器台、筒形器台の大きく２系統の系譜が想定されている。その流れのなかで、高坏形（Ａ型）では脚部底径を上回る口径を有する底のある坏部（受部）の発達が顕著である。筒形器台においては脚部底径には及ばない小型の坏部（受部）に底部が形成されないという形態的な特徴となっており、坏部と坏部に乗せられた壷等の球形体部を継承しながら一体化した形態（Ｂ型）を表現する流れと、球形表現を全く持たずに筒部と受部が単純につながった長脚台としての形態（Ｃ型）を継承する流れが存在するようで、日本ではいずれにしても陶邑Ｉ型式併行期を大きく降る資料は多くないようである。

こうした基本的な変遷のなかで、当該資料はいかに位置づけできるか。ここでは専ら管見に触れた日本国内での筒形器台の出土資料について検討を進めていこう(46)。

まず、Ｂ型の形態特徴である球形体部の意匠の形骸化と筒部の退化による変遷を想定できる。脚部の形態が直線的か丸みをもつかの形態差が認められるものの、福岡・羽根戸古墳(47)では明確に坏部と装飾壷が一連のものとして、脚台付の壷にさらに壷が乗せられた印象を与え、朝鮮半島南部地域での本来の形態を示す初現期段階として位置付けられ、加飾が顕著な点も古式に位置づけできる特徴といえる。大阪・大園遺跡(48)では外面の加飾は認められないが、壷部の表現が顕著であり、同時期のものと考えられる。また、大阪・大庭寺遺跡(49)では壷部底部のくびれが鈍化している点と筒部と脚部上端の接合部分が突帯ではなく屈曲した段を形成としている点が相違する要素として指摘できるが、この脚部形態は島根・金崎古墳(50)を経て、最終段階まで基本的に継続するものである。続く段階では、壷体部下半を表現したくびれ部が消失し、体部上半の丸みのみが残った段階を想定している。筒部が短くなる傾向も看取でき、これとともに坏部径も縮小していく。

広野西大廻３号墳では、筒部の上下端の突帯がむしろ特徴的である。上端の突帯は壷部の頸基部のくびれと上半の丸みを意匠的に変化させ、取り入れたものと想定している。全体的な作りも精巧であり、概して丁寧な調整が施され、熟練工人による作品と想像できる。出土当時に天地逆として認識されていたことからすると、脚部の形態が継続して製作された高坏形器台の坏部の形態を想起させるものであったことも頷けるところである。筒部が短くなり、退化が認められるものの、福岡・隈平原１号墳(51)で出土した筒形器台が筒部の上下に明確な突帯を造り出した同意匠の筒形器台の類例と言え、胎土分析の結果、陶邑窯跡群の製品であることが知られていることも付記しておく。

一方で、Ｃ型と分類できる筒形器台の類例からは、受部の小型化と筒部と脚部の退化の方向での変遷が窺える。出合７号墳(52)の周溝からは装飾が施された筒形器台受部（口径14.4cm、MT15型式～TK10型式併行）が確認されている。

以上のように、筒形器台の個別資料を大系的な検討では、定型化した後に円滑な連続性をもって変遷をたどることができる器種としての位置づけではなく、個体差が顕著なままに変遷していき、高坏形器台（Ａ型）へと収束していく変遷傾向が概ね把握できたものと考えられる。それぞれの個体の故地を個別・具体的にはなかなか特定するには至らないものの、朝鮮半島各地において製作された形態特徴に直接的な影響を顕著に受け、独自性も見せながら、筒形器台は須恵器の初現期からすでに製作されていた器種として認識できるのである。但し、横穴式石室の普及の影響による葬送儀礼の変容によるものか、やがては長脚化していく高坏形器台へと統合され、須恵器の器種として国内では淘汰されてしまったものと把握できる。

「重要な特徴」[24]として後期の指標とされてきた。しかし、その後の研究の進展によって、底部調整は川西編年Ⅳ期（中期後半段階）には出現することが判明している。奈良盆地北部では奈良県磯城郡田原本町小阪里中古墳例（TK208型式期）に、外面調整にB－d種ヨコハケを施すⅣ期の円筒埴輪内面にケズリ調整が確認されており、底部調整の先駆けと評価されている。続くTK23型式～TK47型式期には内面ケズリ調整は多用期を迎え、MT15型式期に底部外面を板押圧する底部調整が主流となることが指摘されている。TK23型式～TK47型式期は円筒埴輪製作に大きな変化が生じるとされ、従来の突帯間設定技法を継続する一群と、底部内面にケズリ調整を施し、突帯貼り付けに断続ナデ技法を用いるV群の特徴をもつ一群の出現と並列が指摘される[25]。

広野西大廻古墳群周辺における中期末～後期の円筒埴輪の類例からみると、明石川下流域の出合12号墳円筒埴輪（川西編年Ⅳ期・TK23型式期）は、成形または調整にタタキ技法を用いるもので、底部内面にヘラケズリ調整を施す[26]。また、鬼神山古墳群出土とされる円筒埴輪[27]（川西編年V期）は、突帯貼り付けに「断続ナデ技法A」[28]を用い、底部内面にケズリ調整を施すとみられるが、両者とも突帯間隔設定は行っていない。突帯間隔設定を伴う従来の製作技法と新たな製作技法の並列ということは明石川流域周辺にも認められる可能性がある。

このような点からみれば、広野西大廻4号墳出土の円筒埴輪は、川西宏幸氏の編年Ⅳ期[29]、埴輪共通編年Ⅳ期3段階[30]に相当すると判断される。明石川流域周辺では水谷2号墳[31]、延命寺2号墳[32]の円筒埴輪にB－d種ヨコハケが施され、水谷2号墳では須恵質焼成を含んでいる。この他、明石市太寺廃寺遺跡出土の円筒埴輪[33]にB種ヨコハケが認められる以外は、高津橋大塚2号墳[34]、神出新内古墳[35]、明石市寺山古墳[36]などのMT15型式～TK10型式期に相当する円筒埴輪にB種ヨコハケは存在していない。これらの状況から明石川流域周辺でのB種ヨコハケは、MT15型式期頃までと考えられることからも、5世紀末～6世紀初頭までの時期に位置づけられよう。

最後に、広野野々池古墳群には、埴輪を樹立した前方後円墳もしくは帆立貝形古墳とみられる2基の古墳が確認されている[37]。全長28mの前方後円墳の野々池7号墳は、墳丘が後世の削平により失われていたが、周溝内から多量の埴輪片が出土している。周溝は二重で、内堤上に円筒埴輪列が巡ることが確認されている[38]。これまでに兵庫県内で外堤上に円筒埴輪列が巡る例は、伊丹市御願塚古墳[39]、水谷大東古墳[40]の2例があり、二重周溝の内堤上への樹立例は、野々池7号墳以外には知られていない。この7号墳の円筒埴輪には、5条6段構成の大型品と3条4段構成の小型品がある[41]。5条6段構成の円筒埴輪は、1段目の高さが低く、2、3、5段目に円形スカシ孔を各2ヶ所、千鳥格子状に穿つ。口縁部内面には強いヨコナデを施す。3条4段構成の円筒埴輪は、1段目がやや高く、2段目と3段目に円形スカシ孔を各2ヶ所、千鳥格子状に穿つ。1段目の突帯貼り付けを「断続ナデ技法A」による個体があるが、突帯の上下の器壁に突帯貼り付け時の爪の痕跡は確認されない。両者とも円筒埴輪の外面は、左上方へのナナメハケ調整を施し、1段目にヘラ押圧による底部調整を施す。内面はユビナデ調整を施し、口縁部に横方向にナデを施す。焼成は良好で、硬質須恵質である。川西編年V期と考えられる。

明石川本流域には2条3段構成を中心とした円筒埴輪が主に分布し、吉田南遺跡や明石川の支流である伊川流域には、3条4段構成の円筒埴輪が分布し、様相に明らかな差異が認められる[42]。4条5段構成の円筒埴輪は全く認められないうえに、野々池7号墳に見られた6条5段構成の円筒埴輪は同流域ではこれまでに知られていない。

古墳時代後期には、古墳の墳形や規模に応じた円筒埴輪の規格による階層差が指摘され[43]、円筒埴輪の段構成による序列化が、後の畿内と呼ばれる範囲を中心に展開したとの見解がある[44]。広野野々池古墳群では、7号墳が全長28mと小型の前方後円墳でありながら、5条6段構成の円筒埴輪を有することが、畿内を中心とした序列化の中でどのような評価ができるのかは、広野西大廻古墳群との関係を考えていくうえでも興味深い。（阿部）

さらに、当地域の横穴式石室の導入に関して、中谷氏報告の日吉谷古墳群のなかに「T字形」横穴式石室を有する古墳の存在が見えることも興味深い。古墳時代後期において、横穴式石室の受け入れは各地域で画期的な出来事であったはずであり、垂水区舞子古墳群での造墓の契機と推定できる毘沙門1号墳(19)がT字形横穴式石室を採用している点なども示唆に富む。ここでは、今後の課題として提示するにとどめておきたい。(山本)

	印南野台地				美嚢川・志染川流域			明石川流域			
	広野西大廻	広野野々池			高木	吉田住吉山	吉田・大池				
TK208型式					○			出合・水谷			
TK23型式					○	⑥㉓		●▶	天王山中村	○	
TK47型式	❹ ③	▶❼ ▷⑲	金棒池		○			○	●	◎	
MT15型式	①②	⑨	▷①	神出新内	○		○	○	○	○	□
TK10型式	◌	○		●	○	⑨⑦②	□	○		○	□
MT85型式	◌	⑨									□
TK43型式	◌	⑨□									□
TK209型式	◌	□									□

●:木棺直葬系(埴輪あり)
○:木棺直葬系
□:横穴式石室

図16　各古墳群の変遷(模式)(20)

②広野西大廻4号墳の埴輪について

円筒埴輪の外面調整は、タテハケ及びナナメハケ調整を基本とするが、静止ヨコハケ(B－d種ヨコハケ)やヨコハケ(B種ヨコハケ)による2次調整を伴う個体が含まれている。一部に黒斑が認められる個体があり、須恵質焼成は伴わないものの、総体的に焼成状況は良好硬質であり、窖窯焼成による川西宏幸氏の編年Ⅳ期(以下川西編年(21)とする)に相当するものと考えられる。このことから、黒斑は「焼きムラ」である可能性が考えられる。5では突帯間隔設定が行われ、凹線によるB手法(22)を用いている。3のように突帯間隔がともに16cmと揃う例も、突帯の貼り付けに、帯間隔設定が行われていることを肯定するものといえよう。内面調整はユビナデ及び指頭圧痕を基本とするが、1や2では底部内面に横方向のケズリ調整を施しており、底部調整(23)と考えられる。1の底部外面に認められるヘラナデ状の工具痕も、板押圧による底部調整であろう。

古墳時代後期の円筒埴輪の成形・調整は、底部から口縁部まで粘土を一気に巻き上げるようになったことにより、軟弱な器体の自重による変形を修正した底部調整が施され、川西編年第V期(後期)の

名称	墳丘			埋葬施設				外部施設
	墳形	直径(m)	高さ(m)	構造	主軸	棺内遺物	その他	
4号墳	円	12	1.3	礫床	東西	鉄剣		埴輪列(1.2m間隔で合計31本)
3号墳	円	14	1.0	礫床・板石	東西	鉄刀	西北隅に須恵器筒形器台	
2号墳	円	17	1.8	全壊により詳細不明		鉄刀		
1号墳	円	16	2.5	粘土槨	東西	鉄刀 鉄鏃12	歯牙	粘土槨上面に土器埋納坑？

広野西大廻古墳群　古墳一覧表

向って墓域を拡大したものと推測される。こうした埴輪を有する古墳が古墳群の形成の契機となった場合が存在することが窺え、単独の立地とされる神出新内(あらうち)古墳⑫の築造契機にも注意を払うことが必要と考えられる。

これに対して、広野野々池古墳群では、小型の帆立貝形前方後円墳として、形象埴輪を含む埴輪を外部施設として有する野々池７号墳（全長28m）と同19号墳（？m）の２基が盟主墳として存在し、階層的な構造を構成しつつ、木棺直葬墳から横穴式石室墳へと時期的な推移もみせ、群集墳としての密な分布状況が確認できた。両古墳群の関係として、その被葬者には共通要素は余りなく、むしろ集団と階層に明らかな相異を認めざるを得ないのではなかろうか。

これまで両古墳群は明確な根拠のないままに「広野古墳群」と称される大きなくくりのなかで、明石川上流域の古墳群として、主に中谷氏の報告を分析することによって、評価されてきた。特に、広野西大廻古墳群は、現在の行政区では神戸市と三木市の市境に立地していたことからも、早くに開発によって破壊されてしまったことも要因となり、詳細な評価付けできないままとなってきている。

明石川中流域～下流域では、古墳時代中期から後期にかけての時期（ＴＫ23型式～ＴＫ10型式併行期）に埋葬施設が木棺直葬を採る小型円墳を主体とする古墳群が、丘陵上や段丘上に形成される⑬。その造墓の契機となったのは、いずれの地域にあっても、帆立貝形前方後円墳の造営であったことが想定できよう。当該期の明石川下流域に営まれた小型帆立貝形前方後円墳には、水谷大東古墳（西区水谷、全長20.5m、馬蹄形周溝、TK23型式）⑭、天王山３号墳（西区天王山、全長25.0m、埋葬施設：木棺直葬？、ＴＫ47型式）⑮、出合亀塚古墳（出合１号墳）（西区中野、全長29.0m、馬蹄形周溝、須恵質埴輪、TK23型式）⑯、中村５号墳（西区平野町印路、全長16.3m、埋葬施設：木棺直葬２基、TK47型式）⑰があることはよく知られている。

その一方で、明石川中流域～上流域にかけての地域では、古墳群形成の契機となるべき盟主墳の存在が希薄で、唯一前方後円墳として知られてきたのは金棒池１号墳のみである。前方部を西南西に向けた全長約30mの前方後円墳で、埴輪を伴わないＭＴ15型式併行期とされている⑱。近年では瀬戸川の最上流域の古墳として位置づけられることもあるが、地形観察からは周囲が山稜に囲まれているものの、北西方向に開析する谷の最深部に当り、草谷川水系に属するものと判断できる。これは同一の高位段丘上に立地する野々池７号墳、野々池19号墳の存在とともに注視しなければならない存在となる。いずれの古墳も概して西方向を指向している点でも共通しているといえる。

最後に、現状ではなかなか期待できないとはいうものの、印南野台地上での古墳時代後期の集落遺跡もしくは須恵器窯跡の発見が待たれるところである。段丘上での古墳群の立地環境だけを単純に比較すると、同様な印象を与える出合古墳群の立地のあり方を含めて、今後の検討課題として指摘できよう。

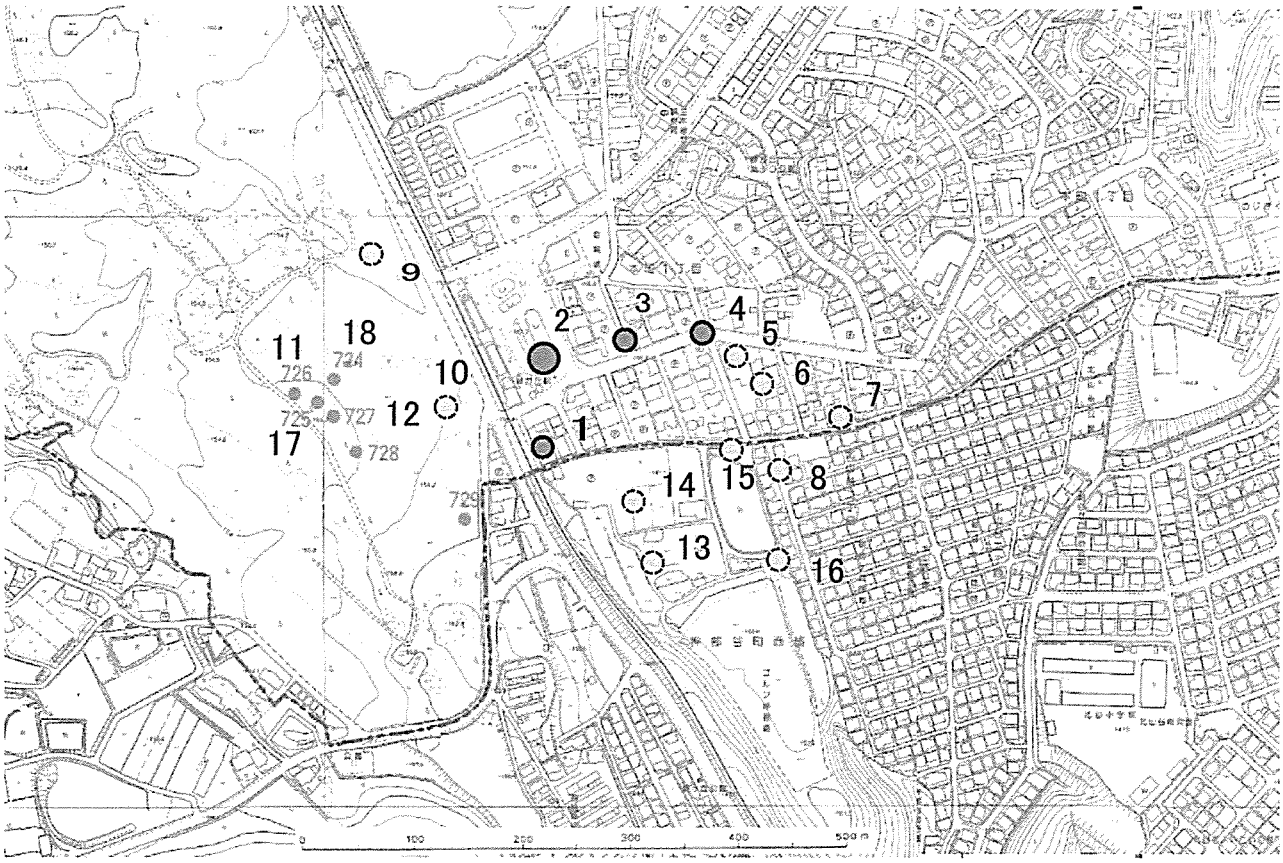


図 14　広野西大廻古墳群　分布図（現存：724 ～ 729）

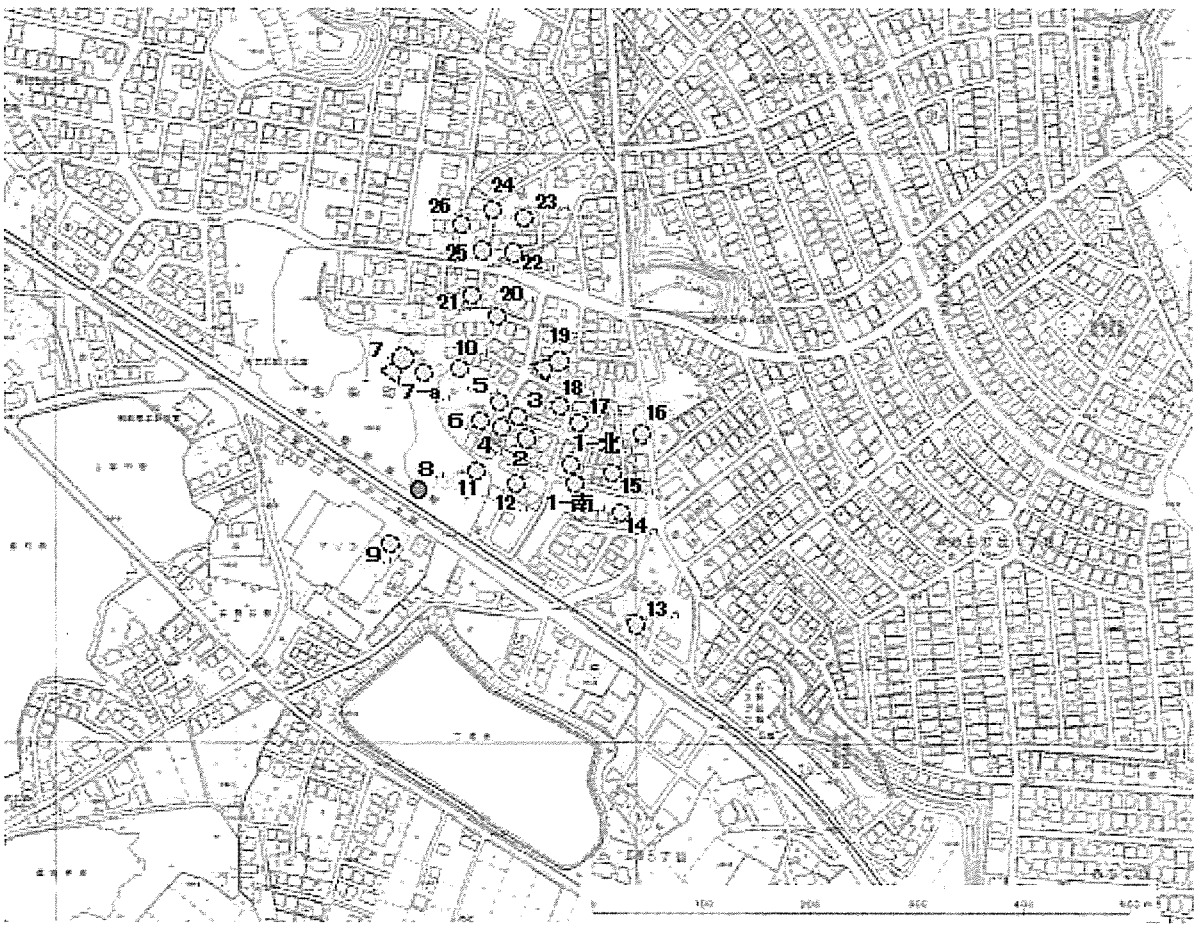


図 15　広野野々池古墳群　分布図（現存は8のみ）

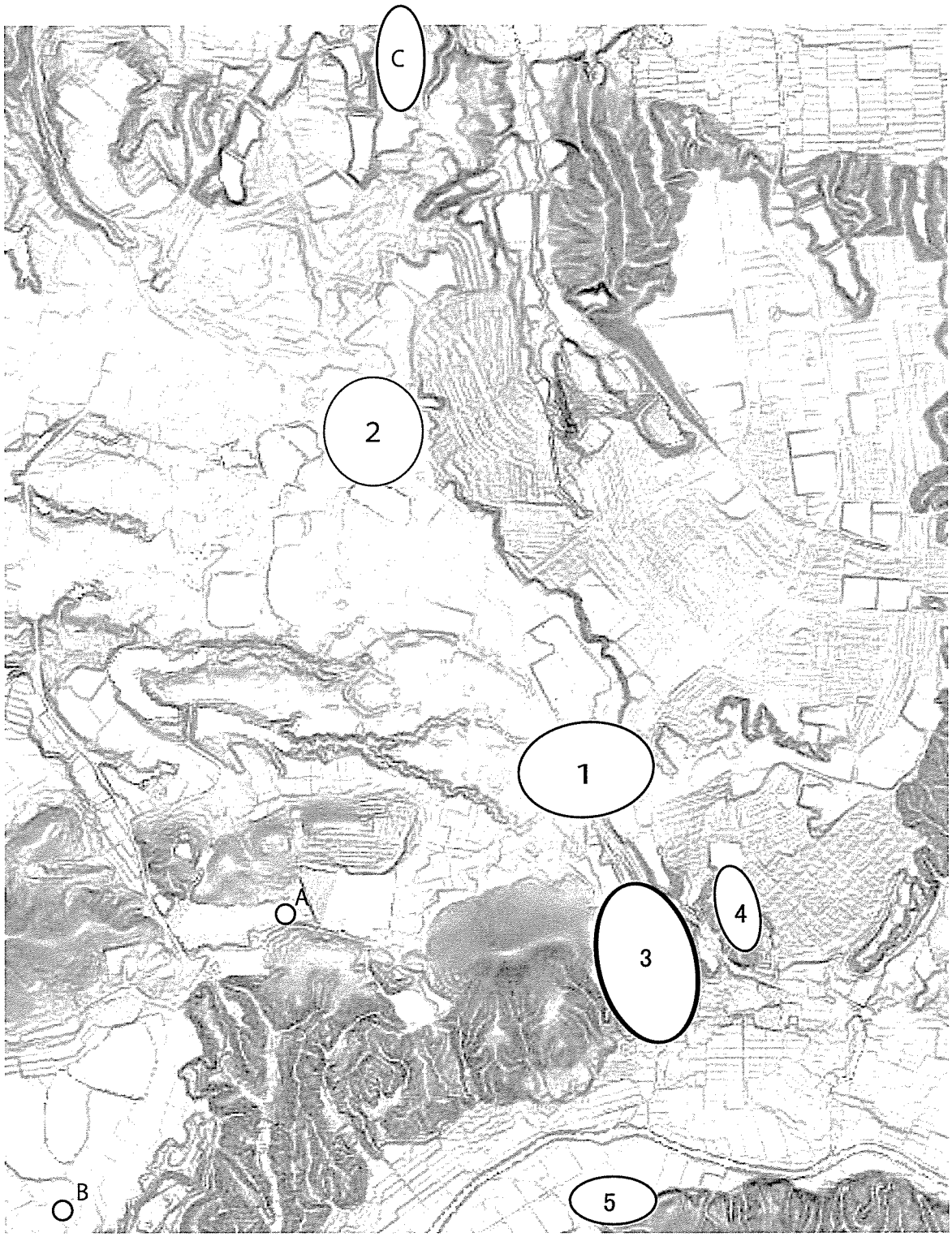


図 13-2　広野西大廻古墳群と広野野々池古墳群の位置（国土地理院傾斜量図≒1:25,000）

1：西大廻古墳群　2：野々池古墳群　3：日吉谷古墳群　4：緑ヶ丘古墳群　5：道心山古墳群

A：金棒池1号墳　B：神出新内古墳　C: 吉田古墳群

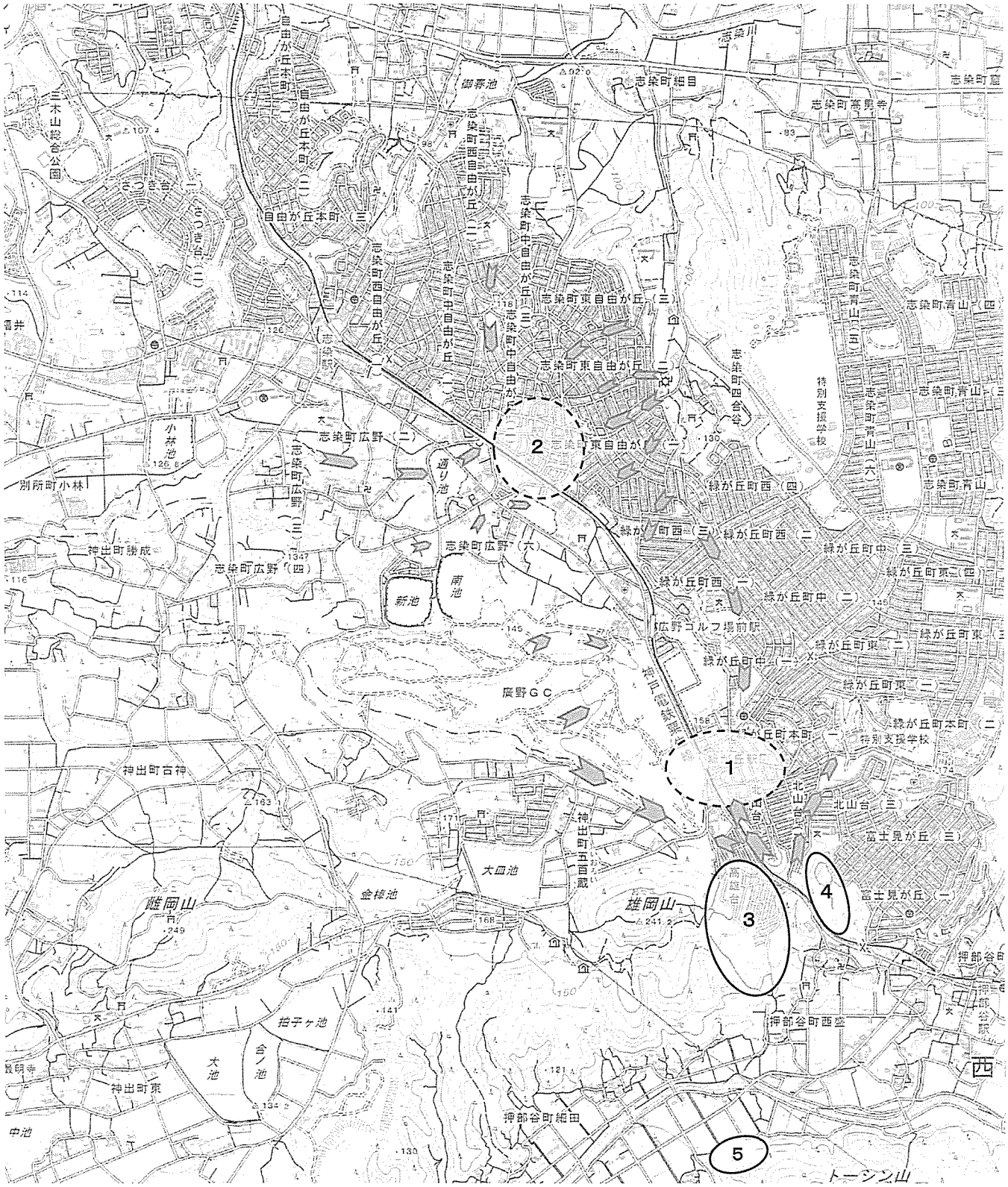


図 13-1　広野西大廻古墳群と広野野々池古墳群の位置（国土地理院地形図　1:25,000、矢印は谷筋）

1：西大廻古墳群　2：野々池古墳群　3：日吉谷古墳群　4：緑ヶ丘古墳群　5：道心山古墳群

5.　若干の考察

ここまで、中谷新吉氏の記録に導かれながら、広野古墳群出土の資料について紹介してきた。以下、いくつかの気になる点を検討していきたい。

①広野古墳群（西大廻古墳群・野々池古墳群）の分布

昭和25・28年の中谷氏による報告では、神戸市垂水区（現：西区）押部谷町西盛から三木市志染町広野新開の範囲に分布する古墳群という大きなくくりのなかで、「広野古墳群」として呼称され、「西大廻」と「野々池（沢）」における古墳の群集が把握されていた。しかし、直線距離で約1.5～2.0kmの隔たり(図12)があることから、両古墳群は同一集団によって形成された奥津城としては掌握しづらいものと考えられる。

広野西大廻古墳群は現在の三木市緑が丘町本町を主体に三木市志染町広野７（広野ゴルフ場内）から神戸市西区北山台（標高155～160m）にかけて広がり、広野野々池古墳群は現在の三木市志染町東自由が丘～中自由が丘（標高140～150m）に広がっている。現在は神戸から三木へ抜ける交通幹線となっており、神戸電鉄粟生線あるいは県道神戸三木線に沿って、この幹線の北側を主にした住宅地開発が繰り返されてきている。明石川流域と志染川流域を最短で結ぶ経路上に位置している点からも、古代から交通要路として重要視されてきたことが想定される。

両古墳群の立地は、雌岡山（標高249m）・雄岡山（標高241m）を頂点とした印南野台地の北東端にあたる。地形図からは、両古墳群とも加古川の支流である草谷川を東方向へ遡っていった最上流域の最深部に位置することが読み取れる。広野西大廻古墳群は宮ノ谷池（呉錦堂池）からさらに南東へ遡り、広野野々池古墳群では勝成池から東方へと遡り、段丘面に西南西方向から入る小支谷が複雑に形成した南西側に開く緩斜面に立地するようである。広野野々池古墳群では、可耕地までの最短距離となる、美嚢川の支流で北東方向の志染川の枝流細目川からの分流である四合谷川が北流して形成する、比高差約60mの北方の支谷を指向していた可能性もあるが、段丘崖が顕著に発達しており、容認しがたい。そこで、野々池７号墳や19号墳における前方部の指向性を重視し、南西方向へ開析する緩やかな斜面地での古墳の占地を積極的に提示しておきたい。

一方、西大廻古墳群は、押部谷町西盛から開析谷を伝って段丘面へ登り切った地点での立地といえる。南側山麓斜面に展開する日吉谷古墳群および東南山麓に立地する緑ヶ丘古墳群よりもさらに奥まった、雄岡山から続く緩やかな馬の背状の尾根筋の背面となる東西方向の小支谷の北側に立地するという把え方もでき、広野野々池古墳群と同様に西方向を基本的には指向するものとして扱っておく。

さて、西方向への指向性を指摘できた両古墳群であるが、当該期の集落遺跡は近隣では全く知られておらず、どこに形成された集団の奥津城として位置づけできるのであろうか。古墳時代後期の集落遺跡としては、広野西大廻古墳群から最も至近の可耕地である明石川上流域の河岸段丘上に立地するＴＫ23型式～ＭＴ15型式併行期の集落遺跡である西盛南遺跡(10)の存在（直線距離で約1.7km）が指摘できるものの、両者間では相互に視認できる環境にはない状況といえる。集落遺跡の至近に後背する丘陵上に奥津城を求める事例が多い点からみても、両古墳群の立地の特異性が指摘できるところである。

なお、『三木市遺跡分布地図』(11)に中谷氏の作成された「明細図」を重ねて作成したものが図14と図15である。旧地形が判然としないため、それぞれの古墳の占地を詳らかにはできないものの、西大廻古墳群で19基、野々池沢古墳群27基を数える、それぞれの古墳の個別の位置関係が概ね窺えるものであろう。

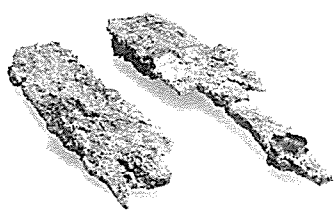
改めて、二つの古墳群について比較しながら、その特徴を明らかにしておきたい。

まず、広野西大廻古墳群では、単純に木棺直葬した埋葬施設を採るのではなく、粘土槨、赤色顔料や礫床の存在などから、個性的な特異な被葬者像を想定しておきたい。群中に横穴式石室墳を含まず、古墳間での距離がやや離れ、墳丘裾が接するような分布傾向もなく、疎な分布の傾向が看取できる。資料調査の結果、円筒埴輪だけでなく形象埴輪でも飾られた円墳として報告できる４号墳が明らかに先行して築造され、３号墳、（２号墳）、１号墳の順に西へ

44

45

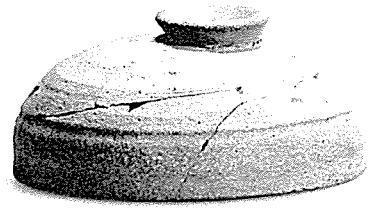
46



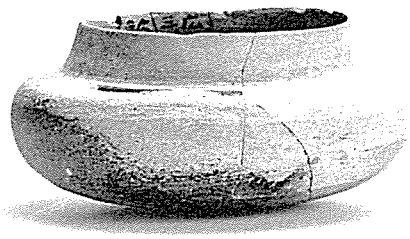
48

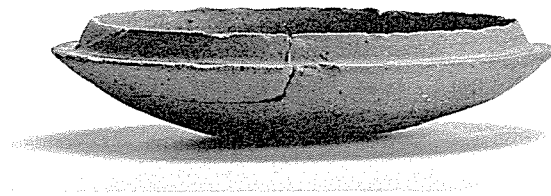
47

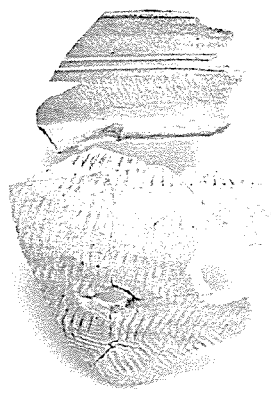
広野古墳群出土資料（神戸市立博物館蔵）


34

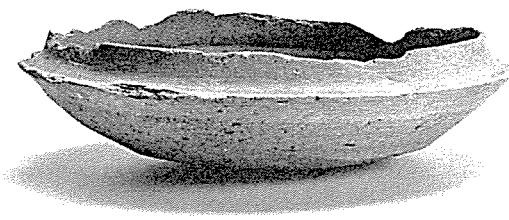
38

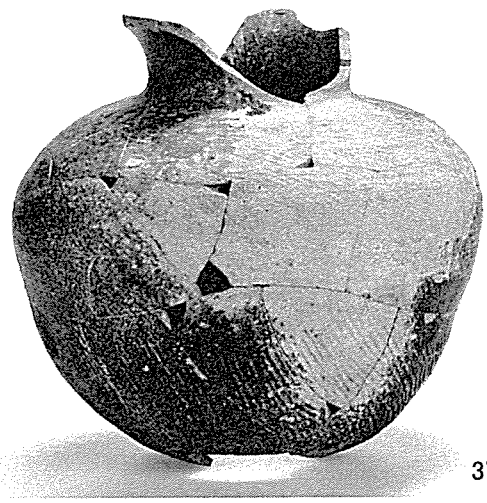

35

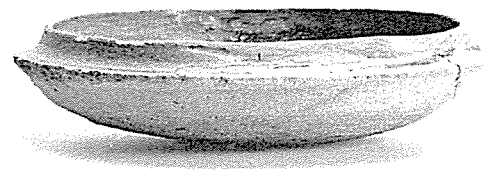

40


36

41


42


37


43

広野古墳群出土資料（神戸市立博物館蔵）

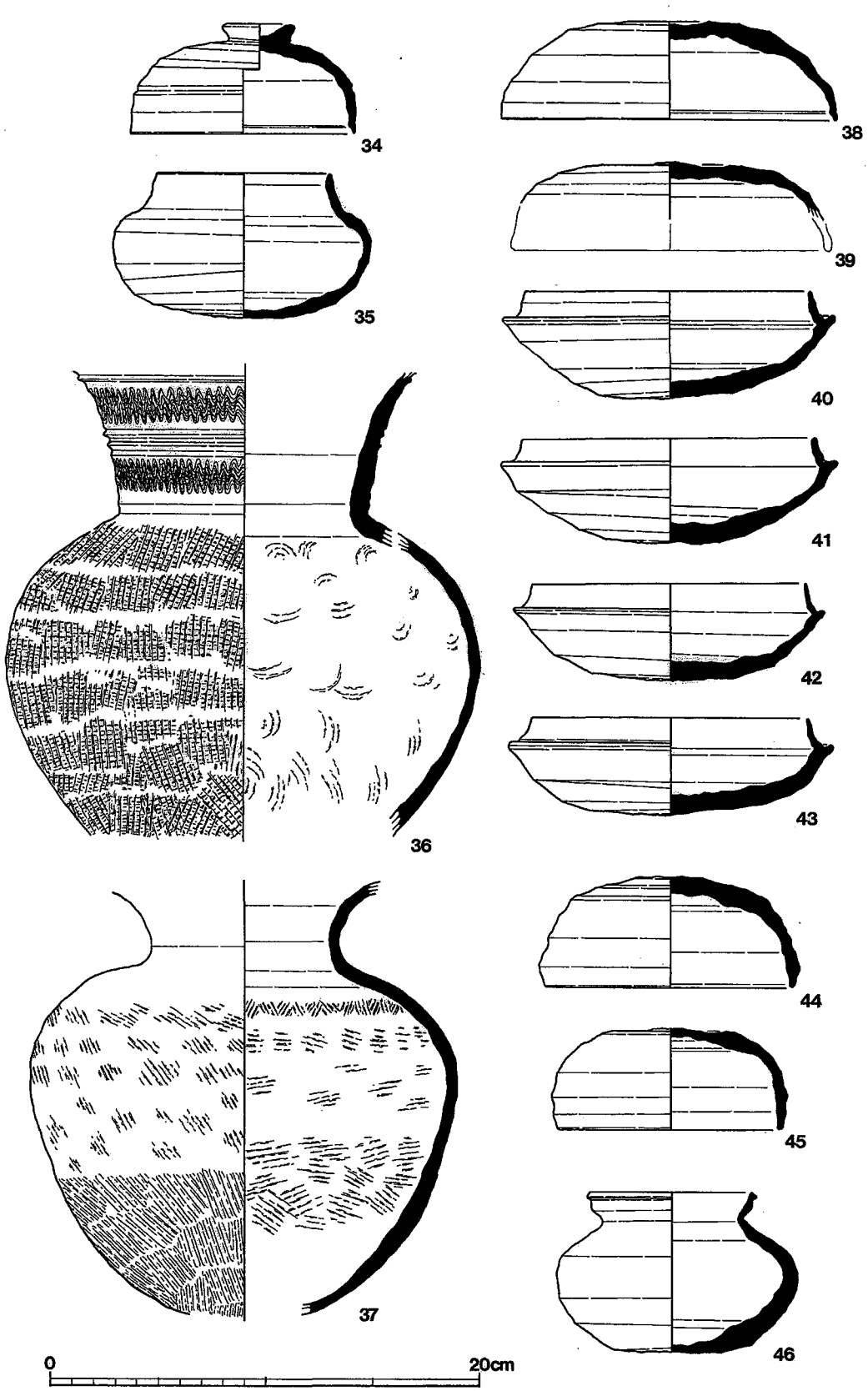


図 12　広野古墳群出土の須恵器（赤松コレクション）

行期）の資料と考えられる。広野所在の古墳群でも、広野野々池古墳群における出土資料の可能性がある。38は口径15.6cm、器高4.6cmの坏蓋で、口縁部内面は内傾する凹状を呈する。天井部外面中央は回転ヘラ切り未調整となっているが、その周囲を回転ヘラ削り調整する。39は口縁部を欠損する天井部のみで、天井部外面は回転ヘラ切り未調整で、この周縁にのみ粗雑な回転ヘラ削り調整を施す。内面には複数回の同心円文当て痕が確認できる。なお、図化できていないが、39の坏蓋と胎土が酷似する坏蓋の口縁部片も存在する。40は口径13.2cm、器高5.0cmの坏身で、底体部外面は回転ヘラ削り調整で、内面は円弧状当て痕が密に確認でき、手ズレ様となっている。41は口径13.6cm、器高4.9cmの坏身で、底体部外面の4／5が回転ヘラ削り調整で、胎土に砂粒が多く含まれるため、カキ目状の仕上がりである。42は口径12.6cm、器高4.5cmの坏身で、底体部外面は回転ヘラ削り調整で、内面には同心円文当て痕が複数回確認できる。43は口径12.8cm、器高4.5cmの坏身で、底体部外面回転ヘラ削り調整で、内面中央に同心円文当て痕がある。

44～46は「美～広の」の注記がある須恵器の一群である。44は口径10.3cm、器高4.7cmの坏蓋で、天井部外面は回転ヘラ切り未調整で、内面には円弧状当て痕がかすかに残る。45も坏蓋で、口径11.5cm、器高5.1cmで、天井部外面が回転ヘラ切り未調整で、内面には回転ナデ後の円弧状当て痕が確認できる。46は小型の広口壷で、口径7.5cm、体部最大径11.2cm、器高7.5cmである。口縁部は二重口縁様に斜上方に延び、端部は鋭くつまみ出され、平坦面を形成する。体部は扁球形で、底部は平底に近い。底部外面は回転ヘラ切り未調整で、周縁に回転ヘラ削り調整を1周施す。いずれもＴＫ209型式併行期とでき、これらも広野野々池古墳群の出土資料かもしれない。

47・48は腸扶柳葉式の有頸有茎鉄鏃で、出土古墳の根拠がない。欠損部があるものの、両者とも長さ6.3cm、幅約2.0cm、厚さ0.3cmで腸抉をもつ鏃身部と、残存長4.6cmの頸部（0.4×0.7cmの断面長方形）、茎部（0.3cm角）が確認できる同一規格の鉄鏃であり、関部は不明である。広野西大廻1号墳と同時期のものであろうか。（山本）

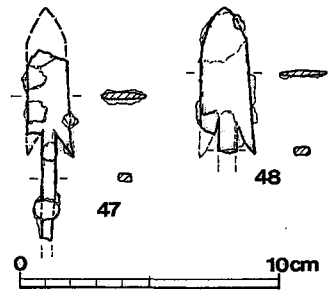


図11　広野古墳群出土の鉄製品
（赤松コレクション）

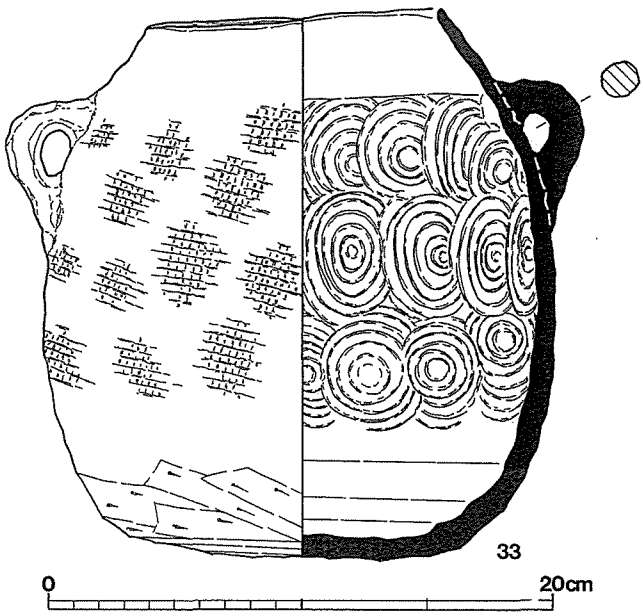


図9　広野野々池沢18号墳（現：野々池3号墳）出土の須恵器無頸壺

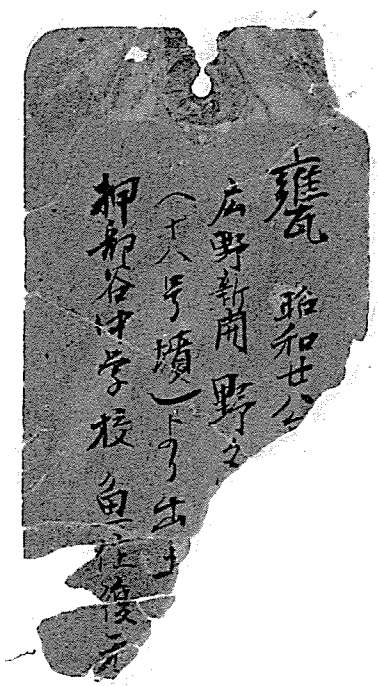


図10　広野野々池沢18号墳出土須恵器無頸壺内の荷札

4. 神戸市博物館所蔵の広野古墳群出土資料

当該資料群は当館前身の神戸市立考古館所蔵の資料を引き継いだもので、もともと赤松啓介氏が採集・保管されていたものである。総点数は99点で、図化できた資料には須恵器13点、鉄製品２点がある。各資料には墨書によって「三・広１」「三・広２」「三・広３」「三木・広の３」「美～広の」などの注記のあるものが含まれる。いずれも美嚢郡志染町（現：三木市）広野にかつて所在した古墳の出土採集資料であることは想定できるものの、残念ながら具体的な出土古墳は不明と言わざるをえない。

34～37は「三・広１」の注記があり、精選された胎土をもつ須恵器の一群で、上述した西大廻４号墳と同時期頃（ＴＫ47型式併行期）の資料と考えている。短頸壷34は口径8.0cm、体部最大径12.1cm、器高6.7cmの完形で、やや長めの口縁部が内傾して延びる。体部は扁球形で、外面下半は丁寧な回転ヘラ削り調整である。35の蓋であることが想定できるつまみを有する壷蓋で、口径10.5cm、器高5.1cmのほぼ完形である。外面には鈍い凹線を伴う稜があり、口縁端部内面は内傾する凹状を呈する。内面中央に赤色顔料が付着する。36は約25%が残存し、図上で復元した壷である。頸基部径11.6cm、体部最大径22.2cm、残存高21.9cmである。口縁端部と底部は欠損する。頸部外面は２条の突帯で区画され、櫛描波状文で飾られる。体部外面は５条／２cmの格子風叩きで仕上げられ、内面には条痕が不明瞭な円弧状当て痕が確認できる。37は「三・広１」の墨書はないものの、その特徴からこの一群として取り扱うこととする。口縁端部と底部を欠く小型の甕である。口頸基部径8.8cm、体部最大径20.0cm、残存高20.0cmである。口頸部は無文で回転ナデ調整である。体部の外面下半は４条／cmの左上りの平行叩き仕上げ、上半は回転ナデによるスリ消しが顕著である。内面の底部中央はナデ仕上げで、これより上位は平行叩き当て痕を半スリ消しで仕上げ、最上位では平行叩きの交差が指頭圧痕内に確認できる。

38～43は「三木・広の３」の注記がある須恵器の一群で、６個体のいずれもが蓋坏であり、上述した広野西大廻１号墳よりも新しい時期（ＭＴ85型式併

0.5cmの円形に近い。

以上の資料のほか、単独遊離した歯牙2点と、出土状態を保っていると想定できる、切り取られた土塊の中にある歯牙列（図7、木箱に収められている）がある。頭位の異なる2体の遺骸の存在が報告されており、前者は粘土槨内の北寄りで出土した成人の臼歯と考えられ、後者がもう一体の遺骸の上顎と下顎を分けて拡げた状態とも推定できる。いずれも歯冠部のエナメル質のみが残存するものであり、鑑定によって被葬者の具体像に迫れる可能性があるが、ここでは詳細について報告することはできない。

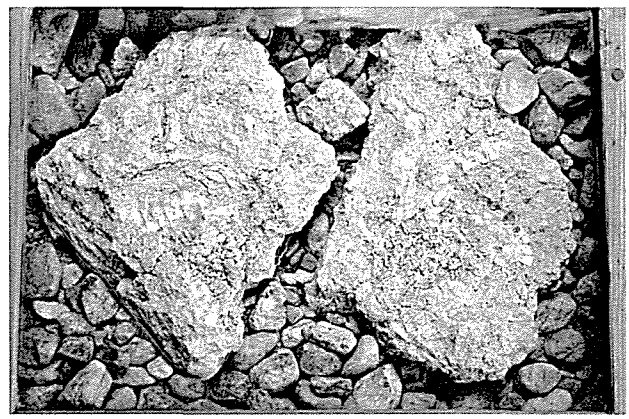


図7　広野西大廻1号墳出土の歯牙　近景

④広野西大廻2号墳出土の資料

「目録」には坩1、鉄刀1の小計2点の資料が確認できる。32は「目録」整理番号54に該当する資料で、残存長41.6cm、最大幅2.5cm、最大厚0.6cmで、地金部分が辛うじて遺存する程度で、全容は窺えない。木質部がわずかに遺存する。直径0.3cmの目釘穴が明確に遺存する。

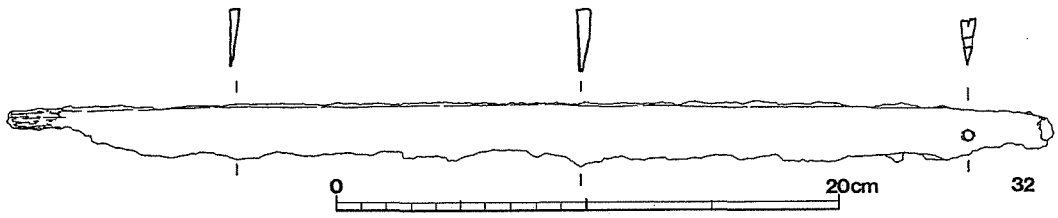


図8　広野西大廻2号墳出土の鉄刀

⑤広野野々池18号墳（現：野々池3号墳）出土の須恵器

当該資料も市立博物館開館以前から永らく、神戸市立押部谷中学校からお預かりしていた資料で、博物館地下階の収蔵庫内で他の陶器等の美術資料に紛れていたものである。一時的に風見鶏の館で保管されていた旨が収納箱に記されていた。ここでは同梱されていた荷札片「甕　昭和28年／広野新開野々／（十八号墳）より出土／押部谷中学校　魚住復元」の記述を尊重し、18号墳としているが、昭和41年(9)に新たに古墳番号が整理されたため、3号墳として修正報告された古墳と同一と考えられる。この報告によると、横穴式石室をもつ古墳で、鉄製刀子、鉄製杏葉、須恵器盌、土師器坏が出土している。なお、中谷報告でも、埋葬施設として横穴式石室をもつ野々池沢18号墳出土資料について触れ、出土資料の散逸が憂慮されている。

33は口縁部をわずかに欠損するものの、完形の無頸壺である。法量は口径11.6cm、体部最大径20.3cm、底径13.1cm、器高21.8cmである。やや丸みをもつ底部から内湾しながら立ち上がる体部と、口縁部は体部からそのまま内傾して延び、端部を単純に丸く収める。焼き歪みにより、口縁部は正円を呈さず、体部もやや扁球形である。体部外面の上半には提瓶で通有に見られる断面円形の環状把手が対置方向に2ケ貼り付けられる。調整は底部外面には不整の右から左方向のヘラ削りを含む回転ヘラ削りが丁寧に施され、体部外面は3条／cmの格子風叩きの後回転ナデによる半スリ消し、内面には同心円文叩きの後ナデによる半スリ消しである。口縁部は内外面ともに回転ナデである。外面には暗緑色～乳灰色の自然釉を厚くかぶるほか、別個体の熔着痕が3ケ所以上確認でき、底部外面には直径10cmに復元できる円形の火襷痕もある。

をもつ。直径1.2cmの円孔は外面から穿孔される。頸部上半には細かい条線の櫛描波状文を施す。頸部から二重口縁様に延びる口縁部は外面を５～６線１条の櫛描波状文で飾り、端部は鋭く外傾する。体部下半は丁寧なナデ仕上げである。

20は「目録」の整理番号８に該当する台付把手付埦で、口径13.3cm、器高14.3cm、底径8.9cmである。体部中位に断面楕円形の棒状の把手が１方向に付される。短く外方に踏ん張り、端部で肥厚して終わる台部には、３方向に直径1.5cmの円形スカシが外面から穿孔される。

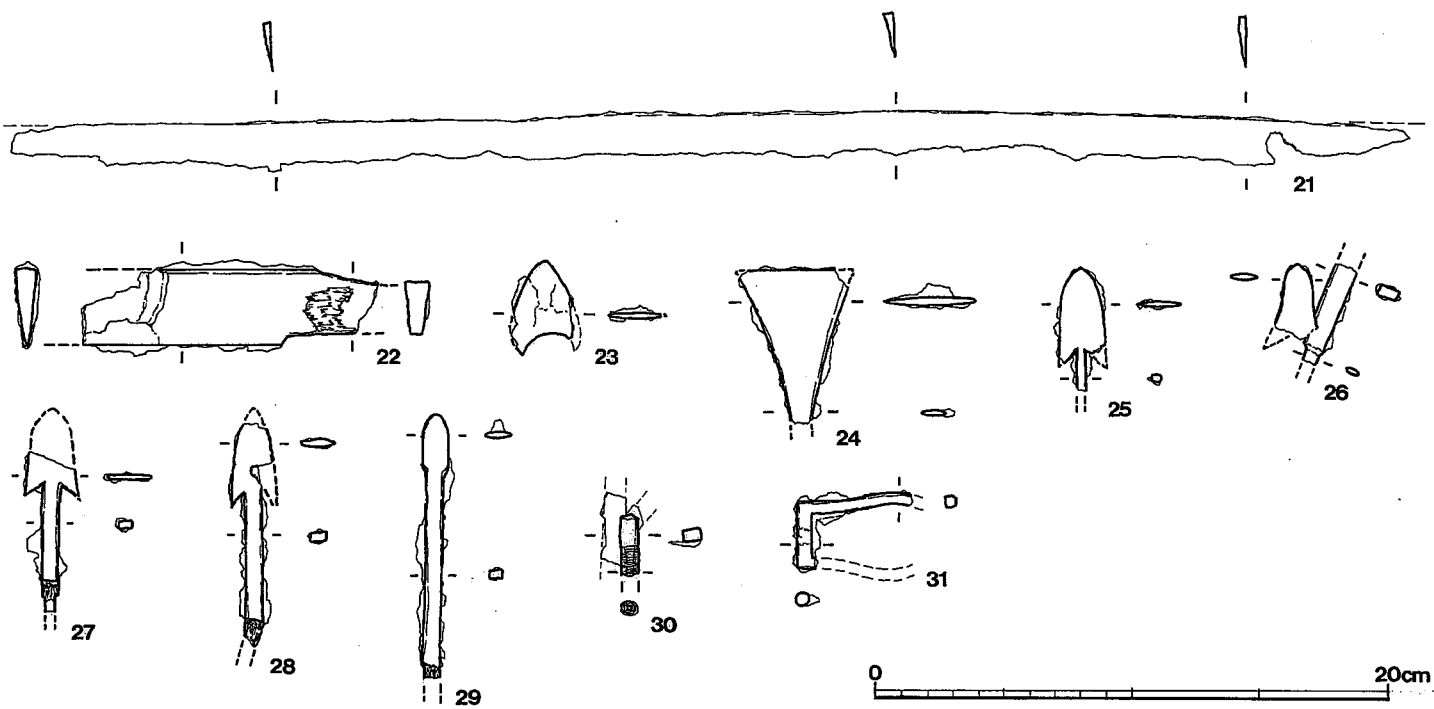
21は目録整理番号53の鉄刀と推定できる。地金が残存する程度で、残存長54.6cm、最大幅2.0cm、最大厚0.4cmである。

22は３号墳出土(10)の鉄刀と刃幅と重量感が近似する資料である。一部木質が確認できる。残存長11.4cm、最大幅3.7cm、最大厚0.9cmである。

23～30は鉄鏃である。23は無茎鏃で、長さ3.8cm、最大幅2.3cm、最大厚0.3cmで、断面は平造である。

24は方頭式鏃で、残存長6.3cm、最大幅4.2cm、最大厚0.4cmで、断面は平造である。25は腸抉柳葉式有茎鏃で、頸部断面が0.4×0.3cmとやや繊細である。残存長5.0cm、最大幅3.9cm、最大厚0.3cmで、平造である。26も柳葉式有茎鏃と想定しているが、長頸鏃の関部を含む頸部片と錆着している。鏃身部は残存長3.0cm、残存幅1.6cm、最大厚0.3cmで、頸部は不明瞭である。一方、長頸鏃頸部は残存長4.1cmで、断面は0.8×0.4cmの扁平な長方形で、不明瞭な角関に至る。27は腸抉柳葉式長頸有茎鏃で、残存長6.4cmである。鏃身部を１／２欠くが、残存長1.8cm、最大幅2.1cm、最大厚0.3cmで、平造である。頸部は0.5×0.4cmの断面長方形で、角関を経て、木質の遺存する0.3cm角の断面方形の茎部に至る。28も腸抉柳葉式長頸有茎鏃で、残存長9.0cmである。鏃身部を一部欠くが、残存長3.3cm、最大幅1.8cm、最大厚0.3cmの平造である。頸部は0.6×0.4cmの断面長方形で、角関を経て、木質の遺存する0.3cm角の断面方形の茎部に至る。鏃頸部主軸に対して、茎部木質が斜行している。29は柳葉式長頸鏃で、残存長10.7cmで、頸部にはややひねりがある。鏃身部は全長2.3cm、最大幅1.0cm、最大厚0.3cmで、平造である。頸部は0.5×0.4cmの断面長方形で、角関を経て、木質が明瞭に遺存する茎部は0.4cm角の断面方形である。30は長頸鏃の角関部で、木質に巻き付けられた有機質材が明瞭に遺存する。残存長2.5cm、頸部は0.7×0.5cmの断面長方形、茎部は0.3×0.2cmの断面長方形である。

31は絞具で、最大幅3.2cm、最大長4.5cm、断面は



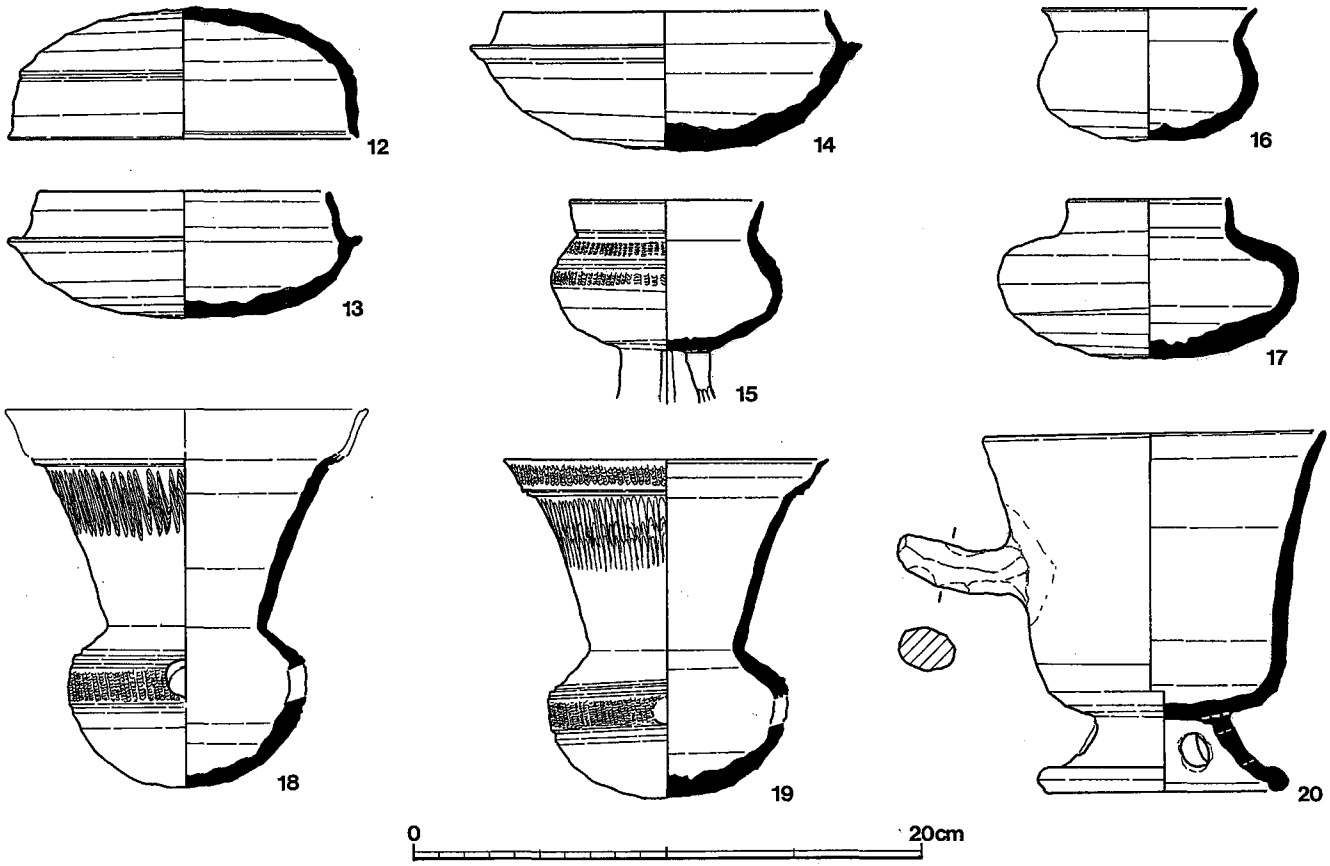


図5　広野西大廻1号墳出土の須恵器

たちあがりは長く、端部は丸く収める。底体部は丸みをもち、やや浅い感を受ける。内面中央部に不整ナデが施され、外面の3／4には回転ヘラ削りが施されるが、回転ナデとは逆の反時計回りのロクロ回転によるものである。

14は「フトヘナタリウミニナ」の貝殻標本を7個体入れた状態で展示されていた須恵器坏身で、内面には「No.28」と記された「目録シール」が貼り付けられている。口径12.6cm、受部径15.2cm、器高5.5cm、たちあがり高1.2cmである。内傾して延びるたちあがりの端部は丸く収め、受部は鋭く仕上げる。底体部は深く丸みをもち、外面1／2は幅広いヘラ削り調整である。

15は脚付短頸壷で、脚部は欠損する。口径7.5cm、体部最大径9.0cm、残存高8.0cmである。体部外面上半には5点1帯の櫛描列点文が2段に施される。脚部のスカシは4方向に外面から穿たれる。

16は旧来「盌」と呼称された鉢で、口径8.2cm、体部最大径8.6cm、器高5.2cmである。短く外反する口縁部と、やや扁平で丸みをもつ底体部をもつ。底体部下半1／2は回転ヘラ削り調整である。

17は扁平な体部をもつ短頸壷で、口径6.2cm、体部最大径11.7cm、器高6.3cmである。体部外面下半1／2には回転ヘラ削り調整が施される。外面肩部には蓋を想定できる直径9.3cmの口縁部の熔着痕が認められる。

18は口縁端部を欠く瑠で、頸基部径6.2cm、体部最大径9.4cm、残存高13.2cmである。体部中位に凹線で画した文様帯に12点1帯の櫛描列点文を施した球形の体部と、基部から大きく外上方へ延びる口頸部をもつ。直径1.2cmの円孔は外面から穿孔される。頸部上半には条線数の不明な細かい櫛描波状文を施す。体部下半は丁寧なナデ仕上げである。

19も瑠で、18と比較すると、体部がやや扁平な感を受ける。口径12.6cm、頸基部径6.0cm、体部最大径9.3cm、器高13.4cmである。体部中位に鋭い凹線で画した文様帯に12点1帯の櫛描列点文を施した扁球形の体部と、基部から大きく外上方へ延びる口頸部

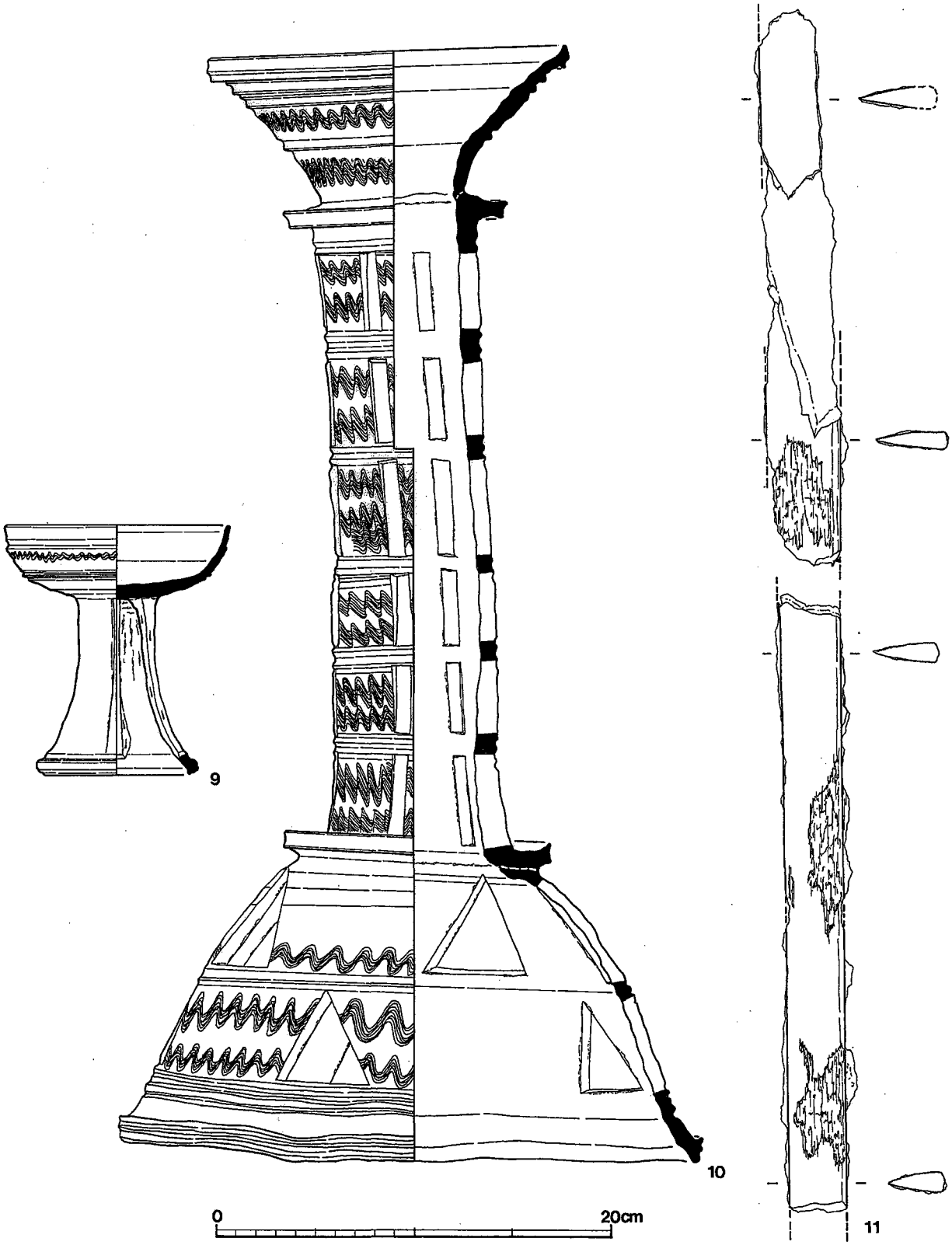


図4　広野西大廻3号墳出土の須恵器・鉄刀

口縁部と天井部の境には鈍い沈線１条を伴う稜が形成される。口縁端部は鋭く、内傾する凹面をなす。天井部外面の３／４は丁寧な回転ヘラ削り調整である。

13は12と坏蓋坏身のセット関係として展示されていた須恵器坏身で、口径11.4cm、受部径14.0cm、器高5.0cm、たちあがり高1.9cmである。本来のセット関係であるかどうかは不明である。内傾して延びる

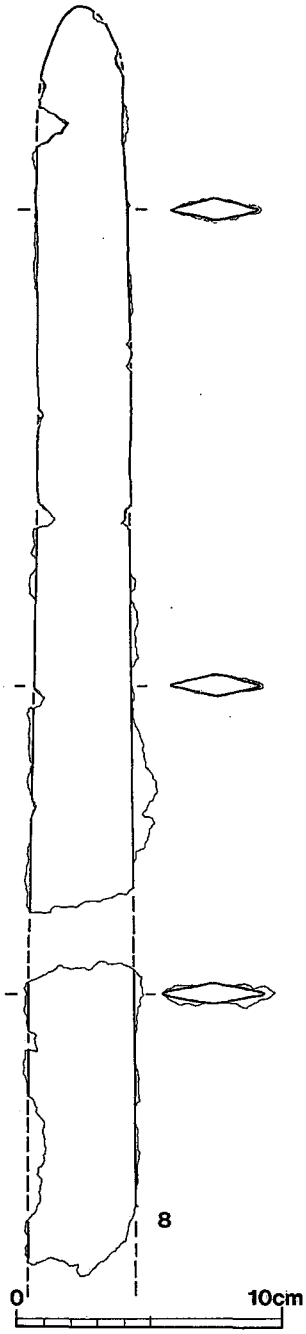


図3　広野西大廻4号墳出土の鉄剣

②広野西大廻３号墳出土資料

３号墳では、象形埴輪高坏（＝筒形器台）１、高坏１、鉄刀１、盌（赤褐色）１の小計４点の資料が「目録」にて確認できるが、現状では須恵器筒形器台、無蓋高坏、鉄刀が特定できる。

９は須恵器無蓋高坏で、「目録」の整理番号７に該当する。口径11.2cm、底径7.2cm、器高12.3cmで、概ね１／３個体が残存する。坏部中位には上下を凹線で区画した文様帯に３条１帯の稚拙な櫛描波状文が施される。坏部外面には回転ヘラ削りが確認できる。脚部は裾に向って緩やかに広がる長脚で、スカシは４方向に外面から穿たれ、内面における面取りが顕著である。

10は須恵器筒形器台で、中谷氏報告にある「目録」の整理番号３の資料に該当する。わずかに欠損部があるものの、完形の筒形器台である。基部から斜上方にまっすぐ開き、口縁端部を上方へ拡張して収める受部と、水平方向に大きく張り出す突帯を上端下端に伴う細長く延びる円筒部と、内湾しながら下り、端部でわずかに外反した後上下に拡張された脚部から構成される。脚部はスカシが施されていなければ、通有の器台の鉢部（受部）を伏せたような形態である。法量は受部口径18.2cm、受部基部径7.4cm、筒部上端突帯径11.5cm、筒部下端突帯径13.6cm、底径29.2cm、器高54.8cmである。

調整は概ね丁寧な回転ナデで、内面にはナデあるいは指頭圧痕も認められる。外面は８線１条を基本とする櫛描波状文を２段で飾り、筒部には５方向の縦長の長方形スカシが、脚部には５方向の上向きの三角形スカシが千鳥状に配される。いずれも櫛描波状文の施文後に外面から穿たれている。胎土には0.5～1.0mm大の白・灰色砂粒を含み、黒色微砂粒もわずかに含む。焼成は脚部の１／３がやや甘いものの概ね良好で、乳灰色～褐灰色の自然釉をかぶる。色調は明灰色～淡灰色である。

11は鉄剣で、「目録」の整理番号55に該当する。出土当時は長さ44cmと記録されるが、現状では大きく２分割の破片となり、残存長は57.7cmとなる。部分的に木質部が確認できるが、図化した裏面はタール状の付着物が顕著で観察できない。最大幅は3.7cm、最大厚1.0cmである。

③広野西大廻１号墳出土の資料

「目録」には、高坏２、台付把手付盌１、盌１、台付盌１、坩１、瑯２、片坏12、蓋坏12、蓋坏12、蓋坏６、鉄刀１、鉄鏃11、鉄刀子片１、鉄片１の小計64点の資料のほか歯牙など、他の古墳に比して豊富な資料がある。

12～20は須恵器で、概ねMT15型式併行期(8)のものと考えている。

12は須恵器坏蓋で、口径13.8cm、器高5.2cmである。

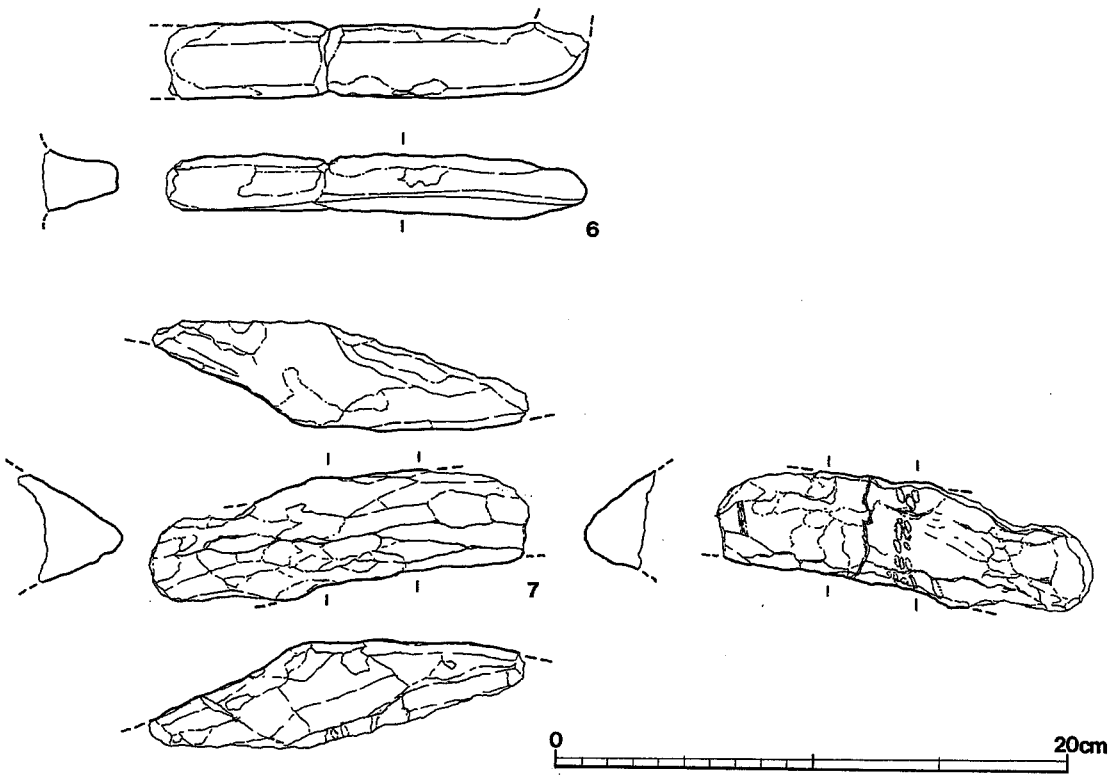


図2 広野西大廻4号墳出土の形象埴輪

により貼り付けられている。２段目の上部には２段目突帯の貼り付けに伴うヨコナデが確認できる。内面は縦および左上方へユビナデ調整が施される。突帯内面には指頭圧痕が顕著であり、突帯貼り付け時の内面の指頭圧痕が想定できる。

５は底径14.2cm～14.6cm、現存高10.9cmで２段目下半までが現存する円筒埴輪である。外面調整は5.5～６条／cmのタテハケを上方へ施す。２段目にはヘラ切りにより円形スカシ孔を穿つと推定され、スカシ孔の最下部付近が確認できる。突帯は断面が扁平な台形で突出は低く、ナデ調整により貼り付けられている。突帯が剥落した部分の器面に横方向の一条の凹線があり、突帯間隔設定の工具痕と考えられる。底部外面の擦痕もこの工具痕である可能性がある。底面から凹線上部までの幅は9.5cmである。内面は縦方向に上方へユビナデ調整が施される。

６は現存長16.5cm、現存高2.3mで家形埴輪基部の突帯と考えられる。壁体部に貼り付けられていたものが剥離したものである。直角に曲がる状況であることから、コーナー部分に相当する部分であろう。

７は現存長15.2cm、現存幅4.8cm、現存高3.0cmで器種不明の形象埴輪の一部と考えられる。弧状に湾曲する器壁に貼り付けられたものが剥離したと考えられる。鈍角な角を有し、中央には稜を持つ。丁寧なナデ調整が施される。剥離面の中央には紐状の圧痕が２条確認されることから、２本の紐状の繊維が器体本体側に巻かれていたと推定される。この紐状の圧痕は左上から右下に傾くことから、「１段の縄R」(7)である。また、この紐状繊維痕から１cm前後付近からは剥離によって、本来の接合面が失われていると考えられるが、本破片の成形時の指頭圧痕が顕著に残され、指紋も確認できる。前述した紐状圧痕から6.3cm前後にも細い紐状の圧痕が認められ、左下から右上に傾くことから「無節の縄L」とも考えられる。(阿部)

８は復元残存長49.6cm、最大幅4.0cm、最大厚0.8cmの鉄剣である。柄部は明確ではなく、本来はさらに長くなるものであろうか。断面では鎬が明瞭な菱形である。木質等が観察できないことから、鞘がなく、抜き身での副葬であったのかもしれない。

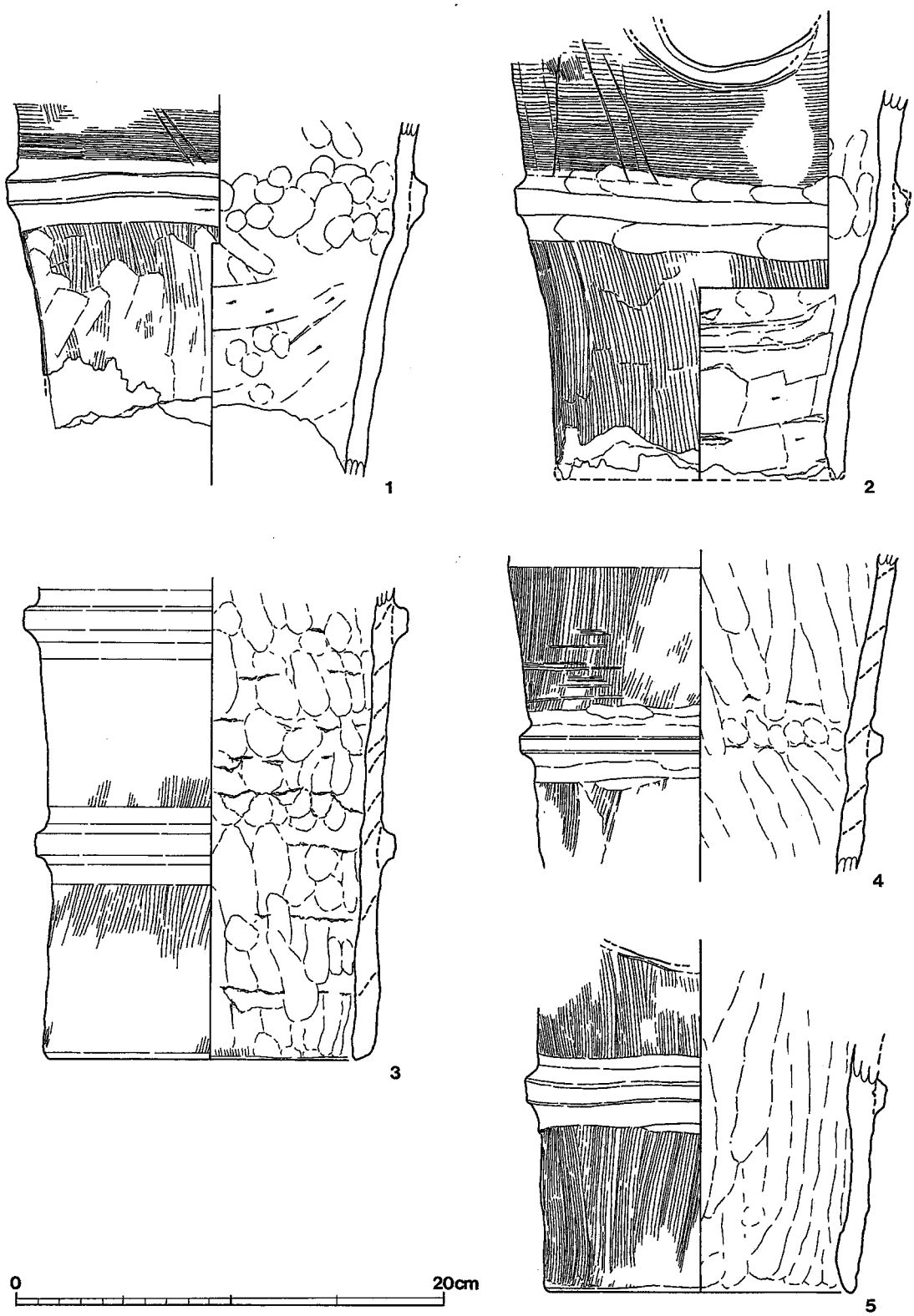


図1　広野西大廻4号墳出土の円筒埴輪

も10.6cmである。内面は粘土積み上げ痕をナデ消したユビナデ・指頭圧痕が顕著に施され、底部付近にはわずかにタテハケが確認できる。

4は現存高15.5cmの円筒埴輪である。外面調整は5～6.5条／cmのタテハケをやや右上方へ施す(1次調整)。2段目にわずかにヨコハケが確認できることから、突帯貼り付け後に2次調整として施したものと考えられる。突帯は断面が緩いM字形で、ナデ

鉄鏃、馬具、須恵器、土師器である。他の多くの木棺直葬を主体とする竪穴式盛り土墳は相対的に古く、とくに大型器台を出土した古墳からみて、６世紀はじめを降らないものである。」と記し、こちらにも「須恵器器台」として写真が掲載されている。また、付載２として「加古川流域須恵器編年」(4)の中で、広野２号墳の短頸壷、瑳ならびに野々池沢の瑳の実測図が掲載されている。

このように、広野古墳群は比較的早い時期から着目されてきたが、その実態は中谷氏の報告を越えるものではなかった。広野西大廻(にしおおば)古墳群の各古墳の個別の調査内容(5)は後掲した中谷氏の報告に譲ることとし、以下、出土資料について報告する。

3. 中谷新吉氏寄贈の広野西大廻古墳群出土資料（神戸市立押部谷中学校所蔵）

現在、地元の関係者から寄贈された歴史資料が神戸市立押部谷中学校の１階廊下に常設されたガラスケース内で展示・収納されている。このうち、中谷新吉氏が調査・報告し、寄贈された広野西大廻１号墳～４号墳の出土品の資料群について報告する。

これらの資料の整理・調査は、令和２年７月２日から８月29日の間、中学校から資料を拝借し、博物館において作業を行った。広野西大廻４号墳ほかの埴輪資料の図化・原稿執筆は阿部が担当し、その他の図化・製図・執筆・写真撮影は山本が担当した。

因みに、中谷氏報告の「廣野古墳出土品目録」（以下「目録」と略述）では、合計83点の資料を読み取ることができ、特に広野西大廻１号墳の出土遺物が量的にまとまっていることが明らかなものの、現状ではそのすべてを特定することはできていない。

なお、地元の方々から寄贈された広野古墳群には由来しない資料もあわせて展示されており、付載として後述することとする。（山本）

①広野西大廻４号墳出土資料

円筒埴輪５、家形埴輪片１、馬形埴輪脚部４、坩２、鉄剣１の小計13点の資料が「目録」で確認できるが、現状では円筒埴輪５（整理番号１）、形象埴輪片２、鉄剣１（整理番号52）がある。

１は現存高18.4cm、現存径14.6～18.6cm前後でやや楕円形を呈する円筒埴輪である。外面は全体に細かく方形状に亀裂が生じ、下端付近は表面が剥離している。突帯から下位の外面調整は、4.5条／cmのタテハケを左上方へ施した後に右上方へ強くタテハケを施す（１次調整）。工具が強く当たり、ヘラナデ状を呈している。突帯貼り付け後に、上段には８条／cmのヨコハケ（Ｂ種ヨコハケ）を施す（２次調整）。上段には右下斜め方向へ「二」状のヘラ記号がある。上下を欠失するが、突帯より下位がタテハケ調整のみであることから、底部を欠落した１・２段目に相当すると判断される。外面には黒斑(焼きムラか？)がある。突帯は、扁平な断面M字形で突出は低く、横方向のナデにより貼り付けられている。内面はユビナデによる調整痕が顕著で、１段目内面はさらに横方向および右上方にヘラケズリ調整が施されている。突帯内面は指頭圧痕が顕著であり、突帯貼り付け時の内側から指頭による押圧が想定できる。

２は底径12.8cm～15.4cmでやや楕円形を呈し、現存高20.2cmで２段目下半までが現存する円筒埴輪である。２段目に円形スカシ孔２ヶ所を穿つ。「ハ」状および右下方へ３条のヘラ記号がある。底部は内外面共に表面が欠落する。外面調整は４条／cmの左上方へのナナメハケ調整を施す(１次調整)。２段目は、突帯貼り付け後に４～５条／cmから８条／cmのハケメ原体による静止ヨコハケ（Ｂ－ｄ種ヨコハケ）(6)を施す（２次調整）。突帯は断面扁平な台形で、ナデにより貼り付け端面をヨコナデで仕上げる。２段目の２次調整ヨコハケと突帯上部ナデの切り合いから、突帯の仕上げは２次調整後であることがわかる。突帯上部のナデには横方向の擦痕があり、突帯間隔設定に伴う工具痕の可能性がある。内面はユビナデ調整を行うが、底部から８～９cm付近まで横方向にケズリ調整を施す。突帯内面は指頭圧痕が顕著で、突帯貼り付け時に内側から指頭による押圧が確認できる。

３は復元底径15.0cm、現存高22.1cmで２段目突帯まで現存する円筒埴輪である。外面調整は摩滅により遺存状況が悪いが、5.0～5.5条／cmのやや右上方向へのタテハケが確認できる。突帯は断面台形でナデにより貼り付けられる。突帯間隔は１・２段目と

三木市広野古墳群出土の資料をめぐって

—中谷新吉氏の調査報告と押部谷中学校所蔵の考古資料—

阿部　功、山本　雅和

要旨

昭和25～28年(1950-1953) に行われた中谷新吉氏の調査報告の再検討とともに、この報告に導かれつつ、中谷氏が神戸市立押部谷中学校に寄贈し、現在同校が所蔵・展示する三木市広野古墳群出土の資料についての整理・調査を通して、西大廻古墳群・野々池古墳群で構成される広野古墳群の出土資料の実態を明らかにする。あわせて、当館で所蔵する広野古墳群の資料（赤松コレクション）についても、資料整理・調査の成果を報告も加え、古墳群の特徴に多角的に迫る。

1. はじめに

神戸市立博物館が令和元年（2019）11月に常設展示をリニューアルして新たなスタートを切った。昭和57年（1982）に開館し、これまでは「神戸」の古代史を語る展示について、旧石器時代から概ね室町時代までの歴史を、発掘調査資料を中心にした考古資料を活用して展開してきた。しかし、これらのほとんどは教育委員会事務局文化財課の保管資料を借用したものであったため、リニューアルを期に返却することとし、原始古代を語るには不十分であることを認知しつつも、限られた面積で館蔵する実物資料を活用した「神戸の歴史展示」とするべく努めたところである。

こうした経過のなかで、開館当時（昭和57年11月）から借用し、適宜展示替資料として活用させていただいてきた標題資料のうち、須恵器筒形器台については資料担当者の怠慢もあり、近年まで当館で引き続いて、お預かりしたままの現状があった。

この資料に関連して、かつて『郷土史資料　その二　古墳関係書類』として神戸市立押部谷小学校がまとめられた中谷新吉氏の記録(1)(昭和25年、28年)があることは以前から知られていた。本稿はこれを浄書再録しながら、これまでに地元の方々から押部谷中学校に寄贈され、展示活用されている資料群についての調査とその報告を企画したものである。

また一方で、当館では赤松啓介氏が兵庫県内の遺跡をはじめとする各地で採集、保管されてきた資料を収蔵しており、当該の広野古墳群出土とされた資料についても、あわせてここで報告しておくこととする。

2. 広野古墳群について

『祖先のあしあと』(2)や『三木市史』(3)などで知られている神戸市と三木市の市境付近に広がる古墳群である。前者では、「雄岡、雌岡にも群集墳」と題した項で、中谷新吉氏の功績とあわせて、古墳群の概略を記し、「広野西大廻群集墳出土の装飾付高坏」として、当該資料の写真（中谷氏報告を尊重したのか天地逆）を掲載している。後者では、「広野群集墳」として紹介され、「広野ゴルフ場付近は、標高100mの、六甲山系から派生した高原状の台地である。この地に営まれた古墳は、二群に分けることができる。一群は、ゴルフ場東端に点在する６基、二群はその北方、字野々池沢尻にあるもので、かつては、60～70基あったが、現在４基が残っている。この群の主墳は、全長約30mの前方後円墳（後円部径16m、高さ1.6m、前方部幅14m、高さ1.5mで、造出をもつもの）と他に１基、やはり前方後円墳があったという。墳丘の周囲に円筒埴輪をめぐらし、礫を敷いた木棺直葬の主体部をもっていた。副葬品は、鉄刀、

口絵11　深江北町遺跡第12次調査（B80－B区）出土土錘・蛸壺（神戸市文化財課提供）

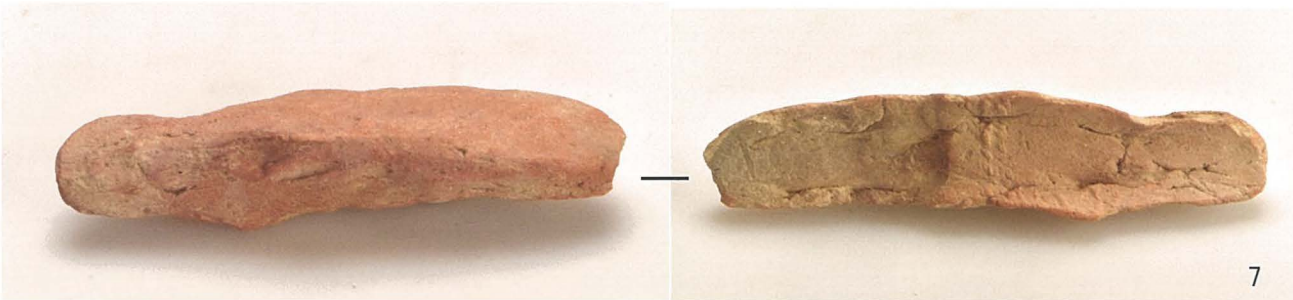
口絵9　広野野々池3号墳（旧：野々池沢 18 号墳）出土須恵器（神戸市立押部谷中学校蔵）

口絵 10
広野古墳群出土資料
（神戸市立博物館蔵）

口絵4　広野西大廻4号墳出土円筒埴輪

口絵5　広野西大廻4号墳出土円筒埴輪

口絵6　広野西大廻4号墳出土形象埴輪



口絵7　広野西大廻4号墳出土形象埴輪

口絵8　広野西大廻4号墳出土形象埴輪
粘土（おゆプラ）による型取り

口絵1　広野西大廻4号墳出土資料
（神戸市立押部谷中学校蔵）

口絵2　広野西大廻3号墳出土資料
（神戸市立押部谷中学校蔵）

口絵3　広野西大廻1号墳出土資料
（神戸市立押部谷中学校蔵）

Materials Excavated from Hirono Tumuli Cluster in Miki City
—Research Report of Mr. Shinkichi Nakatani and Archaeological Materials Owned by Kobe City Oshibedani Junior High School—

Isao Abe, Masakazu Yamamoto

Along with the re-examination of Mr. Shinkichi Nakatani's research report conducted in 1950-53, Mr. Nakatani donated the materials excavated from Hirono tumuli cluster in Miki City to Kobe City Oshibedani Junior High School, and the school currently owns and exhibits them. Through organizing and investigating these materials, we will clarify the actual situations of the materials excavated from Hirono tumuli cluster, which composed of Nishioba tumuli cluster and Nonoike tumuli cluster. At the same time, regarding the materials of Hirono tumuli cluster (Akamatsu Collection) owned by Kobe City Museum, the results of the material arrangement and survey will be reported, and the characteristics of Hirono tumuli cluster will be approached from various angles.